

文學士
 著隨天保久
 文韻文美
 葉紅夕



京東
 版藏堂倫有高日

美文

夕

紅

葉

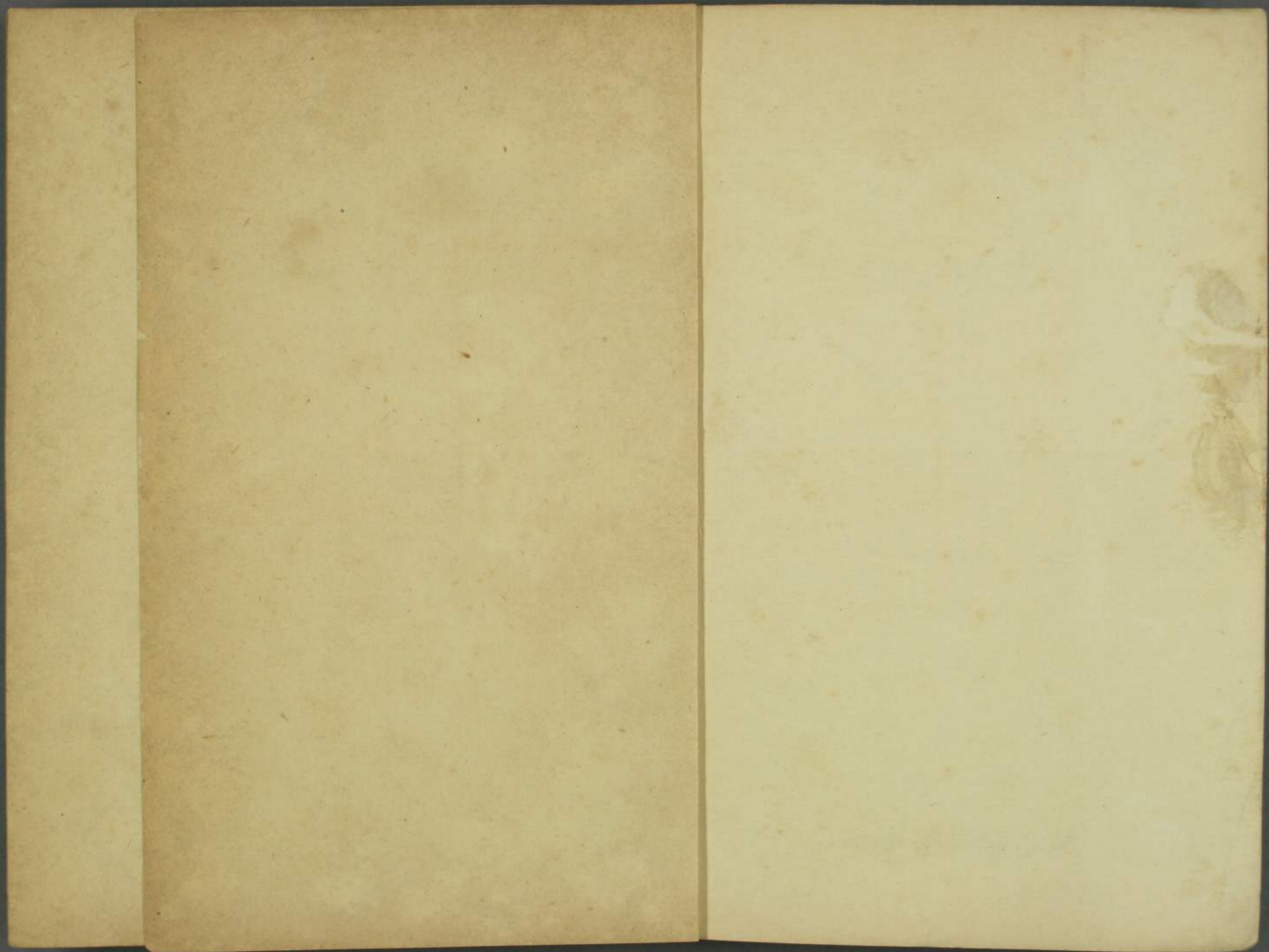
文學士

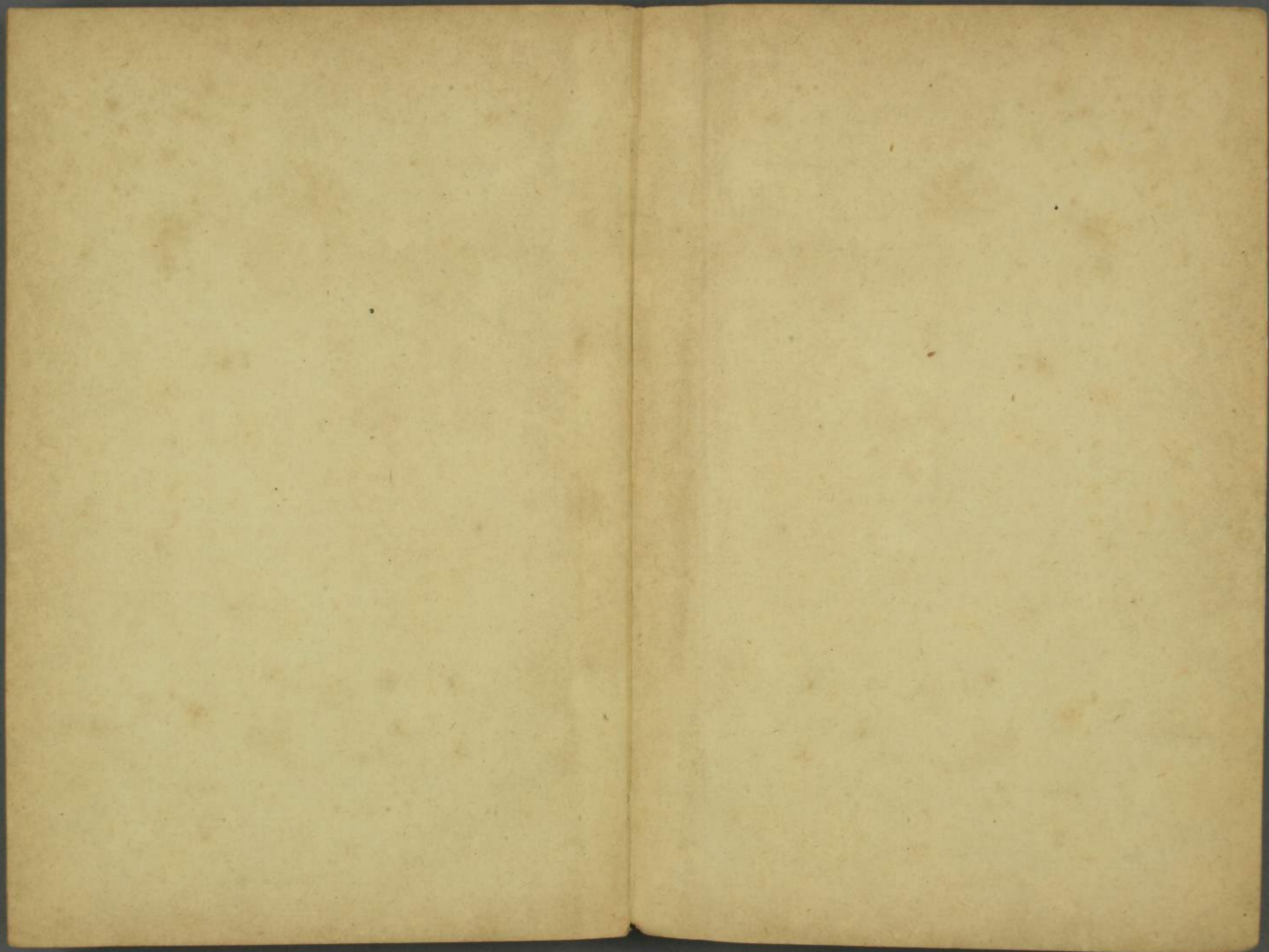
久保

天隨

著







みくにぶりなる、この種の文字、わが作もどより
多からず拙を藏する自知の明といふものから、
その一は、經營推敲の暇なきによる。かくて、文反
古の藻しほ草、かき集めて、からくも編み成し、
この一卷を以て、大方の鑑賞を冀ふは、我ながら、
あまりに厚顔なり。さばれ、雨の夜など、燈下の伴
侶ともなりなば、げに望外の我が幸といふべく、
満堂悉く西施なる中に、無鹽の醜みにくきが打交りた
る、なかなかに興ありげに見ゆることもあらむ
など思ふも、勇割に忍びぬ弱き心根ならむかし。

夕

紅葉

目次

忠 肝 義 膽	死を これ 恐れぬ	進め 兄弟	横吹 曲	海國 男兒	蝦夷 嵐	拔都 征歐の歌	高遠 城	三生 石
		 七七 七四 四六 三四 一七 一

目次
をばり

寒 驚
村 行
艶

別 情 道
離 緒 遙

一九一
二〇四

照 遊	約 近	憶 舊 賦	落 梅 引	讚 岐 院	早川の畔に立ちて	恩 愛	鎮西遊記の首に	そ の 一	そ の 二	憶 曾 遊	雨龍川源の一夜
		一七五	一六七	一四七	一四三	一一一	一〇八			一〇三	八四

夕 紅葉

久保天隨著

三生石

日影危く暮れかゝりし秋の野邊に、ゆくりなくも相見てしまふ、道連
となりし人の、やがて、ひと口、ふた口、言葉をかはせば、いたく心おどりせ
られつゝ、前の程の嬉れしきに引きかへて、今はなか／＼、唯だ一人、花野
の夕露にぬれましと、おもふも、尋常よつねながら朝あしたの雲の雨となり、夕の雨の
風となる、定めなき世の様こそ、うたて覺ゆれ。なにがしの法のりの深山みやまの奥
に在りと聞く玉川の、それならなくに、忘れても、交は輕薄の人とむすぶ
ことなかれ。さるからに、生前の情、死後の魂、忘れじの行末かけて、むつび
合ひ、長しへに身のほそり近く、寄り添ふ思なし、ものこそ、まことに有

りがたく尊きことのも極なりけれ。

名たゝる西湖のほとり近き天竺寺のうしろに、青色なせる一塊の大石あり、浩初このかた、風雨霜雪にさらされし名残は、苔痕濕うて、微碧を染め、なか／＼趣もあれど、處がら、目を留むものとはなく、題詠を残し人だにもあらざりき。いつの程なりけむ、この寺の僧人多きが中に、圓澤といふ一人の聖（ひん）ちはしけり。一たび墨染の衣、身にまとひし後、年月あまた過ぐしたりしが、人と言葉かはすことなきは、おろか、經文讀誦の功を積むこともなく、諸佛羅漢に參謁したることもなく、ひねもす、かの大石に倚りかゝり、たとへば泥塑人の如く、凝然として行ひ澄ましつゝ、厭きたる氣色も見えず、ある時は、さながらに振分髪ふさやかなる孫の頭に觸るゝが如く、やをら手をさし延べて、石面を撫でまはし、又ある時は石上に身を横へて偃臥し、雲行く空をながむるさま、おのづから心ありげなるを、寺中の人々、あやしきこと、の限りと覺えしものから、色も香も

なく、冷かに頑（かた）なる石、何の味かあらむと、其心を測り、かねて、あるは、之を煉りて天を補はむとするにやあらむといひ、あるは、法を説いて之をしも點頭せしめむとするならむといひ、あるは、之を點じて價貴き黄金を打ち出さむとするならむといひ、あるは、神通力をふるひ、之を叱して羊と化せしめむとするならむといひ、とり／＼に評議を凝ししものから、いよ／＼それとも定め難く、木のはしの其又はしとも言ひたげなる生法師、青道心がつれ／＼の折ふし、こよなき笑の種となりけるが、石はいよ／＼軾はれ、今は瑩朗（えいろう）ながら鏡と見まがふまでにもなりぬ。

頃は天寶十一年、安祿山、叛旗を范陽に翻し、程なく九重の帝都にまでも攻め入りしとき、洛陽の地に一人の猛將、名を李愷と呼びし人ありけるが、兵を率ゐて敵を拒ぎしに、運命つたなく、わづか一戦にして脆くも敗れ、其身は遂に逆賊の手にぞ死にける。その忘れ形見の獨子を李源と呼びけるが、なつかしき父の國難に斃れしと聞くや、悲痛の念、堪へがた

く覺えしかば、終身君にも仕へず、妻をも娶らじと堅く心に誓ひ、いかにもして、不俱戴天の仇敵かたきを打ち取らむと、劍に杖かたいて、四方を遊歴しけるが、いく程もなく、郭子儀、李光弼の二人、東京を克復し、天下再び太平となりければ、わづかに心を慰め、先づ洛陽の故里に還らむとしけれど、待て、しばし、世の人の爲に言ひ囃されて、適れ文武の材幹、心にもあらぬ仕官せでは、叶はぬこともやと、やがて姓名を改め、いづくにもあれ、俗塵を離れたるところに隠れ住み、心のどかに眞如の月をながめむと決せし折しも、西湖山水のながめ、天下に稀なるよし聞き傳へければ、千里を遠しとせず、旅衣たつを遅しと、はる／＼南に向ひ、さて其地に着きて見るに、湖山さながら、畫の如く、うら／＼かなる春の日影、一しほの句を傳へ、百花紅發して、萬柳緑を撚り、鳥歌ひ蝶舞ふ景色の艶なるにつけて、畫舫を浮べ、錦纜を解き、笙歌管絃の遊をなせるもの引きも切らず、これのみをうとましく覺えければ、物靜かなる住處すまひもがなと、晚岫青迷ふ九里松を

過ぎ、遂に天竺寺にたどりつきとある寺中の房に身を寄せつ。こゝにつく／＼思ひ廻らせば、仇の頸血を我が劍に染めざりしこと、今に遺恨に堪へず、形のみは居士有髮の僧と見ゆるものから、悲憤の念、いやましに募り來て、あるにもあらぬまでに、身を悶え、今は人を見るだに、うとましとて、獨り戸を閉ちて一室にこもり居たりければ、寺中の人々、かの圓澤とひとしなみに見て、生きた木佛二つ御座るなど歌ひはやしけり。
かくは行ひ澄まししものから、李源は、まだ悟り切らぬ身の、さすがにつれ／＼に耐へかねしことありと見えて、ある時、杖を曳いて寺中をめぐる、先づ蓮花峰の麓にいたれば、亂石山根を擁し、千竿の修竹、その隙間より生ひ出で、雲を凌いで風にそよぎ、まことに人間六月の熱を知らず見上ぐれば、層巒疊嶂、高く天を支へ、雲氣涼しげに飛びめぐれり。かゝる靈境のけしき、心も空にあくがれて、しばし去りがてにせし折からに、ふと見れば、傍に一塊の大石あり、その上に異形の僧たゞ一人、凝坐して居

たりけるが、童顏仙骨、氣宇凡ならず、白毫の光を添へなば、僧伽の聖の再生にやと疑ふばかりの尊さに、しばし見ほれて佇みけるが、圓澤も、やをら頭を擡げて打ち見やりつ。二人互に棄て難きおもひあるは、眼角にも著るしく見えけるが、もとより定まれる因縁ありけるにや、忽ち手を把りて相迎へ、語り出づる言葉さへ露たがはず、戀々として別るゝに忍びざりければ、こゝに三生の約をぞ結びける。それより後は、朝夕同じ處にならび居て、形影長しへに離れず、春は花を拈り、秋は月を印し、夏は風に吟じ、冬は雪を擁し、石上には二體の羅漢をぞ据ゑつけゝる。

山中曆日なく、二人ともに世の煩を忘れしのみか、今は其身をさへ忘れはてしが、ある日、雪の霽れける朝、李源は圓澤を伴ひ、寺後なる高峰の絶頂に登りけるに、脚下一面の銀世界、はるかに海門の白練と連り、眼を射る寒光晶々として、際涯あるべしとも覺えず。李源は、かねて聞き傳へし蜀中の勝境を思ひ出で、はたと膝を打ち鳴らし、やがて圓澤に向ひ、峨

帽の積雪は宇内の絶觀とこそ聞け、吾と卿と、こゝに閑居して、空しく寂寞に終らむよりは、いでや行李を收めて、今生の思ひ出に名山勝水を見めぐらむは如何にといひければ、圓澤思案顔、半時ばかり經てし後、わづかに口を開き、天地淑靈の氣凝り成しゝてふ名山に朝禮するは、吾とても、もとより願ふところにぞある。そは兎まれ角まれ、若し蜀に遊ぶとならば、道を長安に取り、褒斜谷より行く方、よろづに便よかるべしといふ。李源かさねて、いなとよ、吾さきに都を離れて、はる／＼と此地にさすらへ來しは、俗塵を避けむためなるを、今旅路の首途に、玉敷の都の土を踏むは、吾ながら心に愧かし。それよりは、荊州に出で、流に溯りて上るこそ然るべけれといふ。圓澤默然として語らず、やゝありて、天を仰ぎ長嘆して、いひけるは、禍福は人の咎ならず、萬事天にまかせてむとて、何事も李源の言ふがまゝになし、舟をもとめて、武林驛に出で、湖廣荊州を過ぎ、やがて南浦に至りしに、折しもの北風吹きすさびて、江水波立ち、魚龍飛舞

するさま、凄じきまでなりければ、舟人のいふに任し、纜を枯蘆折葦重ね合ひたる岸邊につなぎて、物うかりける旅の空の日和を待ちわびてけり。

ある日、亭午や、過ぎし頃、二人ともに船窓の下に坐し、蓬を掀けて江上の風景を眺めけるに、近きあたり、一帯の長林、烟を帯びて黒みわたり、其下に一軒の破屋あり、竹の籬をめぐらし、春待ちがほなる野梅の兩三株、斷橋、流水のほとりに立てり、折しも、門の扉を押しひらきて、出で來りしは、三十あまりの女にして、着たる衣服は清らならねど、さまかたち、さばかり醜からざるが、手に甕を提げて、江水を汲みける。圓澤ふと首を回らして、一目見し後は、いたく心を動かしたるさまにて、李源と差し向ひ居るも、懶きまでなり。李源いぶかしきことの限と覺え、吾と卿と、すでに三生の盟をむすび、情は骨肉も及ばぬまでなるが上に、こたび相伴うて千里の旅をなし、日ごとに未知の山水を眺めすぐし、興いと多しと覺ゆ

るを、今日しも浮々し玉はぬはいかにぞやといへば、圓澤、今日こそ卿と長しへに別るゝ時の來りしなれといひ、なほひたすら打沈みてありければ、李源重ねて、峨嵋の山までは、必ず伴はむと仰せられしを半途にして、約を變じ玉ふは如何に。よろづに敏からぬ此身、それと知らねど、卿に罪を得たることなどあらば、曲げて赦し玉ひね、世の常の人のする如く、さばかり拗ねて見え玉ふは、いかにも心得がたしと打ち怨ずるを、圓澤聞きもあへず、いかで、吾、卿に背かむ。吾が一身、後の世に生れ來ぬべき地は、げに此處なりけり。峨嵋巫峽のけしき、さもこそと魂飛ぶばかりなれど、この生、すでに限あり、天の數周り來ぬる今こそ詮なけれといふ。李源聽きをはりて、大に驚き、怪しきことのくさく、のたまふものかな。卿が生れかはりて來玉ふどころは何處ぞや、なほつばらに聞こえて、吾が疑の霧を散せしめ玉へといへば、圓澤、かの水を汲み居る婦人と其家こそ指し、あれは吾が後身の母にして、かの家こそ吾が新に住むべきところ

なれといふに、李源からくくと打ち笑ひ、生死の間、相去ることの遠きは
更にもいはず、幽冥の事、凡智を以て料り知り難きを、何をしるしに、かく
は聞こえ玉ふかと問へば、圓澤かの婦人は姓を王と呼ぶなるべし、す
に身もごりてより三年を経ぬるが、吾この地に來らざりしが故に、胎中
たゞ形骸ありて神魂なく身二つに生み落し得ぬなり。先の日、寺を出で
しとき、路を長安に取りて、蜀に行かむといひしは、之を避けて、せめては
數月の命を延ばし、卿の望に副はせむが爲なりきといふ。李源もし前日
避くるに道あらば、今日などか逃れ得ざるべき、風もや、和たり、舟を進
めて一刻も早く此地を立ち退かむ、穢取はなきかなど、喚き出づれば、圓
澤ほゝ笑みながら押しとどめ、今すでに後身の母と相見てしからには
逃るべきやうもなしといひながら、李源が獨り悶え居て胸をたたくを
打ち見やり、更に語をつゞけ、こは卿の罪にあらず、まことに拙きは、わが
命數なりけり。さばかり悲しみて、なにかせむ。卿もし吾を忘れ玉はずは

今より三日を経てし後、かの家にて、新に生れし赤兒沐浴せさせむとき
尋ねても見て、前生後生、兩つながら露違はざるを知り玉へ。その徴には
まだ物言へぬ穉兒ながら、必ずや嬉しげに打ち笑ふべしといふ。李源、わ
れ等二人、今生に相遇うて、花を並べ葉を合すまでなりしは、前の世に於
て同じ種を結びしにやあらむ。さばれ、いま別れまつりし後、又重ねて相
遇ふ日のあるべきかと問へば、圓澤しばし打ち案じながら、凡そ人の命
は、根を絶えし浮草の水に漂ふが如く、さそふ水だにあらば、胡越遠く隔
りぬとも、いかで到らざるらむ。卿もし長しへに情を忘れ玉はずば、今よ
り天の曆數、一紀を経たる後、月の光、千里の外にくもりなき仲秋の夜、西
湖に近き葛洪川の邊を尋ね見玉へ、その折にこそ、再び相見て、いよいよ
三生の約を遂げ、また石上の盟を完うすべけれといひつ。
かく語りをはりし後、圓澤目を閉ぢて、また物言はず。李源、心酔へるが
如く、嘆き悲みしものから、漸くに思ひかへし、湯を呼び、衣を着換へさせ

などし、傍に守り居けるが、やがて、諸行無常の鐘の音さびしき黄昏の頃眠るが如くに圓寂し畢んぬ。

次の日、李源は舟人を遣はし、かの家の消息を探らしめしに、王氏の家昨夜玉の如き男兒を擧げしことなりければ、深く心に感じ、三日となりし朝早く、かの家に赴きしに、門を出で来る男あり、かの女の夫にもあらむとおもひ、呼びかけて、それとなく問へば、新に男兒を擧げたるが三日の間、ひねもす、夜もすがら、たゞ啼き叫びて今に止まずとのことなり。李源心におもひけるは、かの圓澤、吾に約して、笑はむといひしが、啼き止まぬといふは如何にぞや。さばれ、もし吾を見なば、約の如く笑ふにやあらむとて、彼の男に向ひ、吾に不思議の術あり、汝の爲に其子の泣くを止めしめむといひければ、大に喜び、やがて迎へて内堂に入れ、赤兒をかき抱きて、李源に手渡しける。つく／＼と打ち見やれば、眉目の細かしきところまで、ありし昔の圓澤に其儘なり。李源之をかき揚げ、膝の上に打

ち載せ、咄、汝、元來笑ふといひしを、かばかり泣くは甚麼といへば、かの赤兒、耳を聳て、聽き居るが如く、晴をきつと定めて、李源を見上げ、やがて莞爾としてほゝゑみけるが、愛らしき靨は、しばしの間うせもせで、雙頬の真中に刻まれつ。それより、はたと泣き止みければ、家の人々、大に喜び、さまざまに李源をもてなしけれど、契深き友を喪ひし悲、去りもあへねば、程なく辭して出でむとし、赤兒の肩を軽くたゝき、耳に口よせ、十三年後の約にな背き玉ひそといひ、又船に上りけるが、峨嵋の景色、獨り尋ね見むとも覺えずとて、あはたゞしく漕ぎもどさせ、程なく杭州につきて、またも天竺寺の舊棲にかへり來ぬ。

それより、例の石のほとりに座を占め、その昔、圓澤が唯だ一人ありしときの様に異ならず、烏兔匆々として飛ぶが如く、すでに十餘年を経たり。世にも稀れなる仙約に違はむは、心苦しとて、秋の初めつ方より、朝には兩峰に上り、暮には六橋に立ち、ひねもす葛洪川畔を離れず、尋ね巡り

けれども時知らねばにや、さるべき人にも遇はず、兩地路遠く相隔たりければ、上の空のはかなきのことのやうにも思はれけれど、身後までも一誤らず看ぬき、世に神人ともいひたげなる圓澤の聖、吾この交堅ければ、よも信を失ふことはあらじ、あはれ、早く其日になれかして、大空わたり行く天の日の影を、脚遅しと怨じつゝ、

待ち設けし三五の夜は、秋高き碧落、洗はれし如く、やがて東山の巔にさし上りたる月の光、皎々として晝を欺き、おきあまりし露は、その儘に霜とや凝るらむ、野も山も、さながらに白みわたれり。李源は、暮るゝを遅しと、おはたゞしく杖を曳いて、例の葛洪川畔にいたりて、しばし佇めば、谷川の流、一すぢを隔て、かなたの山に、牧笛の聲、瀏唳として響き出でぬ。耳を澄まして聞く程も、あらせす一人の牧童、身には紫花布の服を着け、髪は菱角髻に結ひなしたるが、すぐれて肥えたる一匹の斑牛に跨り、悠々として林中より出で來り、やがて岸の邊に下るや、笛を腰にはさみ

いとも聲高に、李公、恙なくおはし、かといふ。李源、おのが姓名を呼ばれしを訝かしく、覺え眼を拭うて打ち見やれば、かの牧童、老少の別あれど、姿容風貌、今も夢寢に忘れかねし圓澤に少しも違はず、よろこび勇んでこの日頃、いかに待ち侘びしかを察し玉へ、どくく河を涉りて此方に來ませ、越し方の事ども語りつゞけて、この月の夜を心慰ぐさに明かしてむといへば、かの牧童、答はなく、高らかに朗吟していひけるは

三生石上舊精魂、賞月臨風不要論、慚愧情人遠相訪、此身雖異性常存
歌、すでに罷みぬ、牧童いと物しづかに、期を愆らで、こゝに來玉ひし李公は、まこと信士にぞおはすなる。この流を涉り、手を把りて語りまゐらせむは、いとも易きことなれど、恨むらくは、卿の俗縁、未だ斷えず、寄り近づくも甲斐なからむ。あはれ、願はくは、勤修怠らぬやうに心懸け玉へ、天地は、なかく情あるものぞか、しといひて、重ねて又一首の詩をば誦し出でける。

身前後事茫茫、欲話因緣空斷腸、吳越山川尋已遍、却因烟棹上瞿塘
 李源、心いらだち、此方より水を渉らむとて、淺瀬を尋ぬる折しも、牧童は
 牛を叱して、しづくくと歩ませ、野山を籠めし烟の奥深く乗り入りける
 が、笛の聲、今は聞こえず、吹くや夜あらし、煩惱の雲を拂へば、真如の月影
 いよ／＼冴えて澄みわたりぬ。

三生の約、すでに完かりければ、さしもの李源、今は思ひ残すこともな
 しとて、踵を廻らして歸りし後、寺僧に請うて、さゝやかなる庵を例の石
 上にむすび、依然たる有髮の禪居士、ある時は花を拈りて微笑し、ある時
 に壁に面して觀心し、程なく無生の妙諦を悟り、めでたく一生を過ぐし
 けるとかや。

高遠城

(上)

烽の烟漲る空のけしき、する墨の黒雲、ものすごきまで閉ぢこめて、高
 照らす日の影さへ拜まむよしなければ、神代のむかし、天の岩戸のため
 しを目にぞ見る、どこ闇の世に、きらめくや兜の星影、ひらめくや劍の稻
 妻、戰國割據を事とする時に方りて、天は絶代の將種を下して、大八洲の
 脊髓といふなる、わが信甲兩國の土を管せしめつ、新羅三郎の苗裔、家傳
 の弓馬韜略は、世にたぐひありとしも覺えず、機變權謀は、異域いにしへ
 の曹孟徳もものかは、すでに上游の地を占めて、慄悍の兵をしたがへけ
 れば、坤輿を吞まむす鋭き鋒先、誰とゞめむとするものあらず、大菱の旗
 風の下には、靡かぬ草木とともなく、關左無數の豪傑をして、冑を軍門に
 脱いで、馬前の土に跪かしめたるに、たとへば風の前の塵、猛きものも遂

に亡びぬといふ世の習の、さてもうたてくて、おはれ野田の城外、凍れる月影に吹きすさぶ笛聲さむき夜、暗中の銃丸は、ゆくりなくも大星をして地に落さしめ、驚倒の餘、輿中疾を護してかへり、やがて青石一棺、萬古の恨を併せて湖底に沈みし後は、惺々惺々を愛すといふ北越の俠將、箸を抛つて好敵手を失ひし嘆ありしのみ、狐の如き尾張の織田猫の如き三河の徳川、その爪牙を磨いて、隙あらばと待ち受けたるに、二嬖權を弄して、四郎の驕愚、爲すに足らず、懸軍遠えんにいたること數回なりしも、いたづらに銳を損し、鋒を折りしのみ、憐れむべし、大厦の將に倒れむとするや、いかで一木の支ふべき、宗社の運、正に旦夕に逼りてぞ見えたりし。

躑躅が崎の館は半ば取りこぼたれて、新府の備は、未だ固からず、謀臣すでに老いて、勇士多くは斃れぬ、武田の一門、打亡して、甲信の二國を切り平げむ時は、今こそといひ送りて、婿を信長に容れし木曾義昌、そのむかし、首刎ねらるべきを救はれて、信玄の婿となり濟ましし身の、恩を仇

に、利をのみ貪る、いやしき心根の、これを人面獸心といはむ。窮鳥を彈射し、その炙りたる肉一片に、舌鼓鳴らさむとせしこそ淺ましけれ。しかも二嬖の不忠なる、君の聰を蔽ひ盡しければ、勝頼いかでか報を信すべき。やがて隱謀大方ならず聞こえしに及びて、はじめて兵を遣りしも、期すでに遅かりければ、彼方かたより迎へ撃たれ、鳥居峠の一戦、三千の兵士、一もみにもまれて、もどより將帥の器量なかりし武田信豊、ほうくの態にて逃げかへりしこそ、拙きことのかぎりなりしか。

かくては木曾が申條、詐にあらずとて、織田家の世子中將信忠、七萬餘騎に將として木曾口より攻め入り、すでに鳥居峠を越えて、やがて、桔梗が原に打つて出でむとぞ聞えたる。これに繼いで、伊那口よりは信長十萬騎、駿河口よりは徳川家康三萬騎、飛彈口よりは金森なにがし八千餘騎、上州口よりは北條氏政四萬五千騎を以て打ち入らむとするよし。五路の兵馬、ことごとく峽中に入りて、帶甲天地に滿つらむ日、げに遠から

じとおもひ知られぬ。

たごへば、珠數つなぎし絲の、弗つとちぎれて、珠は地上にからりと落ち散りけむ如く、さしも固めし諸城の中、松尾の城主小笠原掃部は、信忠の先鋒を迎へて降を納れ、飯田にこめ置かれし保科彈正は、次いで城を明け渡し、深志の馬場民部は城を棄て、引きかへし、大島の日向玄藤齋は、いづくぞ知らず、にげかくれぬ。いづれも、腑甲斐なきものども、敵の勢の數多きに聞き怯む、あはれ丈夫の耻をしもおもはず、うつせみの命おしさに、旗を倒し甲を解きたるよ、かくて金湯頻に守を失ひ、信忠の一手、鞭を揚げて南を指し、潮の如く峽中のみだれ入るべかりしと、さに方り、さしもの敵をして後患を憂慮せしめ、風前のごもし火、いづれ消えなむ、はかなき命をしばし護りとよめしは、一方の固の未だ破れざる高遠の城のあればなりける。

城は叢爾たるものから、後に萬壘の山を負ひ、藤澤三峰の二川、はるか

に信甲の境より流れ來り、奔流箭のごとく、自然の壑濠をめぐらし、そが合注したる流の末は、天龍川に入ることぞ。そなたは遠く開けて、前に平曠の大野を望むべし。峰高き羊腸の山坂、鳥ならでは翔りがたく、巖峙ちたる雁齒の嶮しさ、獸といへども通ふに疲れぬらむ。かぶと山の名の信玄にゆかりあるは、いふにも及ばず、支城の一角に勘助郭の名の残りたるを見るも、築きし人は推せられぬべし。城樓高く見あぐるばかり、白堊の粉牆、相連るところ、押し立てたる白旗、幾旒なるを知らず、殺氣隠々として陣雲黒く蔽ひかゝり、樹色怒容を帯びて、なかく、凄じくぞ見えたりし。

守城の主將は勝頼の弟、五郎信盛、今の名は仁科薩摩守晴清、相従ふ人々は小山田備中、渡邊金太夫、羽桐九郎次郎、小菅五郎兵衛、春内河内守、今福又右衛門、畑野源左衛門、諏訪勝左衛門、飯島民部、同小太郎、今福筑前守、神林十兵衛を始として三千餘人、兄には似ぬ英邁勇武なる五郎が、平生

士を愛せししるしの、こゝにあらはれて、城守すでに一月に及ぶといへども、未だ一人の難を逃れしものあらず、將士心を一にして、敵はやく寄せよかし、おもふまゝに快戦して、君が馬前の土とならむものをと、少しも騒がす、なかくに諍まりかへりて、守いよ、堅かりける。

(中)

そのむかし弓馬のほまれ世に高かりし名家の末路、よしや今滅びぬらむ時とはいへ、一推しに枯木を倒すとは同じからずと、かねてよりおもひはかりし中將信忠、飯田に着陣して、この事を聞きつたへつ。さあらむには、わが麾下をもて、一もみに攻め落して呉れむすと、自ら一萬餘騎を以て搦手より向はれけるに、次いで森武藏守河尻肥前守等、降將小笠原掃部を嚮導として、その勢、總じて二萬餘騎、大手に馳せ向ひ、十重廿重に圍をめぐらし、晝夜息つぎあへず攻めかけ、るに、銃の音、喊の聲、山河も破碎せむを疑ふばかりなりき。

執扇落日を招くよしなく、社稷の運、今をかぎりと見えたるからは、この城、長く忍びこらへぬるとも、益なきわざになむ。いざや、最後のおもひ出に、花々しきいくさして、朽ちせぬ譽を末代に残すべし。まことに一門のものども、はかなき露のいのちを惜むのあまり、義をすて、女々しくも敵の馬前に降り、剩つさへ首はねられて、辱を殘すこそ口惜しさの過ぎりなれ。かくては先祖新羅三郎をはじめ、近くみまかられし父の威名も、一朝にして、けがされぬべし。人は兎まれ、かくまれ、吾のみは、しかせじとおもひ定めし信盛が心ぞ健氣なる。

信盛その目のいでたちは、仁科家重代といふ桐葉の鎧に、龍頭の兜をいたゞき、信濃藤四郎と號せられし三尺七寸の太刀を佩きたり。かくて大手の方には、小山田備中をして向はしめ、自ら一千四百の逞兵をしたがへて、朝まだき、搦手の門をひらき、喚き叫んで颯と打て出でつ。驚く敵に息なつかせそ、攻めよ、蒐けよと、手勢を指揮して縦横にかけめぐり

その心ひとつに信忠に近づき、組んで討たむとおもへば、七度までわたり合しが、遂にかけ隔てられて、意を達せず。勇猛鬼神に似たる、さしもの信盛、身鐵石にあらざりければ、打ち出す敵の彈丸に太股を貫かれつ。戦は辰の刻より始まり、午の刻にわたりて、味方は百七人を損じ、敵の首二百七十餘級を得たりしが、名もなきものども討ち取りて、あたら罪なつくりそと、やがて、さつと城中に引き入れたりける。

これより後は、敵も左右なく討てかゝらず。城中にては鳥銃の名手をすぐりて、牆の如くなれる敵をめぐめて、打ち倒しけるに、無なること一たびもなく、信忠の麾下、屈強の勇士、數をつくして討たれければ、寄手も侮り難く、やおもひけむす、み出で、攻めむとするものはなく、たゞ遠攻にぞしたりける。

河尻備前守は、大手の門に向ひけるが、あるとき、信忠の御前にまゐりこの城の持ちこらへ候は、要害堅固なるためと申しながら、外に故こそ候はめ、兎角甲府を攻め落し、四郎が首だに取らば、他の枝城は攻めざるに落ち候ふべし。たゞ勝頼は安穩に御座すにより、敵も後だのみありて、鋒先當りがたく候にやあらむ。當城は押へを置かれ、一日も早く甲府に攻め下り、勝頼を御退治の事しかるべしと申しければ、信忠つくつくと打案じて、武田家の鋒先、強勇にしてなか／＼に侮りがたきは、信玄よりのことにして、かねて知るところなり。この高遠城だに見らるゝ、如くなれば、勝頼の根城は、さもこそと思はるれ。まして窮鼠猫を嚙むといふなる最後の合戦は、一しほのことなるべし。所詮大事の敵なれば、父君の進發を待ちて、誅伐せむこそ、しかるべけれ。この城だに攻め落さば、甲府も攻めやすかるべく、今はなか／＼いくさを移すべき時にあらず。さはいへ、攻めあぐみたりとて、徒に日を消さむは、又しかるべからず。唯だ謀を以て落すこそよけれとぞ答へられける。

城中の勇士は、敵の攻め寄せぬに、なか／＼惱まされたる心地してあ

りけるに、ある日の曉はやく、搦手を守る雑兵が、矢文を拾ひたりといふ訴あり、信盛いたく訝りながら、折しも前に侍りし老臣に讀まして聞けば、こはそもいかに、信忠が降を勧めし書にてぞありける。過ぎにし二月二十八日、勝頼は甲府の舊館きやうかんに於て御生害あり。一門の面々、或は殉死し或は降人となりて、甲信の間、すでに平均したるを知らず、やおはす。さるにても、仁科殿たゞ一人、堅固にも城にこらへらるゝ條、最も殊勝とやたへ申さむ。もし降人となりて出で玉ふに於ては、信忠、屹度御命を申し請け、本領安堵致させ候はむなど、かきつけたり。信盛さゝをはりて、莞爾と打笑み、信忠おのが心にくらべて、われを付度つかるこそ安からね。たとひ敵兵山河にみちゝて、路なきにもせよ、誰ひとり注進せしものなき上は、勝頼いまだ御生害ありとしも覺えず。かくいふは、われをたばかり降らしめ、世に穢らはしき、縲紲の耻を受けしめし後、首など斬らむとにやあらむ。又そのいふこと詐ならずとするも、不義の富貴は浮べる雲に似たりとこそ聞け。信玄の子たる吾は、所詮この城の士となる外は、あるべからずと、さすがに鐵石の心腸よりしぼり出でしことの葉、いとも涼しく聞え玉ふ。

かくて信忠は城中より返り事のなきを訝かしく、おもひてや、こりずまに、使を遣り言を巧にして、ひたすらに降を納れ城を致さむことを勧めたりしが、信盛つひにうけひかず。帳中の壯士は、やり雄のともがらは彼の申條、奇怪なりとて、信盛に知らせず、ひそかにその使たりし僧をどらへ、鼻をそぎ、耳をきりて追ひかへしければ、信忠こゝに、大に怒をなしいでや目に物見せて呉れむすと、自ら短兵急に攻めかゝりつ。城の後は峻しきをたのみて、さまざま勢せいを置きたりとは見えすと、別に一軍を派しとだえがちなる雲の棧かげはし、樵蘇の路をもとめて、その山にのぼらしめ、烽火を擧げて相圖となし、鳥銃を絶間なく放たしめければ、百雉に足らぬ孤城、すでに外援を絶ち、腹背敵を受たるからは、しばしも支へず、信盛いか

に鬼神をとり挫がむ勇ありとも、翼なき身の、とても逃れはてじと見えたりける。

(下)

頃は天正十年三月二日の朝、主將信盛、搦手の高やぐらに攀ぢのぼり大音聲を揚げて味方をまねきつ。吾こそは昨日の防戦に、深手負ひたりければ、歩行自在ならず、目ざましきはたらき爲さむよしもなし。今日にも落ちなむこの城の命はすでに定まりけるぞ。おのゝ最後のいくさして、吾に見せよと呼ばゝりければ、かねてより心を一にしたる滿城の士卒、誰いなむべき、かしこまり候といひもあへず、大手搦手、一度に門を押しひらき、喊の聲いまして、馳せ出でぬ。先づ搦手よりは、小幡周防守、同五郎、春日河内守、畑野源左衛門、今福又右衛門等、一千七百人をしたがへ大波のくづれたるごとく、信忠の陣へと切り入り、備七段まで打ち崩し、首を切るごとく、四百七十級、大手よりは、小山田備中、羽桐九郎、小菅五郎兵衛、今福、筑前守、諏訪勝左衛門、六度まで敵を切り、靡け、得たりし首の數、二百七十級とぞ注せられける。

かゝるごころに年は三十五六ばかりなる女の、丈にもあまる緑の黒髪、白き練絹にて束ね、小具足を着下ろし、薙刀を提げ、われこそは諏訪勝左衛門の妻よと名のりかけ、七八人目たゝくひまにきり伏せつ。音にのみ聞きて、目には見ぬ、いにしへの巴板額も、これには過ぎじと、敵も味方も、しばしは、どもにあきれてありしが、雨か霰かと疑はるゝばかりなる銃丸に、むごや數處の痛手をうけしからは、はたらき心にまかせず、女ながらも、名もなき雜兵づれの手にはかゝらじとおもひけむ、即座に咽かさやぶり、そのまゝ馬前の土となりぬ、能戦の佳人、春夢一覺のさま、かなしきなむどおろかなり。

あはれ金閨の蛾眉、すでに命を鋒鏑に殞しぬ。鎌鬚いかめしき丈夫はいふに及ばず、守城の勇士、この時すでに討死せしもの、げに少からずと

ぞ聞えし。中にも客將渡邊金太夫は、搦手の門より出で、取り返しては
かけみだし、今日を最後のちもひ出にとて快戦してありしが、やがて歳
神坂の雪を消えぬ。そが金の短冊の馬じるしをさしたる武者ぶり
いかに逞しかりけむ。敵の中にも感ぜぬものゝなかりしとぞ。大手の將
たりし小山田備中は、六度目の馳せ合に討死し、城外に出でしものども
過半は討たれ、血の川を漲らし、屍の山を築きたりければ、敵は、ますゝ
勢を得て、時こそ來つれと勝鬨いさましく、信忠の小姓、山口小辨、佐々清
藏、馬廻には梶原次右衛門、桑原吉藏、森武藏守の家臣には各務兵庫之介
一番に乗り込み、これに續いて戸田半左衛門、搦手の門際に乗りつけ、指
物を木立に引掛け、少しためらひけるところに、後陣の大勢、一度にどつ
と乗り入れ、忽ち城門を打破り、やがて雲霞の如く内外にみちゝぬ。

この時、信盛以下は正面の大廣間にならび居て、最後の酒宴あり。敵の
總大將信忠が淺黄金襦の母衣をかけて屏の上に押し上り、梧桐の枝に

とりつき、下知するを目がけて、七度まで打てかゝりぬ。かくて信盛以下
死者ぐるひに切りめぐりければ、さしもの織田勢、やゝ攻めあぐみて見
えけるに、森武藏守長可は、せむ様ありとて、雜兵あまた屋根の上のぼ
し、瓦を剥ぎ板をめぐらせ、彈丸雨のごとくに打ちみたりければ、見る間
に、みな將某倒しに俯し合ひたり。

信盛これには目もくれず、又もや高やぐらにのぼりけるに、折しも小
菅五郎兵衛、手創一つも受けず、敵の中より馳せもどり、その前にかしこ
まり、ことばせわしく、敵すでに城中に込み入り候、今は御腹召され候ふ
べし。それがし、御供致さばやと存ずるものから、勝頼公の御先途、見届け
に参りたき條、御暇下さるべし。もし仰せらるゝことおはさば、それがし
屹度つたへ仕らむと申しけるに、信盛それにはいらへなく、矢倉の狭間
の板を押し開き、寄手にむかひ、信忠は、いづくぞ、この度、われにして心を
變じ、汝が軍門に降らば、一命をつないで所領を安堵すべしとの矢文、お

のれを以て人を付度^はるは、をかしきことの限なり。苟くも、われ、清和源氏の流を汲みて、法性院殿の五男と生れし身の、いかで不義をなし、媚を匹夫には容るべき。汝はやく我と勝頼父子との首を取つて、信長に見すべし。そも汝が父は、弱冠より暴悪をなし、親戚を誅し、隣國を欺き、或は王城の鎮護たる延暦寺を焼き、數千の衆徒をみなごろしにし、將軍家を蔑にし、恣に逆威をふるふこと、奇怪至極せり。よしや一旦の武威にほこるとも、積惡の家には餘殃あり、奢るものは久しからず、その滅亡、踵を回らす暇あらむや。むかしの武田五郎、今の仁科薩摩守晴清、生年三十四歳にして、只今自害する有さま、よつく見置いて、汝等が武運たちまち盡きて腹切らむするときの手本にせよといひもあへず、身につけたりし桐葉の上帯、切つて落し、肌押しぬいで、弓手の小脇に刃をつき立て、馬^ま手の細腰あたりまで切り目長く、かへす刀を胸に押し立て、見ごと十文字にかき破り、中なる腸引つかみ、て、やぐらの板になげつけ、その儘俯ぶしになり

狭間の板に、どうと倒れかゝり玉ふとひとしく、今まで傍にそひ居たりし小菅は、其首を打落し、いそぎて櫓より下り、やがて火をばかけたりける。

滿城の士卒、腹さるもあり、自ら頭かき落すもあり、おもひの最後體、殊にゆゝしく、一人の甲を解きしものなく、みな其主と國とに殉しつ。廳前には、また消えあへぬ春の雪、あくまで戦血の腥きを染めて、凝りてし色や、あかねさす紫とはなれりける。

かくて、天目山の陣破は、これより後九日ばかりのことかどよ。物換り星移る、こゝに三百秋、われは故國の山河を思ふ毎に、丈夫の涙、自ら涌くを禁ぜざらむとするなり。

拔都征歐の歌

三十四

海島すぐる夜嵐にカスビの沖の波あらく
破國の名残とむるは十萬頃の潮けぶり
靡いて駈ける絶え間より青きは燐か月の色
指し向ふ西岸は龍鬪虎掣の古戰場
太和嶺北草白く鬪牖くだけて灰となり
雲霧と重れば、魂啾啾と哭すべく

手に凝血を握りつゝ生れましたる天の瑞
幹難河源花繁く白旄纛の立つところ
萬歳聲は雷に似て推されて登る九五の位
日の入る方に國ありと一たび馬首を廻らせば

かの西邊や花刺子模や、脆く朽木を僵すと
敵の餘藥を赦さじと鞭を投げ入る印度河
アム河のほとり地も廣く、雄風萬里吹き靡く
餘威東歐に及びしも暮年の壯志なほ止まず
今はの際に夏を戮し、精爽凝りし其跡は
六盤山の雲の色 起輦の谷の深緑
わが祖の偉業おもふとき、紫霄はるかに神馳せて
拂へば劍虹みだれ、いかで血潮の躍らざる

昨は大梁陥りて、河洛の間敵もなく
女眞の末は蔡州に盡きぬ哀れを留めつゝ
阿叔の業は紹述の功成れりと聞くものを
われ豈に獨り手を袖に、取る國なきを嘆かむや

三十五

天潢分る一宗派、牛後の譏、耻いかに
懸軍萬里、いざさらば亞細亞以外に覇を成さむ

大王ことし二十八、颯爽英姿たぐひなく
翼の塵を拂ひつゝ、空を背に負ふ荒鷲の
目は星宿の表を射り、氣は乾坤の外を衝き
命をかしこみ従ふは蒙古の精騎五十萬
さして行方は西極の馬頭に高し、太白星

大王鞭を揮ひなば侵掠急に野火のごと
大王馬を駐むれば不動ながら山のごと
疾きは風か風よりも、動くは雷か雷よりも
天その肝を鍛えたる韜略世にも稀なれば

鐵馬嵐に嘶いて角聲清く秋高く

日にかゝやける甲光は魚鱗とまがふ大軍の
疊める陣は潮に似て南露の境にみだれ入り
重圍を築くりアザンの城は六日を支へ兼ね
見よ、わが命を拒みたる報はいづれ一炬灰

モスコの市掌中に、落つれば、やがて、長驅して
ウラヂミールに捷ちし夜は二王の首を好下物
銅雀三千、花散れば血は紫に凝りつゝ、
ジョージ一門皆死して俄羅斯これより我が領土
北辰直下、地維盡くるノブゴロツドの路遠く
や、融け初めし銀海の春泥ふかし二三尺

烏拉の山を堤にて、裏海、黒海、池と見ば
 地を拓かばや、天半に白皚皚の雪残る
 アルプの彼方、雲迷ふ、大西洋の岸までも
 分つ十萬五路の兵、その一隊はポロランド
 グルスタットの戦に聯合軍を打破り
 屍は積んで山をなし、血潮湛えて海をなし
 虜會の首を竿にして九車に滿つる敵の耳

いたましいいかな、語り繼ぐ、霸略の跡は夢に似て
 羅馬を攻めしアツチラの枯骨果して靈ありや
 天山越えて三萬里、匈奴の積威、今いかに
 汝に告げむ、セバジャールの王よ、臣下よ、命を知り
 ぬかづく帳下、降を納れ、わが西道の主人たれ

匹夫禮なし、汝、ベラ、いで其膽をひしがむと、
 カルバトの嶮、打越えて馬は平蕪の草に飽き
 一聲兩聲、砲鳴れば、霧を劈く、関の聲
 羽箭雨より繁くして逃れし敵は幾ばくぞ
 斷臂折脚、累累とサユの川波とめくれば
 紅葉を浮ぶ秋の水、韓紅にくゞりつゝ、

鐵蹄、かたきドナウ河の水を踏んで馳するとき
 白日さむさセルビアの戦雲いよゝ急にして
 コーラン城の壁くづす巨礮の數は三十門
 歐土王侯、魂飛びて、安き心もあらなくに
 ひくな、逃がすな、赦るすなと、諸路の追兵、並び行く
 戰鼓の響、鞞鞞と山川遠くどよもせば

アドリアの水皆立ちて游騎は及ぶベニス國

四十

雁背の霜凍る夜に宗家の訃音耳にして
あゝ惜しいかな九仞の功を一篋に缺く今ぞ
深くも悟る人の世の方かなはぬ時や運
櫛風沐雨七年の征戍艱苦の多ければ
ハルツ山下の群會はまた師を出す其日まで
しばし命を預け置きいざや東に還らむか

水精宮闕、霏微の裡、管絃聲もしめやかに
くれなる灑ぐ上苑の春はオルタの花の雨
珠簾を捲か下に見る江水白く夜をさむみ
金氣流るゝ大空の秋はサライの月の色

身は宗室の長としてわが大汗を擁立し
萬乗富貴まゝなれど、十載雄志うせもせず
劍精龍の吟に似て帳裡夢さむ宵々の

一夜寥廓、雲閉ちて紫微垣中の星くらく
百萬の兵胸中に藏せし覇才土に歸す
鼎湖千古の此恨、いつれの時か消えぬべき
車書の混同、成らざるに絶緒をつがむ人もなく
坤輿は長く小醜の飛揚跋扈に任かすのみ
成吉思汗にくらぶれば遜るか齡二十年
げに若かりし君が身は神の妬か將た命か

前には大兒歴山王、後には小兒ナポレオン

四十一

その英謀は相若くも、彼に子ありや孫ありや
欽察汗の帝國は曆數すべて二百年
天の佑を受けたるも君が基業の遺烈なり

二十世紀の劈頭に、あはれ歐土の經世家
なべて賈生の才もなく善儒の論に目を送り
地軸一轉、新しき希望の光、見ゆるとき
東亞同種の諸民族、憤餘の強を怖れつゝ、
黄禍を叫ぶ其聲は君が頌歌に抵るべく

身に縛雞の勇なきも星斗つらねて胸に在り
檄を草せし陳琳に、いかで劣らむ我が詞筆
久し夔屈、年を経て何になれどや孤憤の意

あゝ斯生の晩くして君が幕下の賓たらず
知己に報ゆる心かや、ペラの居城に使せし
一個無名の英人の其遭遇を羨むよ

大王逝いて六百秋、絶代の雄、復た出でず
史上、閻巷の小闘に、いくたび豎子の名を成すも
世界を併す大理想、ついで果さむものや誰
仰ぐ八極雲の外、未死の英靈、知るあらば
かの大招になぞらへし東海處士が醉餘の賦
劍を揮つて地を斫つて、高く歌ふを聞けや君

註

(一) カメビ(嘎斯比)は、即ち裏海。花刺子模のサルタン、モハメッド戰
敗れ、蒙古の哲別等に追はるゝや、海中の小島に匿れ、患悸病を

成し、終日啼哭、西紀千二百二十一年一月、遂に島中に死す。

- (二) 太和嶺は、即ちコーカサス。蒙古の二將、哲別、速不台、モハメツドを追うて獲ざるや、裏海沿岸の地を抄掠し、石を鑿つて、道を此山に通じ、千二百二十三年三月、俄羅斯諸公の聯合軍をカルガ河畔に敗り、然る後、東に歸り、成吉思汗に會す。これを、蒙古人、歐洲に入るの嚆矢となす。

(三) 成吉思汗崩殂の地。

(四) 成吉思汗を葬りし地。

(五) 元の太宗、名は窩濶台。即位の後七年、金を滅す。金の哀宗、自經して國に殉し、新主末帝承麟、亦た亂軍中に死す。

(六) ガルスタツドの戦は、千二百四十一年四月九日に在り。聯合軍は、波蘭獨逸二國、諸侯騎士及び那勇を以て編成したるものに係り、神聖羅馬皇帝の命にとりて、拔都の軍を迎へしものなり。

(七) バジャール(馬札兒)は即ち匈牙利。その王ベラ四世は、アルバト朝に屬し、匈奴アツチラの後裔といふ。

(八) サユ河畔の戦、亦た千二百四十一年に在り。蒙古の軍、礮を以て河橋の守兵を逐ひ、凌晨河を渡り、下游の軍、亦た渡つて列を成

し、ベラの本營を圍み、矢下ること雨の如く、持して午に至り、西南の圍を開いて逸せしめ、而して、後より驅逐す。敵軍すでに瓦解し、或は泥澤に陥り、逸せしもの幾もなく、河水盡く赤し。

(九) オルタ(鄂爾多)は拔都の舊都。

(十) サライ(薩萊)は新都、毎歲春はオルガ河の東岸に沿うて、北、オルタに至り、秋は、南、サライに駐まる。

(十一) 元の憲宗、名は蒙哥、(世祖忽必烈の兄)。

(十二) 拔都の麾下に一英人あり、史に其名を佚す。蓋し本國を逐はれて飄泊せしものといふ。故に歐洲各國の地利軍情、拔都之を知ること甚だ悉くす。拔都の未だバジャールに入らざるや、之を使として、往いて降を諭さしむ。

(注意) 本篇の史實は、近時清の兵部左侍郎洪鈞の撰に係る元史譯文證補卷五拔都補傳に據る。なほ其詳は拙著東洋通史第九卷を參看されし。

蝦夷嵐

四十六

(上)

寒潮一道の流もみあふやうに白令海峡を躍り越えて、強弩の餘勢はなほひるまず、島山の數は廿にあまり、雁齒の如くにならびて連れるくりに、列島の荒磯邊を噛む中にも、擇捉セクトの海汀は、大方嶄然たる峭壁にして、高さ殆んど百尺、波激濤亂のすさまじさは、常どもあるに、ましてや邊地の春なほ淺き四月の初めつ方、蓬々然たる朔風は、靺鞨肅慎の故地より吹き捲いて、すさびもやまねば、底ひ知られぬ大わたつみも、今は鼎の如くに沸き上り、煮えかへりつゝ、白霧はあつく海面を蔽うて、空や水や、その界を分かず、乾坤たゞ夢の如く暗くなりけるに、わつかばかりのすき間を渡れて投ぐるが如き光のおぼつかなきまで弱々しけれど、さすがに天つ日の影のみは拜まれつ、朧げながらに眺むる沖遠く、幽暗の

中に物ありて、大波をばついくゞり、小波をは乗り越え、ゆり上り、ゆりすゑ、こなたを目かけて勇しくぞすゝみ來れる。近けば山のゆるぎ出でたらむやうなる峨艦一隻、はやての風にのびひろかりて、明かに、それと見らるべき、檣頭にかゝげたる旗は、青き線斜オサに交叉したる荒鷺のおろしやの國のなりけり。

こゝ大海を前にし、高山を後にしたる紗那の地なれば、廬舎は皆戸を閉しつゝ、冬籠外面に出づる人の影さへなきに、本土にも風の子といふなる、まして寒地に生れつきての悪太郎なるらむ、あいぬの兒等五六人、海鷗を射むとてにや、丸木の弓に矢をつがひ、身を切るやうなる烈風をものどもせで、この磯邊を馳せめぐりつゝ、ありしか、目敏くも、それと認めつ、閻龍の舟のはむめて新世界の島邊に着きけると、土蠻どもは背に青天を負ふらむ大鳥の舞ひ下りしにやと怪みし、それ程にあらねど、兩三年前たゞ一度、こゝ紗那灣口に碧瞳紅髮の人を乗せし怪しの大船

四十七

の、數日碇泊せしを見しのみなるに、それと同じく、しかも、すぐれて大なるに、打ち驚きて、あわたゞしく馳せもどりぬ。おそろしき珍聞は、早くもあいの部落に傳はりて、人みな開きたる口、えもふさがず。かゝる折には、いともありがちの蜚語さへ起りぬれば、一犬虚に吠えて萬犬和し、土中に蟄息せし小蟲の、雨に穴くづされて騒ぎまどふが如く、つねには沈みかちなるあいのどもも、この時ばかりは、さすがに騒ぎ立ちて、起居も定め得ぬばかりなりき。

扱ても物騒しき世なるかな、南の國よりしやもの來て、この美しき島山をわがもの顔に占むるさへあるに、又しても人か鬼か知られぬ者を乗せし怪しの大船の來りしとや。そは疑もなくしやもといくさせむとこそ。さばれ、われ等あいのには、恩讐の孰れも無きことなれば、なまじひに手出しなし。深山の雲は、また融けずとも、いかで、かくれすむべき處のなからむやは。棋楠の樹の蔭には、甘き泉も湧きなむ。あまつ御空の

上の上に尊さか、あいのいますかぎり、あいをいなの子孫は、まがごこのみは打續かし。見よや、かどくしき巖が根にも、美しき花の咲かむ時はあるものを。

耳に銀環をつけ、赤服を打ちかけ、頭はすべて白く、八握ともいはまほしき長き髭のや、黄ばみて、自ら尊く見ゆるちや、等は、かくいひ了りつ。そが口より出てしことは、片言隻辭なりとも、さながら神の託宣としおもへるあいのどもは、異議挟むべくもあらず。事はいよ、逃竄と決して、土蠻とはいへ、すでに部落もあることなれば、逃ぐるにも支度はあり。ありとしあるもの、搬び去るが習なれば、狼狽騒擾の様、たどふるにものなし。

濱番所の小役人は、今しも朝いの床より起き出でしばかりなるに、海汀に人の聲の騒しき、何事にやとて、藁靴はきもあへず、氷れる雪の上をすべるやうにして、走り出でしか、このありさまに腰も抜けむばかりに

打驚きぬ。身はこの絶島に職を奉ずるものから、いやしき心には罪なくして配所に來りしやうにもおもひつゝ、寒さ凌がむためにとて、夜ごとく、に酌む酒の、しかも昨夜は、いたくすぐして、この大珍事の報道を怠りしに、少しは愧ぢつ、恐れつ、ひた走りて、擇捉守衛の主廳へかけつけぬ。

急變々々との聲をかぎりて走り入りたる小役人の、あわてざまは、たとふるにももなく、ごみには口も開きえず、やうく異國船の港に入りて、何事とも知らぬ土民は驚愕のあまりに、逃支度なし始めたりと辛くも述べ畢りつ。滿廳の人は、かれの身ぶり言葉つきの、あまり仰山なるに動さかれて、むかし弘安胡元の役をそのまゝには、や大軍の押しよせたらむやうに思ひなして、危懼の色は、明かに、その面上に動きそめたり。

さすがに主將と仰がるゝ身の、自ら器量の備はれりし戸田亦太夫人のみは、少しも騒がず、猶ほ仔細に事のさまを問ひ正すに、小役人は、その入港の時のさま、見しとにはあらず、時に答辯に差支へむとするさまもありしが、根がいづれ、すなほならぬ下司男の、さも見て來たらむやうに、その場をつくろひぬ。

深沈大度なる主將も、今は眉をあつめ、首を傾け、しばしは思に沈めるやうなりしが、やがて、さしたることにもあらしじといふばかりなる氣色して、滿座の人の面を冷かに一瞥しぬ。

かのおろしやの、荒鷲のおそろしき國なることは、かねてきゝつ。さばれ、こゝより北の僅に一衣帶水を隔てたる得撫うるつゆの島には、近來かの國人多く居住するよし。されば、時にその商船なむどの、風濤を避け薪水を求めむため、しばし寄港することなからでやは、よしや、また醜虜豺狼の野心を以て攻め寄すとも、一艘の戰艦に載するところは、いくばくの人ぞ多しとも、二三百人にはよもすぎじ。こゝに我が戍兵の數を擧げむに、南部津輕、兩藩の兵士を合せて、三百人に餘れり、衆寡の勢、懸絶せりとはい

ひ難し。不幸にして開戦に及ぶことあらむとも、直に不覺を取るべうも覺えず。況んや、われ等、この島の警備の任に當るは専らかゝる折のためなり。丈夫の身もとより國恩の爲に死ぬべし。もし刀折れ、力盡なば、骨をこの邊境なる氷天雪窖の底にうつめて、長く忠義の鬼とならむのみ。さはいへ、われより好んで戦など挑むべきにあらず、たとひ一旦の小勝を制すとも、後難は料り難かり。先づ初には、相見て、その志の程を問ふこそよけれど、亦太夫は徐ろに語り出でつ、何よりも先に、人をして、あいぬ等に諭さしめき。

忽ちにして坤軸も搖ぎなむ、百千の霹靂、一時にふるふが如きひびきして、巨礮一發、港より聞こえぬ、人々さては、といひもあへず、皆ふるへて起ちぬ。亦太夫は石の如くに動かず、心ひそかに微笑みていへらく、これにて事はいよ／＼明かなり、かれ等は薪水をもとめむ爲ならむのみ、その砲を打ち放ちしは、外船港灣を出入する折の禮とこそ聞け。彼れ或は

上陸せしもあらむ、陽助往け。もし逢ひたらむには、こゝまで引きもて來れ。われ直に對見して、來意を問ふべきにと。

かくて亦太夫は本陣の前に、葵の紋を染め出したる幕打たせて、自ら廳の中央に座をかまへ、身近く數人を左右に侍らしめ、諸吏次序を以て席をかまへぬ。彼は、あくまで、平和の談判を試みむと欲せしなりき。

耳なれぬ巨礮の響に、膽ひしがれたる、あいぬどもは、主將の諭告も聞かばこそ、いよ／＼慌てふためきて、にけまどふ、その混雜の中を押し分けて、陽助は早くも海汀に出でぬ。

そも、この陽助といへる男は、亦太夫腹心の支配人にして、膽略ある若人なり。そのかみ、擇捉の守廳に、この二人のなかりせば、似而非役人どもは、たゞ士人を虐げ、酒のみくらひてのみありつらむ。

脚を掃うて人をさらひ行かむする怒濤の打ち寄する岸邊にたちて、陽助は、沖邊はるかに眺むるに、聞きしに違はぬ、峨艦一艘浮び居たり。數

個の短艇は、すでに下されて、各十人ばかりの人をのせつゝ、こなたを目がけて漕ぎ來りしが、大音あげて呼ぶ陽助の聲を何と聞きしにや、半途より漕ぎかへりぬ。本船の方にては、今はなか／＼事起れりと見たらむやうに、砲門盡く打ち開きて、すはどいはむ時の備をなしぬ。

陽助は少しく心に驚きたりしが、かくては果てじと心に思ひ定めけむ、自ら岸邊にある小舟を押し出して、あり合ふ白布を竿の頭にくゝりつけて、乗り出でぬ。不時の備にとて従へ來りし數名の銃手どもを左右に立たしめて、残れる一人をして力のかぎり疾く漕がしめしが、折しも波は高く、風さへ強ければ、逆うて向ふ小舟の容易に進まず。どかくして距離の中ほどまで、進みたる折しもあれ、砲口より吹き出たせし白煙と、ともに轟然として一發放たれぬ。危いかな、巨彈は十數間の前に爆發して、海中に散落し、水は一丈ばかり逆に立ちぬ。陽助は、はじめより唯だ彼の意を問はむ爲にとて、白旗さへ掲げて來りしものを、最早これまでと

や思ひけむ。銃手に命じて、答撃をなさしめぬ。戦は已に起りぬ。かなたは峨々たる戦艦なるが上に、曩にかへせし短艇さへ、又いつの間にか漕ぎ戻り、遠まきに陽助の舟を圍みて、艦よりは大砲を、艇よりは小銃を釣瓶打にうちかけ、れば、硝烟濛々として海を蔽ひ、陽助の舟は烟の中にかくれて、いづくをそれと見え分かぬやうになりなき。

さしもの陽助、今はせむすべなくて、たゞこの機に乗じて、出來ぬまでも海汀にこぎもどりて、どにかくに、このさま、主將に報道せむものをと、烟の中を幸に、漕手に命じて漕ぎ戻らしめしが、敵の砲撃、しばしも絶えず。やがて一丸飛び來りて、不幸にも陽助の股に中りければ、あつと叫びもあへず、船の上にとうと倒れたり。この時早く、巨彈の火球は大禍星の地に落つるが如く、飛び來りて、わが本陣に附屬せる海汀なる倉庫の上に破裂しぬ。

陽助の舟からくも岸につきたる頃には、敵の艇船も、すでにおなじく

こぎついたり。いかに膽畧あり、剛氣なる兵なりとも、股の深手には働くべきやうもなく、船手は心きゝたるものにて、かひくしくも背に引きかけて走り出でしが、未だ十數歩も行かぬに、敵ははや舟を棄て、海汀に上りて、横に列をなし、銃先をそろへて射撃しければ、これも體に二三個の丸をうけて、相累りて倒れぬ。銃手二人は、いかにしたりしか、知らず。

廳上に座をかまへて、陽助が魯人を率ゐ來るを今か／＼と待ち居たる亦太夫は、海汀の砲聲を聞きて、少しく怪訝の念に堪へざるやうなりしが、事の模様たゞならずと察しければ、また廳中の一人を見聞の爲にとて走らせしに、思ひしよりは早くかへり來て、逃げ後れし、おいぬに聞きたりとて、戦すでに海汀に始まりしよしを告げぬ。これは命惜しきものゝつねとて、早く逃げ落ちむ心なれば聞きしことの十倍にもいひなして、魯軍の數は料られざるほどあり、なほ得撫の方より後援押しよせむも測りがたしなど、あること無きこと、こきませて、専ら主將の心を動かさむと語り出でぬ。

さるにても陽助は如何にせしか、さばかり剛勇のものなりとも、重圍の中に陥りては、よも生きては還らじ。惜しきもの、死なしてけり。大國もどとり寇鬪をなさずと聞きけれども、思へば彼等は蠻貊のしれものなりけり。さばかり禮義を重んずる國風にはあらざりしよ。げに人を見て事は計るべし、われ始より尊俎の間に折衝を試みむとせしこそ愚かなれ。今、かれより戦を挑みて暴をなさむとならば、われ豈に之を宥すべけむや。神州の勇武を宇内萬邦に耀かすは、この一舉にあり。區々たる一艦に載するところの兵士、何程の事かあらむ、いで盡く之を殲滅して、艦をも奪ひてくれむと、亦太夫は心におもひ定めつゝ、やをら起ちあがりて、廳中の吏員を呼びて、號令を本陣に屯在せる兵士に傳へしめぬ。とく／＼部伍を整へて、廳前に出で主將の命を待てよと。

亦太夫は早や武装をとゝのへて、ふと外面に出でし折しも、紗那南邊

の山上、忽ち又砲聲の轟きて、雪猶ほ消えぬ小丘の頂には黒服をつけたる兵士の、むらがりく、たどへば蟻の集れるが如く、一片の大旗は空中に翻りて、これも同じく、かの荒鷲の國のなりけり。かの砲聲は、相圖にや、海汀の方より吶喊して、虜兵は、はや近づきぬ。

主將も今は大に慌て、はやく隊伍を部署せむとて、本陣さして走りゆきしに、先に派遣せし使に逢ひぬ。營中の兵士は如何にしたりけむ、大方はすでに逃散して、残れるは、いと稀なり。主將は如何にかし玉ふといひ、その聲も震へがちなり。

亦太夫、今は奮然として、言甲斐なき物どもかな、軍陣に臨んで敵に後見するすら、世の物笑ひなるに、未だ對陣もせざるに、多寡を料りかねて、砲聲に小さき膽ひしがれて逃げたりけるよ。あゝ士氣の揚らざる、奈何ともすべきなし。一營の兵士、終に用ふるに足らざりけりなど、歎息して老涙はらくと落しつ。半は怒り、半は悲みて居たりしが、はや敵軍眞近く押しよせけるに、二三の家僕は主をうたせじとて防戦す。亦太夫も刀の鞘を拂うて、魯兵と戦ひしが、ともかくも落ち行きて、逃兵を收めて會稽の耻、雪がむとおもへば、つとめて血路をひらきつゝ、奮闘しけるに、さしもの魯人も、少しく靡いて見えければ、徐ろに退きつゝ、やがて紗那川を渡りて、一里ばかり西の方に逃げのびて、有萌ありもいの村に來りぬ。

(下)

關原の戦に乾坤を賭して、金扇馬標の下に、皓髮銀袍の老雄が笑つて、冑の緒を結びたる後、世の春は、いとも長閑けき花の都の大江戸に、徳川の流の盡きせぬさま見えて、邦は鎖され、兵は鎖され、臺灣に、暹羅に、圖南の鵬翼をふるひし人々の偉績の名残も、わづかに一部の海外異傳に、其名ばかりを止めて、これも、いしつかむかしゝの物語としもなりはてつ。三河武士の子孫も、ぞべらくと京男めくやうになりては、白刃を踏まむ雄々しさも、ごこしへに消え失せぬべし。盛衰治亂の絶えざる世の

中に、さりとは、はかなしや。嗟乎いつまでか、人は太平の夢に酔はむとし
けむ。

そも、魯國が、わが北陸に涎を流まゝは、久しき前よりのことなれば、享保二年に及びて、幕府新に東蝦夷の地を収めて、南部津輕の兩藩をして警備せしめたりしに、果せるかな、文化二年には魯國の欽差れざのふ軍艦なでしだ號に搭じて、わが四名の漂流民を載せて、長崎に來りて通商貿易を乞ひにき、この時、わが國、未だ外交の典禮を知らざりしかば、救難の恩に酬るす、欽差遠來の勞をも慰めず、遷延むなく日を送りつかの欽差は、國命を奉體して、梅崎に淹留して、江戸の報を待つこと六個月に及べども、つひに回答の要領を得ず、いたく望を失ひしかば、二年の三月に及びて、決然長崎をあとにして發しぬ。この時、すでに、かれは兵力を以て脅迫せむとする志ありしと覺しく、歸路は日本海の岸に沿うて薩伽連島に立ちより、轉じて、このくりにる列島を巡察し、港灣の深淺など

仔細に測量し、勘察加に著して出師の企をなしぬ。されど、なほ足らずとやおもひけむ、東魯の成將らしよわは、また人を派して、こゝ擇捉の形勢を伺うて急報せしめき。けれこうりつ等十四人のものどもは、この重任に當りて、本島に來りしが、幕吏菊池總内の手からめとられ、鞠問の末南部の藩士を守衛として、さびしく一室にとぢこめられたり。あはれ、この魯人ども、南冠を戴いて楚囚を學び、鳥の翼なくて歸らむよしもなく見えしが、一年の後、守者の怠りしを窺うて、海汀に出で、小舟に乗じて鯨吼ゆる氷海の怒濤を物ともせず、得撫島の方へ逃げ落ちぬ。幕吏關谷茂八郎、船を發して急ぎ追ひかけしかど、及ばず。主將戸田亦太夫は、邊境の漸く多事なるべきを察知して、警戒少しも怠ることなかりしが、いかにせむ、心なき部下の兵士どもは、これを以て杞人が天の墜つるを憂ひしと同じ程のことゝなし、とかくに勞を厭うて命を奉せず。また亦太夫は今こそ要職につきたれ、門地もとより高からねば、聲望も従つて軽く、同

僚の幕吏と相容れざりしかば、おもふことの十分の一も得遂げで、よろづに手ぬかりがちなりしを憾なる。

頃は文化四年四月二十三日、魯國の戦艦二隻、各六十五人の精兵を乗せて、この擇捉島の西南なる内保灣に投錨し、二十五日にいたりて、突然上陸して、漁舎の番人どもを縛して米酒などを奪ひ、やがて廬舎に火をかけて引きあげぬ。魯人は、すでに本島の警備固からずと見て取りしかば、更に策略を講じて二手に分れ、一の船は紗那に、一の船は内岡に向ひぬ。かくて紗那の戦は起り、わが主廳は攻め取られしなり。その折、南邊の山上にあらはれし別軍は、内岡に上陸したる一船の兵士の、はる／＼と野山を越えて來しものとは知られぬ。そも／＼内保には、たゞ漁舎あるのみにて、本土の人いとも少く、警報の到るべきよしなかりしかば、紗那の幕吏が冬籠の爐邊に酒をくみて、太平樂のたはごといひつものりし間に、すでに大事に及べるなりけり。

亦太夫は、からくも一方の血路を開きて、有崩の村にいたりしに、土民の空屋には、人みち／＼と、關谷茂八郎、兒玉喜内などをはじめ、兩藩の隊長も、その中に在りしが、色青ざめて、たゞわな／＼と震へ居たりき。亦太夫は提げ來りし魯人の首級二三を地上になげ出し、巖下の電に似たる爛々たる眼光もて、衆人の面に冷かなる一瞥を下し、色は慍れども、言はさのみ荒だ、で、何の故に主將の命を用ひずして逃れ去りたるかを詰りて、扱ていへらく、約束明ならず申令熟せざるは、將たるもの、罪と聞けど、平居修練するは、かゝる折のためと知らずや。よしや、水火に赴くことあらむとも、合には背くべきことかは、ざるを魯船と聞きて心を冷し砲聲に耳うたれては、膽つぶし、打ちもそろうて、かく浮足立てしは、あまりに情なし。もし是れ、われに徳望なく衆心を收結する能はざるが爲にとならば、辭もなかるべけれど、公等も瑞穂の國の粟を食みて命をつくるものならむに、國辱てふこと、如何に思ひ玉ふかといひて、はら／＼

と涙を流がしぬ。

關谷茂八郎は、さすがに面目なげに、戸田に向ひて、先にわがこゝまで來りしは、まことに逃兵を追ひ止めむとてなりき。されど今は、どやかくいはむ時に非ず。こゝに一大事と覺ゆるは、内保より逃げ來りし漁夫の驚くべき一報を得しことにして、魯人は數日前、内保の地を占領し、別に一隊を派遣して、紗那の後の山上に押し寄せしと知られぬ。そも、魯人が敵意を我に挾めるは、決して、一日の故に非ず。年ごろ、地勢など探りに來りしものも、すでに數名に超えたり。こたびは、必ず深く計るところありて、一舉して、この島を取らむとてならむ。今見る軍勢は、さまでならねど、故らに奇計を行ひしなるべく、後援の得撫島に屯在するや、疑を容れず。われ等、この絶島にありて、限りある糧と兵とを以て抗敵するは、斷じて良策に非ず。戰ふとも、勝つべきいはれなし。されば、むしろ、わが兵を損せずして引き退き、船を艤して、南なる國後島に航し、急使を馳せ、狀を

具し、援兵を乞ひ、大舉して、かれの不意を襲はゞ、會稽の耻、雪ぐを得べく北邊の孤島、永くわが邦土となるべし。これは兩藩の隊長を始として、われ等の意見なり。あはれ、願はくは能く狀を案じ、深く慮り、重ねて來りてゆめ暴虎憑河の愚をな學び給ひをといひき。

扱ても、この男の唇は、いかにうすかりけむ、たゞ一發の砲聲を天地のくづるゝ程に聞きて、逸早く逃げ出せし過あやまちを自ら文かきらむとて、かくはよしありげに、いひ出づるにぞ、戸田は勃然として、けしきかはり、茂八郎と兩藩の隊長とをきつと睨みつけて、いしくもいはれけるものかな、驚を鳥といひくろむる辯口は、御身の相手たるべくもあらねど、われは、唯だ職分の守るべきを知るのみ。公等は、苟くも、主命を奉じて、この邊境を鎮衛し、兵務を督し不虞を戒め、急事に任ずる隊長にあらずや、遠き慮なきものは、近き患ありとこそ聞け。ざるをつねゝ、怠り勝なりしは、わが私に嘆息せしところにして、預め今日の事あるを知りたればなり。されど

今かゝる事のべたてむは、失せし子の齡を數ふるに同じかるべし。つら
 くおもふに、魯兵の數は甚だ多からざるべく、山上の兵が如きは、積雪
 の長途を歩み來て、さこそ疲れてあるべく、僅に聲援を與ふるに過ぎざ
 るべければ、一戦して駆け散らすに、何程の事かあるべき。われは飽くま
 で、その殲滅し盡すべきを疑はずよし、さらずとも、雙刀未だ冏らすし事
 に托して守地を棄てむは、男子の事にあらず。勝敗は、もとより衆寡にの
 みよることかは。たゞ時に奇を出し、機に臨めば足りなむ。かれ碧瞳紅髮
 の奴輩、手並の程は、すでに知られぬ。これより紗那にむかひて、彼等と戦
 はむは如何に。あまりに臆病にかまへなば、柳も幽靈と見えなむものを
 といひて屹度あたりを見廻はしぬ。

ならば居たる群衆は、正義凜々たる、この主將の言葉は短かけれども
 意はいよゝゝ深きにうたれて、すこしく羞惡の心あるは、今更の如く意
 氣地なき人の跡につきて逃げしを悔みつ。隊長二人は、なほも、どやかく

論ひつゝ、銃九少くして、また調すべきすべなければとて、受けひかず。

亦太夫は、やゝありて、戦は銃丸にのみよる事かは、腰下の雙刀は何の
 爲ぞ。かれ等は、今や紗那の廳上にあらむ。いで、わが軍を數隊に分ちて、一
 隊を以て敵を誘ひ、その虚に乗じて、別路より紗那川の上流を涉りて、敵
 の後に出で、山上の兵との聯絡を斷ち、廳上に居残りたるを塵にして、こ
 れを夾撃せば易々たらむのみ。大砲は船より移さるべくもなし、敵のた
 のむは小銃のみ、さのみ恐るべきことかはといふ。

關谷は、なほも、ためらひて、今は春なほ淺くして、原野の草ものびず。敵
 をば誘はむ爲の一隊は、身を掩蔽すべき處なくて、悉く狙撃せらるべし
 といへば、それは敵も味方も同じ事なれば、案じ煩ふ程のことにあらず
 たゞ今日遲疑して爲すなくむば、かれ遂にわが武庫を掠奪せむ、恐るべ
 きは、これぞかし。今は寸時も猶豫すべきにあらずと答へぬ。

凡そ事の利害は兩言にして決せむのみ。さるを同じやうなる事、あま

たゞびくりかへし、議論いつ罷むべしとも見えず、つひに夜にもなりぬ。戸田は起つて厠に上りぬ。關谷等は、南部津輕の兩藩の隊長を近く招きて、戸田は所詮主將なれば、後罰をおそれ、いづれにしても死なむ身の、こゝに戦を主張するものにこそあれ。しかも敵兵その數をほからずよしや、こゝに攻め寄せしは、少しとするも、内岡より上陸したる一部はすでに山上にあるなれば、その後軍の至るも時を移さざるべし、しからば、これ歸路を絶つて、われを囊の鼠の如くにやせむ。こゝに戦ふとも、利を得むこと易からず。死は、われとても難からざれど、そは犬死ならむかし。又いたはしきは、公等の率ゆる兵士にこそ。まづ部伍を解散し、おのがじ、道を求め、走りて南岸にいたり、舟を得て去らしめむにしかず。かくすれば戸田の心折るゝこともやといへば、兩藩の隊長は、もとより異議なく、僭越も何もあるべきことかはとて、逸早くも、まさしに命を傳へむとぞしたる。

戸田は、いつしか厠より出で來りつ。隊長は左右なく口ひらき得ず、時を失ひたるを恨み顔にて、なか／＼にいたましげなり。戸田は顔色を正し、咳して徐にいひ出でけるは、かく群議紛生して、事の決せねば詮なし。將士を鎮撫するの能なきわれの不徳は、今更悔めども及ばず。この期に及びては、言ふべきこともあらず。われは、守將として、こゝに死なむのみ、命を大事とおもはむものは、われを残して走り候へといひ畢りて、目を閉ぢて坐しぬ。

ありし兵士の中には、すでに逃げ去りしも多かり。關谷等は、何條いなむべきも、とより命惜しき身の、耻も譽もあればこそ、いつの間やら、烟の如く消えて、はや跡もなし。

亦太夫は、股肱どたのむ下部五六人ばかりとともに残りつ。なか／＼に似而非方人あらむには、足手まとひになりつらむに、今は心やすし。敵押寄せむには、最後の思ひ出に、快く一戦して、敵彈に中りて死ぬるか、さ

らずば、この腹見事にかき切りて死なむものをと、徐ろに小屋を出でつ
願れば、紗那の方には、火光天を焦し、四山の残雪と相映じて、明るきこと
晝の如し。さては、蠻夷遂に紗那なる我が本營を焼き拂ひ、これより打ち
寄すと覺えたり。物ども、いざやといふ間もあらせず、銃聲はや百歩の近
きに聞こえて、飛び来る丸は板屋の上にとばしる。骸にも似たり。いづれ
死なむ身のいかで丸をおそれむ。間近く彼の傍によせて、神州の武夫の
刀の切味知らせくれむとて、たいすゝみにすゝみぬ。敵は數十人一列に
ならびて、發火し居たりしが、距離次第に減じて、數十歩となり、亦太夫は
五六人ありしとおもひし。從僕のすでに其半を失ひたり。敵の今や新に
丸をこめて、齊しく放たむとする。一刹那、躍りて、その列中にかへ入り、あ
たるを幸に薙き倒し、切り散らしければ、二三人は踞りたるまゝに手を
負ひて倒れつ。残れる敵は、我から遠きに避けて、たゞ打ちとめむとぞし
たる。亦太夫は、身に數創を蒙りて、働自由ならず、今は敵彈に倒れむより

は、むしろ自ら死なむものをとて、傷の澤地を度りぬ。敵は手負ひたるも
の、何程のことかあらむとて、跡より追かけ來りしが、残りし從者二人、代
りて防ぎつゝ、斃れぬ。そのひまに走りて山かげの谷深き長牛澤といふ
に來れば、折しも紗那の火光は、いつしか消えて、夜の霧、ふかく天地をこ
め、折々聞ゆる風の音は、遠くより悲聲を傳へて、冷澁たる水聲と和し、さ
びしさ、一しほ、まさりぬ。おもふ項王がたゞ一騎、坂下の圍を衝いて出で
烏江のほとりに亭長の舟に上るを肯せざりし。臘月夜も、かくやありけ
む。この夜、群星澹として光なし。

亦太夫は腹をくつろげて、おもふやう、さるにても、わが魯船を以て、た
ゞ薪水を求むるものごなしは、返すくもいみじき誤なりけり。もと
より邊境に微官を得て、日なほ淺ければのことなれども、わが思慮の足
らざりしは、いひ解かむよしもなし。又た世に柔弱なる兵士を物の數と
して、たのみにしたるは、わがぬかりなりしよ。好し、今こゝに死なむとも

魂は忠義の鬼となりて、どこしへに、この土にとゞまり、わが神州の地一撮たりとも、蠻夷には得せしめざらむ、弓矢八幡も照覽あれどて、轉じて南天を拜し、それがしの事は、はて、候ふといひ畢りつ。鷄群の中の孤鶴、としも見むこの快丈夫は、腹十文字にかき切りて、かつばと伏しぬ。

*

*

*

*

*

あはれ、關谷等は如何にせしか。ひたすらに路をもとめて、野越え、山越え、暗の夜を雪に照して馳せ逃れしが、路なきところに迷ひ入り、名も涙にゆかりあるばろくの斷崖より墜ちて死にきと聞くもあはれや。

かくて變報の函館に達せしは、五月十四日なりき時の奉行羽犬正養直に之を江戸に報じて、幕議の末、南部・津輕の兩藩に増兵を、秋田・仙臺庄内・會津の四藩に出兵を令し、今將に發せむとしたりしが、次に達したる警報には、紗那を燒きたる次の日、魯人は船に乗じて、何處にか立ち去りしよしを傳へて、事は罷みにき。もとより、彼等は僅に十數人を以て新世

界の曠土を征略したる、當年のびざろーが雄圖ありしにもあらず。たゞわが備なきに乗じて、奪掠を働さしまでにて、さすがに、深くは入らざりしなりけり。

こゝに九十餘年後の今日、有萌村外、海岸なる小丘の上に、一片の古碑立てり。苔紋石面に舗きたれども、まだ消えはてぬ文字は、それよ、明かに戸田亦太夫藤原常保の墓とぞよまれたる。水海渺茫たり、英雄の恨、何日か盡さむとすらむ。しかも今は夕嵐枯樹を撼かし、夜月むなしく孤魂を照すのみ。

海國男兒

(海軍機關學校生徒の囑に應じて作れる)

見あぐる空 見をろす海
照るか北斗の影冴えて
波のうねく、きらく、と
あゝ光明か金冠か
われ等の上に落ちむとす
かけ行く雲 吹き來る風
朝は芙蓉の峰を過ぎ
夕は相摸の海に落つ
腕の力を試しつゝ

神州男兒、吾なるぞ

今なるぞや 時なるぞや
三年の月日住みなれて
藝に鍛えの數を経ば
行くか怒濤の大洋に
越すか狂波の暗礁を
もし夫れ風波 もし夫れ砲火
一たび奮ひ起たむとき
一たび艦を進むれば
吾、私のものならず
堂堂七尺、國の爲め

寄せ来る敵 攻め来る艦
かれに烏合の衆あるも
われに至忠の劍あり
いかでひるまむ、ひるむべき
・命は君に捧げたり

壯なるかな 快なるかな
曦輪東に高きとき
大和男見の赤心の
花は櫻か、かんばしく
長く世界に匂ふらむ
長く坤輿に溢るらむ

横吹曲

進め兄弟

風たちぬ 風たちぬ
悪魔の息の狭霧より
月日の光、大空に
今こそ消えぬ、すさまじく
大和島根の武夫が
吹き来る暴風をさむべき
希望ある日は近づきぬ
進め兄弟、もろともに

雲早し 雲早し

餌に飢えて爪を磨ぐ

驚の叫は東洋に

今し聞こえぬものすごく

朝日の御旗ひるがへし

天ぎる雲を拂ふべき

力ためさむ時は來ぬ

進め兄弟もろともに

浪よせぬ浪よせぬ

鳴る神よりもおそろしく

亞細亞の山河どよもして

天を傾け地を裂く

神、東方にとどまりて

眞の光どつくにに

かゝやかさむは今なるぞ

進め兄弟もろともに

劍太刀 劍太刀

かざす秋野の霜の上

磨ける月に影さえて

わが國民の赤心を

そゝぐは何處今なれや

あゝこの風と雲と浪

しづめで止まむものなるか

進め兄弟もろともに

死をこれ恐れぬ

死をこれ恐れぬ、み國のものゝふ
豊さかのぼる、わが日の本の
ほまれはかゝりて、汝の肩に
矢玉をくぐりて、劍ふみこえ
勝鬨あぐるは、今この時ぞ
死をこれ恐れぬ、み國のものゝふ

朝日の御旗の翻るもど

暴風もなぎて浪もおさめて
わが日の本の高き御稜威を
世界に知らせて凱歌うたはむ

時こそ來れや進めつはもの

朝日の御旗の翻るもど

忠肝義膽

水もしたゝる日本刀
光は國の御稜威にて
紅ふかき日の御旗
濃きは血潮の色どりか
君に捧げむものゝふの
命は輕し、いざさらば
進まむ果は荒鷲の
羽うつ天か、獅子吼ゆる
廣野も物の數ならず

たゞ夫れ忠肝、たゞ夫れ義膽

大和島根を侮らば

朝日の旗に觸れて見よ

大和男兒をさげしまば

劍の霜を踏みて見よ

旗は輝やく日の光

劍は鍛たふ日本刀

御國の爲に死ぬを得ば

矢玉の雨も數ならず

太刀の林も何かせむ

たゞ夫れ忠肝、たゞ夫れ義膽

國の譽を荷ひたる

ものゝふ生きて甲斐あらば

雲の往きかひ浪の音

よしや吹く風あらくとも

醜の草木をなびかして

ゆるがぬものは日本魂

つきぬ誠をとめてこそ

凱歌は長く萬代に

ひびきも高く歌はれめ

たゞ夫れ忠肝、たゞ夫れ義膽

雨龍川源の一夜

八十四

上川の忠別を立ち出てしは、東の空わづかに白みて、まばらに星影の天の河原に残れる頃なりしが、途すがらなる石狩川の風景いと面白くわきて蝦夷第一の絶勝とかや、神居古潭のほとり、河水怒つて巖峽を劈き、懸流の高さ三十仞、午天の冷霧、征衣に濺ぎ來るところには、馬をどめて凡そ二時間ばかりも、いこひつゝ、なほ去り難く覺えければ、今日之路はかどらず、夏の長き日を僅に十一里、國見坂のたうげを下りて、そが麓なる音江法華といふに宿りしは、早や黄昏のほどなりき。

こゝは、人家五六軒ばかりの小村落にして、ごまりし家は狭からぬものから、多くもあらぬ客人を問まごごに分つも、わづらはしとにや、色白く八字の髭もいやしからで、自ら品たかしと見ゆる三十ばかりの男とともに、奥ふかき一間に導かれぬ。無言の行のそれかわらぬか、木佛など

のやうに黙坐するにくらぶれば、何くれと世上の物がたり、絶えて、さびしからず。凡そ旅寢の合宿は、凄きほどの美人、つらがまち既に穉悪なる男ならぬかぎり、つねにうれしきものなりけり。

互に打とけたる話の末に、かの人は自ら測量の技師たるよしを告げぬ。わがこの地にさすらへ來ぬるは、ぬれ手に粟の慾望あるにもあらで、唯だ人間未知の山水をながめ盡して、をかしき口碑などを聞かむの心なれば、くさくさのこことを問ひつゝ、旅日記の手帳には、少からぬ材料をしるしとゞめぬ。

これも檢束なき書生の空論かや。十勝の國一圓は、人口僅に一千八百、北海開拓のすゝまざるは、これにても知らるべく、密獵船の跋扈を防がむための軍艦の派遣は、噂のみにて埒あかず、守備の固からざるはいはずもがななど、眉を揚げ手を戟しての、しりし末、われは、なほ口角の沫を飛ばしつゝ、語をつぎていへらく、寛政十一年のむかし、はじめて擇捉

八十五

島に航し、露人の樹てたる十字架標をぬき棄て、天長地久大日本國とし
 るしたる丈長の標柱を押し立てし近藤守重は、流石に曠世の奇傑なる
 かな。降つて明治三年には、開拓使大主典中原なにかし、その標柱の背面
 に題して、必誠百歳之後勿屈膝魯國てふ十一大字を書きたりとか。爾後
 殆んど三十年、北門の鎖鑰、今に完固ならず、狄人の跳梁、昨の如きのみ。あ
 ゝ、臥榻の側、他人の鼾睡を容れて咎めもせざる御心よしも程こそあれ
 凡そ本土の民、奥羽越の三國を除きては、どかくに懶惰軟弱なれば、この
 窮髮の寒地に移して物の用にたつべしとも覺えず。新十津川の移住民
 これを證して餘あり。われに一策あり、あいぬの土民を訓練教化し、挺を
 制して寇敵の堅甲利兵を撻たしむるを得む。今日必ず計るべきは、この
 可憐なる種族をして絶滅に歸せざらしむるの一事にこそ。

かの人は巻烟草の吸売をはたきつゝ、徐ろにいひ出づるやう、然りあ
 いぬは、まことに可憐の民なり。本土の人を敬すること大方ならず、命に
 従ふや柔順しかも事に臨みては矯捷にして、また頗る忍耐の方に富め
 り。こゝにいと哀れなるあいぬの話あり。わが親歴目撃せしことにしあ
 れば、ただ價值あり、まことに一理ありと見ゆる君が議論のこよなき證
 據ともなり得べきものなり。されど、われは、この物語をなすたびごとに
 自ら悲しくなりて涙の落つるを覺えず、酒後こそよけれ、君は善く飲み
 玉ふか、いかに。

やま、べとかいふ河魚のあぶりたるを肴に、さしつさゝれつゝの虚禮を
 省き、互に手酌の盃に舌鼓ならし合ふ。まこと、新知識より樂しき樂はな
 しどかや、驩興いよゝゝ加はりて、四五本の大體は忽ちに倒されつ。かの
 人も今は酔ひたりと覺しく、さきのほどの稍やおごそかなりしにひき
 かへて、動かす舌の根、すこしは覺束なげなるが、時には笑諺をさへ交ふ
 るにいたりぬ。われは話聞かむと思へば、よきほどにあしらひつゝ、約束
 の話は立消えか、小兒だましの乳母の言葉、あそこからは、よきもの進せむ

などいふはかなきことのやうには見えざりしものをと、さしせまる。げに然り、われは敢て忘れたるにあらず。されど、うたてや、かの話かたらむとすれば、このころよき美酔も醒めはてなむ。好し、好し、醒むれば、また飲むのみ。さらば聞き玉へや、君。

こは改造にあらず、何もなきところへ、西の國の文明をそのまゝに移し、なりといひ誇る札幌などこそ、さすがに都らしけれ。こゝ北海の内、地は、君も見たまふ如く、廬舎稀少にして、曠土未だ拓開せられず。山谷なほ人跡なきが多し。されば、村里とほき絶境に入りては、數多の危難に遭遇するをつねとぞすなる。數ふれば、はや三年のむかし、わが始めて職を奉せしとさきのことなりき。同僚一人と伴ひ、測量のために、このあたり近く來り、にうしたつぶつふの山の奥を窮めむとて、雨龍川の一支流に循つて溯りぬ。物語は、實にその川源の一夜にこそあれ。

凡そ、このあたりの山谷は、全く逕路なければ、ことさらに、河床の中を

歩むなりけり。磊砢たる巖石を躍り越ゆるは、まだしものことにして、溪水の瀑となり、潭となれるところなど、傍の林藪をくゞりぬけざるべからず。むかしより斧斤入りしことなく、原人時代そのまゝの景象をそなへたる山峽の間、熊笹をはじめとして、よもぎ、あかざなど、そのたけ一丈餘りなるが、繁生密合して、手足をからみ、利刃を以て向はざれば、道開けむとあもふほどなり。樹木の類は、ごま、まつどろ、の木、おんこや、ちたも、しらかんばなどにて、倒れたるは、そのまゝに横はりて、さながら巨蟒のごとし。跋涉の困難は、いふまでもなく、ひねもすあるけば、とて高が五六里のみ。炭焼ごや、狩ごやなどあるべき筈もなければ、行き暮れしところに、て野宿露臥すといふ寸法にして、準備品も頗る多きを要するなり。この時、われ等は三人のあいぬをやとひて、郷導とはなしぬ。かれ等は、可憐なるあいぬの中の、また特に、性質善良なるものなりき。

かくて雨龍川の一支流を溯り、一日行くこと數里。明日こそは北側よ

り路をもとめ、にうしたつぶこつ、ふの山を攀ち、絶巔に測量標を立て、むと決して、この夜を窮谷の底にあかさむため、布帳てんとうをはりぬ。日も暮れたればにや、名もしらぬ小鳥の群をなして飛びめぐるがあり。その聲のいと奇なるが上に、あまりちびたゞしく鳴きければ、あいぬの中に年老いたるは眉を蹙めしやうなりき。

あいぬ等のたち働くさまは、いとまめくしく、樺カハの葉と皮とを燃し煮炊をなして、夕げをすゝめぬ。それも終りたれば、われ等ふたりは石松いしろうをしきならべたるしとねの上に、手足をのばして偃臥しつ。溪山を跋涉したる一日の勞苦、いとさびしきものから、山氣身にしみて、夏ながら蝦夷の深山の一夜、さすがに肌さむく覺えて、いもねられず、ひと帳外に出で、ながむれば、胡沙吹く風はあらねども、幽霧滄勃として大壑をうづめ、半輪の月影は、愁ふるに似て、いともものすごく、縹糊陰靈の裡に隱見する亂山幾十百峰、形姿更に奇に、さながら大怪魔の躍立するが如くに

も見られぬ。

帳中に入りて一たびは睡りしが、またいつしか覺めぬ。慣れぬ野宿の故かあらぬか、何となく心落ちるす、まぶたは閉づれども、神はいよゝゝさえたり。同僚の人のあまた、び寐返りうつを見れば、これも、かたばかりねむれるにや。

あいぬ等は、ささほどより火の残れるほごりに坐し、われには解し得ざる土語をもて、こゝろよげに打語らひつゝありしが、わが寐さめの今の時にも、なほ起きてありき。こゝに不思議なるは、かれ等の舉動なり。何やらむ、ひそくゝとささゝやき合ひ、あるは立ちて、ぬき足、さし足、音せぬやうに布帳のすみくゝをのぞきめぐり、あるは嗚ぐまねして、みなまた元の坐にかへりつ。再びさゝやく聲のいと沈みたるにぞ、模様たゞならず見上げられける。しかも是れ、わが思ひ憐めたるにもあらざりけり。

あいぬは、可憐の民なり。われ等に對して惡意など挾むべきいはれな

し。されど、われはその事のもとを推知し得ざりしかば、いさゝか戒嚴する心もありて、いざといはむどきの用意をなしぬ。やがて友をば揺り起し、あゝぬ等の居るところにいたりて、何事ぞと問ひつ。

かれ等は、いたく驚きたる體なりしが、ことごとくしくも、手を以て制しに、し、ば等の知るべきことならずといひ、唯だ頭を打ふるのみにて、し、ば問へども、はては、いらへだにせず。なほも、しきりにかたりつゝ、けていよ／＼安からざるさまなり。かれ等の顔色といひ、舉止といひ、害心なきこと明かなるものから、疑惑はまたいよ／＼まさりぬ。われ等は、今さら臥しもえせず、なほその傍にありて、絶えず目を彼等の顔に注げり。かれ等は、ひたすら、さゝやき合ひしが、やがて相談一決せしとおぼしくて、三人ひとしく、われ等が膝の前にぬかづきぬ。

三人の中にて、最も若しと見え、且つは、いくらか本土の語を解するもの、秋の小草のごとく荒れたる鬚髯の奥なる口を開きて、いへるやうに、

し、ばよ、／＼に、し、ば等は、まだ知り玉はじ、この布帳の外には、さきの程より四頭の熊ありて、内を窺へり。これは、ほ、く、よ、つ、く、と名づくる世におそろしき熊にして、人馬など取り食ふものにこそあれ、われ等みたり、にし、ば等ふたりのいのちは、息一吹に消えなむとするは、かなき春の泡雪にも似たらむかし。帳中の人は、みな死地にあり。されど、手をつかねて死を待つは、頗る愚なるに似たり。我等の命は、惜むに足らず。もしに、し、ば等尊きし、やもの二人を死なさば、われ等は、天つ御空の上にも、す威力限なきかも、おの罰をやうけなむ。おそろしきは、これぞかし。

いまは、むかしなり、指折りても、數へがたき程、あまた、び、花さき、花落ちけるむかしなり。南の方なる神の御國より、女神ひとり、くさ／＼の珍寶を積み載せ、うつぼ舟に乗りて、こゝよりは程とほき、西の濱邊なるし、つないといへるところに、漂ひつきたまひき。氷の海より、吹き來る潮風のいとも、きびしき荒磯邊に、さまよひて、住むべき家もなく、食ふべき糧

も盡き、今はたせんすべなくておはしけるとき、一頭の牡犬、何處よりかきたりけむ、尾をふり、耳をうごかして、女神にちかづき、しるべ顔して導くに、女神は、いどうれしくて従ひゆき、海邊に近く、大きな巖窟を得たまひき。かの犬は、日々遠くはしり去り、河海にあさりては魚介藻草をあつめ、山野に入りては木菓草實を拾ひ、かへりて捧げすゝめければ、女神は飢を支ふるにことかゝず、命をつなぎつゝ、長き月日をすごしたまひき。さるほどに怪しや、女神は、いつしか、みごもりて、犬の子を生み玉ひけり。あいをいな、かもあといへるは、その名にして、それが、われ等の祖先とかや。されば、われ等の種族は、まことの名をらくぐると呼び、鼻にて嗅ぐ人といへることなるよし。これは古き翁のかたり聞かせたまひしことなれば、いつはりあるべくもあらず。まことに、われ等は犬の子なり、獸の後なりしや。もは、尊き日の神の御末とかや。しや、もは主なり。あいぬは僕なり。われ等は、今にしばのために、命を棄てざるべからず。僕はもとより

主のために死すべきものなればなり。

われ等は、こゝに心を決しぬ。まづこゝなる背面の門口をひらき、一齊にわめき出で、まさりの刃のつゝかむかぎり、猛獸と格闘すべし。熊ははや帳中に人なきこと、思ひ、必ずや、われ等を追はむに、しば等は折を見はからひ、疾く路をもとめて、もと來し方へ走りたまへ。一人のあいぬは一頭の熊と闘ひて、大方は勝つものなれど、今は熊四頭とあいぬ三人との闘なり。われ等は、よもや生きて還らじしや、ものために棄つる命、露ばかり惜しゝごにはあらねど、家には妻あり。つねのかたりぐさに、われを暖き爐邊に帯解きてもあらしめむ。ごぞいひゐたる。かの女の生みし穉兒もあり。今朝わが立ち出でける時も、そが水より清く、星より明かなる腫もてわが顔を打ち眺め、あふるゝまでに満面の笑をたゝえき。これ等かわゆきものよ、指折りかゝめて、わがにしば等のためにつごめを終り恙もなくてかへらむ日を待ちつゝ、ぞあらむげに忘れがたきは妻子の

ことなるかな。されど、いま思ふも益なし。あはれ、願はくは、にしは等よ、今宵の事、つばらに、かれ等にかたり聞かせて、よきに慰めてたまへかし。扱ても、わびしや、さきに夕ぐれのごき、美嘴鳥ミソビカの鳴く音よ、のつねならず聞こえしは、この危難の兆しるしなりけり。そを悟らずして、こゝに宿りつるは、われ等が運のきはみにこそ。

かく語り終りて、かれ等は髯を撫でたる手を胸にあて、天を仰いて長き溜息、一つ二つつきぬ。

これを聞きたる、われ等二人の驚愕は、いかばかりなりしぞや。殆んどせんすべを知らぬまでなりき。まことにあいぬは三人にして、熊は四頭とかや。されば一頭の熊は離れ居て、われ等を追ふことなしとしも限られず。われ等は、幸にも逃れ果たし得べきか。さはいへ、われ等二人、柔弱なれども男なり、縛雞ヒトリトリの力なきまでもにもあらず、拳銃ケンジュウを手にして必死の勇をふるへば、猛しといへども一頭の熊に抗敵し得ざることやはある。

かく思ひながら、二人口をそろへて、人は五人、熊は四頭なり。汝等はしり出で、闘ふとならば、われも續いて出で、猛獸を相手に生死を決すべし。死なば、ともに死なむ。しやも、あいぬも、みな人の子なり。命に貴賤のあるものかは、われ等は遂に汝等を死地に殘して、ひとり生を僥倖するに忍びず、といふ。

あいぬ等は、しばし、思に沈みしが、やがて頭を左右に打ふり、いな、く、勝つべき見こみ更になし。ともに死ぬるは、いよ、く、無益なり。もとわれ等が命は塵より輕けれども、にしは等は尊きしや、もの種なるが上に、公のつかさ人とかや、貴賤のけぢめは、こゝなりけり。理を非にまけても、わが言に従ひたまひね、といひて、しば、く、争へども、遂にうけひかず。ふたりは、なほも遲疑してありしが、あいぬ等、しきりに促して止まざれば、心ならねど、愈よそれと決し、官の爲に調査せし書類など、緊要のもの、み身を身につけて、用意すでに了りぬ。

帳中の火、今は消えて、おやめも分かす。あいぬ等は、かはるゝ、わが側にさぐりより、わが手を握りて、告別の意を表しぬ。かれが驚きて手をひきたるは、わが兩眼にあふれたる熱き涙のかゝりしにてもやあるらむ。吹き入りし腥風一陣、忽ち哮り出でし猛獸の聲に、すはや帳中に躍り込みしよと、思はず、知らず、身も慄ひ上りし一刹那、あいぬ等は、早くすでに帳外に突き出でしなりけり。さてはと心づきし後は、恐ろしきもの、見たしてふ世の譬にもれず、しのびて布帳の透間より伺ひけるに、身輕にいであちて、唯一の武器とたのめるまきりを揮ひつゝ、馳せ行くらむ。あいぬ等の影は見えず、敵を誘ふ狂呼の聲、百歩の遠きに聞こゆるのみ。ついで追ひ行く四頭の大熊、月の薄明りに、それとも認められしが、大さ牛にもひとしかるべく、躍り走すること馬よりも早く、そが咆哮する聲には、山根も震撼せむ、ばかりなるに、いたく肝つぶれて、三年の命、一時に縮むをぞ覺えける。

うしろ髪ひかるゝごとく、さすがに心は残れども、もしわが命失へばあたらあいぬがこゝろざしを、水の泡の無にしなむかとおもへば、急ぎたちて、今日來し路を馳せもどりぬ。いまは命がけなれば、さながら野獸などのごとく、灌莽を排して痛さも覺えず、巖につまづき、川に陥りしこと、幾度なりしか。やうやく一里ばかりも、にげ延びて、たうげの頂にぞつきぬる。熊もこゝまでは來らじとおもへば、しばし立ちやすらふ。身にはところゝ、いたみあり。あらため見れば、巖角などにて傷けしにや、血は流れて洋服の上にもにじみ出でたり。時は夜半の頃にや、月色乍ち怪霧の中に沈みて、殺氣壑底にみち、泉聲冷澁して、いとも咽びがちに、陰風一幕、林木をうごかし、さつと面を拂へば、死人の手のごとく冷かなり。遙なる方には、あいぬと熊と鬪ふ聲にや、折々こだまにひびきて、いと凄しくぞ聞えける。萬死の中に一生を拾ひ得て、からくも、こゝまで來り得しものから、恐懼の心は、なほ失せず、心臓の鼓動は、つねにもまして、風のそよ

くど草木の動くにも心ぞおかれたる。

夜ひと夜、息もつぎあへず、走りに走りて、かのあいぬ等の住みし村にもどりぬ。こゝに、かれ等の友なるべきあいぬ數十人をかり催して、用意こそくしく、またもや、おなじ道をたどりて、かの處にゆきぬ。こゝは布帳をはりし其處より、百餘歩をへだてたるどころ。見れば無残やな、三人ともに鬪に打ち負けて、貪食飽くなき猛獸の餌となりて終りけむ、たゞ白骨のみぞ狼籍として残れる。われ等は、いまさら夢のこゝちして、しばし呆然として打守りしのみ。傍には、め、の、こ、も、穉兒を抱きたるが、をどろくしく黒髪ふりみだし、地にひれふして、さながら絶え入るばかり號哭するがあり。これや、かれ等の妻なるらし。

伴ひ來し中のあいぬの健兒十數人は、奮然として起ち、三日を期し、その友の讐を報ひむとて、いかめしく、結束し、弓を挟み毒箭を帯び、はや林藪を押し分けてすゝみぬ。かれ等、果して志を遂げたりや、否や、聞き知らず。こたび又公務のために、かの地あたりへ赴くなれば、その折にこそ知るべけれ。

話といふはこれのみ、わが語りざまの拙ければ、さのみは聞こえざりけむ。われは、たゞ、あいぬの義勇を知らしめば、足りなむ。あはれ、彼等はわが爲に、その一身を擲ちしなり。思ひ出すたびごとに、そゝぐは涙の一しづく、これや、こよなき手向ならむかし。

かの人の聲は、くもりぬ。されど忽ちおもひかへしけむ、あはれ酒も醒めはてぬ、いで再び酌まむものをと、手づから、また數杯を傾けつ。玉山すでに頽れて、かれは、腕を枕とし、杯盤狼籍の間に横はりぬ。

われも、しばしは感に堪へかねつ。こゝにまた、ことばがたきを失ひたれば、北海經營の大策、いまさら語りつゝけむよしもなく、醉をさまさむと起ちて、檻に倚り、涼風に嘯く。東北の方には、重疊たる夜山の影、いと黒く、にうしたつぶこつぶといへるも、そのつゞきにやと見つめてぞゐた

百二
る。今まであかゝりし月は、一團の雲にけたれて、たちまち、その影をかくしつ。晴れわたりし夜半の碧落、ほのくらくなりける折ふし、銀河を横絶して流れし星の数は、兩三點。溪山のあはひには、河霧白くたちこめ、林樹をへだて、石狩の大江、水音すみて、いと高し。

憶曾遊

其一

曉嵐晴るゝ瀬戸の海

おもひをやるに狭けれど

白き濱邊に玉藻刈る

少女ゆかしも、いつく島

むかし戀しみ、たづね來し

神のみあらか、うらさびて

大宮人の春の夢

今し何處をめぐらむ

星空清き宵闇の

社殿のめぐり百八の

ごもしび妙にかゞやきて

汐満つらむか廊の下

あるは孤燈の影うすく

秋の旅寝に堪へかねて

更け行く月に迷ふとも

鹿のねぶりはさまざまな

たゞ初霜のおきそひて

み山の紅葉色に出ば

から紅の眞帆の影

むかしの幣の名残こや見む

其二

ひとり旅路の末遠く

すぎし山川行くさきも

同じゆかしの心には

いづら故郷と定めてむ

さくら木めぐる糸遊に

翅もかろく舞ふ蝶の

夢の跡追ふつばくらめ

汝だに古巢のなからじや

エロスの征矢に胸裂けて
おもひ湧き出る身の夕ゆふべ
大空しのぐ富士の根を
仰ぐも今や遅かりき

都を出で、玉くしげ
箱根路こえて春野ゆき
しばし渡頭にたゝすめば
水音かなし狩野川

入日に遠し三保の崎
あすか朧の新月夜
いつはりならぬ天人の

羽衣の松にかゝる見む

鎮西遊記の首に

鳴る神遠く雲散りて
入日まばゆき山の峽
麓の里の森黒く
萬象みな活きて見ゆるとき
田の面にうつる空青く
虹の七色あざやかに
やどりを急ぐ谷川に
なくや河鹿の雨の音
月待つ頃の宵闇に
ちるや螢の露の色

あゝ雨露のなかりけば
涙も歌もあらましや

うばら花咲く野邊の路
薫をおくる朝風に
しらべ楽しき蜜蜂の
羽音にさむる蝶の夢
舞ひたつ方に我が魂も
あくがれ出づる心地して

ゆくへや雲の夕端山
ゆくへや空のわたの原
風と潮の樂を聴き

雲と嵐にさけぶとき

誰か浮世の渦中に

まかるゝ身とはおもふべき

扇はいづら夏の月

一壺の酒の夢淡く

浪の枕に堪へかねて

聞くは西國船の歌

詩神の影をなつかしみ

胸の泉に湧くにまかして

恩 愛

春宵一刻千金を惜しと思はぬも、その本はといへば、花あるが爲にし
て、その花にぬるてふ蝴蝶の夢の世に、唯だく狂へどこそ。げにや時は
流水に似て去つて住まらず、若き時の再び無きは言はでものことなる
をかしましや、何を六づかしく浮世の馬鹿者ども、いでその膽玉をひし
ぐばかり、吾こそは、思ふ存分、遊びても呉れなむ。むかし人は、十萬の腰纏
鶴に乗つて揚州の地に舞ひ下るを最上の癡願となししやに聞けど、そ
れよ危き仙術の一段、取り除きなば吾身に取りて及びなき望にもあら
じを、よしや親ゆづりの身代、敲きつぶした處で、吾力にて建て直さむに
は、誰れ何の言分かあらむ。さりとは世の中の運てふもの、吾にのみ向ふ
ど心得たる口ぶり、かく極めてさへ置けば、萬事に心やすきこと、言ふま
でもなく、いでや賣る人より買ふ人ぞ、哀れさ、まさる色の道、浮川竹の其

中に品はいくらもあるなれど、松の位の中にしも入山形に二つ星の光
 かゝやく全盛にくらぶべきもの、いかでくゝあらむ。明くるわびしき葛
 城の神にはあらぬ、きぬくゝの別には、寐みだれ髪の頬にかゝるも愛敬
 深く、人待つ宵の化粧は、さゞがにの蜘蛛のふるまひ兼ねて知る衣通姫
 の俤ありなど、心の迷、痘痕も笑、磨と見ゆてふ理を知らざりしこそ、をか
 しけれ。さて風流の心得違ひ、誤つて一たび足を人間混濁の巷に入れ
 初めしよりは、はや幾くその年月をや経たりけむ。飛鳥川の淵瀬、いつしか
 變れば、家運やうやく傾き初めつ。あらむかぎりの財寶、使ひ盡し、後は
 歡樂極つて哀情多し、人の目には、前以てあらかた極まりてもありし通
 り、顔回ならねど、一筆の食、一瓢の飲、陋巷といへば、取りも直さず横町の
 路次、裏店のわび住居、昨日の榮華を夢と觀じて、父母妻子なきこそ、まだ
 くゝ心安くもありけれ。かくて古川の水絶えざりし中は、兎にも角にも
 元はといへば、御乳母日傘に飽くまで柔弱に育てられし身の、何一つ覺

え込みし藝とてもなければ、坐して食ふときは山も空しく、手當り次第
 に、そこの物ども賣り飛ばし、衣服は世に身の皮といふを、やがて吾か
 らへがして、食ひ盡し、北風さむき雪げの空に、着たる儘なる布子唯だ一
 枚床板まで引めぐりて圍爐裏にくべし。其跡は四壁山立、野ぶせりの小
 屋にも劣りし空家の中、とてもくゝ居られたものに非ず、打棄てられし
 此身には、鼻かみし跡の反古半びらの呉れ手だになく、浮世に情なく、人
 の心に誠なきは、いふまでもなきが上に、うしろ指されて、こよなき嘲笑
 の種となりぬるぞ悲しき。無明の醉さめしことの遅かりし一事、あくま
 で悔しく、幾日の飢を忍びし身體を漸く起し、ふらくゝしつる細き脚を
 踏みしめくゝ、何處といふ目當もなく家を出でけるが、外目には、不仁の
 極なれども、かくては何が浮世の樂寧を死ねかしの思はるゝばかりな
 れど、まだ死神の取り付かねばかして、人なき森の蔭、首縊るに、いとも屈
 強なる松の片枝ありけれども、禪はづして投げ懸けむともせず、年に一

度必ず死ぬ人ありと傳へられし淀みたる青淵の邊に來かゝりしも小石袂にさらへ込まむともせずかゝる處々空しく行き過ごしやがて黄昏の程ちかき頃巍然たる城門の前に來かゝりしが、ごある石の上に腰を打懸け、どこを押せば出るとも言ひたげなる奇すしき呻き聲を發し天を仰いで長嘆する男ありけり。

折しも來かゝりしは死に損そとひの老人、腰は梓の弓なれや、汚きたけれど珍らしきまで黄ばみし髯のみは、いと尊しと見なば見ぬ前の男とくらべて、團扇いづれとも上げかぬるばかり見すばらしき其姿、世の常の同病相憐むといふ格にて、話馴れくしく彼方より仕懸しに釣られて、若氣の至、身の失と錯とより初めて、はては血すぢの末に連る奴原ども、兼ねてより多少の恩は着せても置きけるを、喪家の狗、追ひ拂ふと同一程のつれなさ加減、貧人には有り勝ちの惡口まで絮々として言ひ續けしが、老人からくくと打笑ひ、たつた今、御身が本の身代、立て直さむに、幾何の金あれば善かるべきぞと、さりげなくいへりしに、先づ三四萬とこたへければ、さりとは僅ばかり、それ程にて足るとならば、こなたより進せむなれども、事の序なれば、ごものことに、今少し大きく出ずやといふ。この老爺おやよも狂人にては、あるまじきを、人の心も知らず、何に譎言たはごとぬかすぞと、常ならば、拳の一つも喰らはすなれど、今は其程の元氣もなかりければ、此處こゝさばかりの騒も起らず、あまり度々問はれしも煩うるさく、又ふと胸に浮びしは、この老爺、世にも稀なる神變不思議の大盜にて、金した、か何處の隅にか埋め置きし者ならむには、ちとばかり裾分に預るも、今日の境涯、うれしからぬにもあらじなど、おもひければ、つゆ怒りし色をも見せず、さては十萬といへば、前にもまして高笑し、もそつとく、ご彼方よりせり上げ來るを訝かしみ、世に用もなき戯言たはごといふ者とは思ひながら、なほ例の心のありければ、百萬といひ、更に増して三百萬といひしに先づ其邊にてよかるべしと答へ、やがて屹度容かたちを改め、其金かならず與

れば善かるべきぞと、さりげなくいへりしに、先づ三四萬とこたへければ、さりとは僅ばかり、それ程にて足るとならば、こなたより進せむなれども、事の序なれば、ごものことに、今少し大きく出ずやといふ。この老爺おやよも狂人にては、あるまじきを、人の心も知らず、何に譎言たはごとぬかすぞと、常ならば、拳の一つも喰らはすなれど、今は其程の元氣もなかりければ、此處こゝさばかりの騒も起らず、あまり度々問はれしも煩うるさく、又ふと胸に浮びしは、この老爺、世にも稀なる神變不思議の大盜にて、金した、か何處の隅にか埋め置きし者ならむには、ちとばかり裾分に預るも、今日の境涯、うれしからぬにもあらじなど、おもひければ、つゆ怒りし色をも見せず、さては十萬といへば、前にもまして高笑し、もそつとく、ご彼方よりせり上げ來るを訝かしみ、世に用もなき戯言たはごといふ者とは思ひながら、なほ例の心のありければ、百萬といひ、更に増して三百萬といひしに先づ其邊にてよかるべしと答へ、やがて屹度容かたちを改め、其金かならず與

へむなれども、今は持合なければ、時刻は同じ明日のたそがれ、處も同じこゝ城門の邊に來れよと、懇に言ひ、ふくめ、飄然として立ち去りぬるを愈よ不思議の想に堪へず、はかなき事を頼とするも、をかしけれど、若しやと云ふ心の無きに非ざりければ、次の日の夕暮、期を違へずして赴きけるに、圯上の老人、張子房を問ませし如き刺々しき言葉などは無く、欣々然として笑ひながら打迎へ、いざ受取り玉へとて、約束の金三百萬、たゞの一文をも欠かすに、さらりと手に渡し、姓名は問へども答へず、一たび踵を回らして後は、ふり向きもせず、やがて行方も知れずなりにけり雪中に炭を贈られしなど物の數かは、貧の極に、玉の緒のやがて絶えぬべかりしを縁もゆかりも無きに、本の身代以上の金、惜氣もなく、甜りし跡の魚の骨、猫にやる如く、人に呉れし世に奇怪なる老叟は、知らず是れ、銅山の神人か、將た金穴の主翁か。そは兎まれ角まれ、男は有り難きこと、の限と覺えければ、その後影を拜みしこと多時、よろこび勇んでかへ

り來り、家屋田地など盡く買ひ戻せしまでは善かりしが、なほ残りの金の何萬とあるに付けて、これだけは使ひ果たすも悪しかるまじと、舊病再發、自ら許せしが抑もの誤、又ぞろ破滅の基となりしこそうたてけれ、輕裘肥馬の奢、絲竹歌舞の樂は、まだしも、金さへあれば思ふまゝなる世の中に、誰が肌ふれむ紅の花、手あたり次第にへし折りて、その色香を貪り、酒色乾坤、狂興いよ／＼加はり來ぬれば、おもひ定めし限、いつしか越えて、折角建て直ほせし資産にも手をかくるやうになり、今は全く下り坂の勢、自ら喰ひ止めむ術もなかりしが上に、少しは自棄の氣味を帶びやがて、又どうにか成らうの心より、今度の分は費ひ潰した處で元々なればとて、人見ば如何に物狂しかりけむ、使ふは／＼、北斗を支ふべきばかりの千金、二千金、唯だ味憎漣にて水をすくふが如く、一たび財布の中を通すのみにて、瞬くひまに投げ遣り棄つる手品の早業、さしもの身代その度々、削るが如く取り減らされしが、今日を限といふ折など、覺悟の

けしき、殊の外氣味よく、家ぐるみありごあるもの、金に代へて、得たりしは百か、千か、將た萬か、贖ひ得たり、倡樓幾夕の興、惜しや翠帳紅閨の夢、曉さむく覺めはてぬれば、蘭燈なほ消えもやらで、枕に残りし烏羽玉の黒髮油の香高き一すぢ二すぢ、疇昔の名殘を留むるのみ、やがて立ちかへり行く廓門の外、朝東風ぬるき柳の一株、さすがに後髪を引くおもひあり、憎きは鴉までが、阿房々々と呼ぶなんめり、かくて男は又もや本の空阿彌、無一文の淺ましき身となり、そこへを彷徨て、數ふれば二年の前老人に遇ひたりし例の城門の邊には來かゝりつ。

跼天躋地、幸にまだ棄てざりし父母の遺體の外に、留め得てしもの空囊の唯だ一つなる憐れの境涯、土手八町の小夜時雨ほろにし、ぶくを物ともせず、快き醉を載せて車を走らし、君が情の假寢の床にと、あくまで浮かれし昔戀しきは、言ふまでもなく、夕まぐれ、我が身一つに憂き世の秋や深からし、つくるはぬ髭、風を吹いて、やゝ寒の空に衣なきは誰が子

ぞと、目に角を立て、路行く人ごとに怪しと睨まるゝことぞ悲しき、それも自ら招きし禍たること百も二百も承知にて、誰うらむとしも無けれど、寄る邊なぎさの捨小舟、さそはと潮にまかせてむと思ふに、こゝに不思議なりしは、吐く息も青からむす呻き聲の響に應じて、例の老人、何處よりともなく、ひよつこりとあらはれ出でしことなりけり。さきに惠みし大枚の金子は、焼石に水、むごくも使ひ果たされしこと、少しも咎めず、鯛釣り上げし夷の三郎を、その儘なる笑容藹然として掬すべきばかり、さては又ぞろ零落の深淵に沈み玉ひけむ、御身の成り行こそ世に哀なるものなれ。あれだけあらば、大方足りぬべしと取り極めしが、抑もの吾が誤、今にして手を引かば世話がひもなし。動かぬところ、入用のメ高は何程、遠慮入らねば申し聞こえよと、懇に言ひ出でけるが、男はなかなか穴にも入りたく思へる矢先、いたく愧ぢらひて啞の如く、はかしくしき答も出來ず、老人は口も酸くなるばかり、繰り返し、問ひけれど、唯

だ差し俯いて頭のふけを搔き落すのみ。この分にては、埒明かじと見て取りしかば、老人屹度心に決せしものゝ如く、さらば明日亭午の頃、前の通り、こゝに來よといひ、獨り合點の風度にてかき消す如く立ち去りけるが、男は嬉しさたとふるに物なく、耻をしも忍び、約を踏みて行きけるに、恵まれしは前にも増したるし、たたかの金、かぞふれば一千万とぞよまれける。

これを貰ひし當座ばかりは、いでや腑甲斐なき身といふものから、いかで長しへに世の物笑となりてや止むべき。後の世には福の神のやうに崇めらるゝ陶朱猗頓の輩、打出の小槌、揮ひしにあらねば、錢樹子の種を蒔きしにも非ざるべし。渠も人なり、吾も人なり、用を節し費を省きさへすれば、子母おのづから繁殖すべく、貨財の道の秘訣ぐらゐ、あらかた知れたもの、現にこれだけの資本、吾が手に在るからは、之を二にし、三にし、四にし、五にし、ずつと飛んで十にする程のことはなくとも、いつか大

恩の老人にめぐり合はむ折、顔赤らめずして濟ます位のことば、さばかりの難事に非ずとおもひ居たりしものから、克く終あるもの鮮しといひけむ如く、淺ましいかな、色界の因縁、惡を作して、なほ未だ止まず、錢が在るといふ無限の強みに、意馬心猿ぞろ／＼と狂ひ出し、いつしか翻然として心機一轉又一轉、所詮再轉は本の愚にかへるといふことぞかし、何時見ても、解語の花の香は深く、人間の樂土を圍みし一構、廓門を乗り越えて、誰も褒めはすまじき不夜城中三度かけの大功名、使ひ盡くしては前にも増したる零落の有様、同じこと、繰り返し／＼細かに書き立てむは煩はしけれど、酒陣歌場の全盛も今は夢なり、伽羅枕、身は野ぶせりの家もなく、わづかに雨露を凌ぐむし、小屋、夜ごご布いて寐る簀卷の薦も冷かなれば、こゝに蘭麝の移り香を忍ばむこと六つかし。

ある大福長者が世の人を戒めて君の如く、神の如く畏れたふとめどいひし孔方兄をあるそかにしたる罰は、觀面のほど恐ろしく、活ける甲

妻なき補乞となりはてし縁起の大略、仍つて件の如く、こゝに穢きたまくも餘生を貪りてありしに、ある日のこと、又しても例の老人の後影を、城門の邊に、ふと見かけるが、面目なさの餘、兩の手にて顔をさへ、足を空に逃け出しけるに、老人目ざとくも認め、どつこいと後より追ひかけて、之をしも引き留めつ。さりとは又餘りならずや、夢幻泡影世の中の苦樂、大方嘗め盡くしたる汝が一身、これからが面白きなり。さしもの塵縁、今や漸く滅びつゝ、行く末は清果を得べからむを、なほ心に悟ることの無しとにや。さばれ、今一度遣つて見るも善かるべければ、こたびは、即坐に三千萬を與へむ。若しこれにて身のしまり付き兼ねるとならば、貧の病は深く膏肓に入りて、とてもくぐり七加減にかゝらぬものと知るべし。さばかり福分の薄き上は、生れ換はりての又の世を頼む外あるまじといひければ、男はひし／＼と身に思ひ當るふしあり、出所不明の一老人、三たび吾を將死の厄より拯ひ呉れしなど、世に例を聞かぬことなれば、よもや

只者にては、あるまじく、必ずや、何かの用に吾を立てしめむとの下心より、金にて買收せしと覺えたり。さはいへ、その惠は報ゆるに物なきまでなるが上に、妻子眷屬とてもなく、とても世に捨られし身なれば、たとひ生膽を取らるゝとも、今さら惜むべきに非ずと、心に決し、さて老人にむかひ、この身、愚の極なること、まさしく悟り侍りつ。さばれ、これだけの大金賜りし上は、おのが身の爲にせず、何か一つ世の人の益になること成しはてむ。その後は、要なき此身、長者が命せらるゝまゝに、水火の中にも入りぬべしといひければ、老人莞爾としてほゝるみ、それこそ吾が兼ねてより望みしところなれ、御身にして産を治め、世に思ひ残すこともなくなりたらむには、來ん年、魂まつりの夜、必ず約を違へず、城隍廟ウツナのほとり、大きな檜の二株立ちならぶ處に來りて、吾と相見るべきなり、その折にこそ吾は御身を引いて、この苦しき塵の世を出で、未來永劫、かつて變せざる、かなたの大樂土に誘ひ行かめ、ゆめな忘れを、疑ひを、おこ

そかに言ひ聞かせつゝ、やがて手をば別ちぬ。

三度目には必ずといふ世の諺にもれず、男も今度こそと誓ひてし言葉空しくせず、前とはさながら生れ變りし人の如く、一心に業を勵み先づ良田數千畝を買ひこゝのへ、貨殖の道をさゝぐ、怠らず、崔巍たる朱門の裡、人見ば何の殿の御住居かと思ふばかりなるい、かめしき邸宅を構へ、これをめぐりて百にも餘りし貸長屋を建てしが、世のつねの負ひ目多く住むことならで煩ふ者どもを收め入れしは、いふにも及はず、蹉寡孤獨、哀れなるかぎり、くさくさの癡疾になやめる形のくせ、者ども見る度ごとに救ひ上げ、生者は養ひ、死者は葬り、及ぶかぎりの慈善の行、前に賤みし郷黨どもは、膽つふるゝばかり、打驚きて、季の世には又とあるまじき大仁者との名は、やがて照る日の下に高くなりかゝりしが、かの老人と約せしこと、露も忘れざりければ、絶えて、心を名利に馳せず、區々たる一飯の恩にいたるまで、盡く報むをはりし後は、今こそ此世を謝す

べき時は來つるなれとて、道心いかに堅く、召し使ふ者どもの中に、いとも正直なる一人を擇び、後事は善きやうに取り計らひ、唯だ世の爲にせよといひふくめ、吾は最早かへり來ること無きかも知れずとて、それとなく人々に別を告げ、さていよゝゝ其日となりければ、夜を冒して兼ねて約せし城隍廟へと行きて見けるに、果然老人は人待ち顔に、折しも傾きし月影いざよふ檜樹の陰に立ちそひて、空嘯きつゝ、ありしが、やをら手を取りて欣然相迎へつゝ、いざ吾が後に従つて來れといひもあへずよぼくしたる體には似合す、歩を運ぶこと、さながら飛ぶが如く、行方はいづこ白雲の山中ふかく分け入りて、亂石足を噛む、岨路の峻しきを物ともせず、千章の老樹、森々として暗く、小雨そぼふるを疑ふばかりなる嵐氣一片、人の肌骨を侵して冷かなるに、脚下に流る谷川の水、潺々たる響いも澄みて、いさぎよきが物にも似ず、打見るけしき、一步一步、浮世に遠くなり行くは言ふまでもなきが上に、吹くや朝嵐、夜色たゆたふ

空を拂へば、雲は歛まり、霧は消え、やがて金嶽高く四山の巔にさしかゝれば、當面まへに仰くばかりの懸崖の中腹あたり、五色の彩雲、目にも眩くらゆくとなびきわたれり。

四方は、かどくしき巖どもにて取り圍みし僅かに一笏の平地なれども、松篁翠を交へて、吹き入るや陣々の風、いみじき仙樂の律呂を飄へし、琪花瑤草、あたりに咲き満ちて、目もあやに處せく匂ひわたりつゝ、鶴は東林に飛び、鹿は西嶺に鳴く。かたへに立てる閣めきし一構、さばかり大きからねど、純金のさざはし、瑪瑙の柱、水晶の戸びら、瑠璃のしごみ、珊瑚のゆきげた、琥珀のうつばり、天上に在りと聞く蕊珠の宮闕もかくやと覺ゆるばかり、地には又金砂銀屑を交じへ敷きて、見るものすべてきら／＼し。庭の中央に押し立てし赤銅の圓柱に似て、いかめしく目慣れぬものを、何ぞと問へば藥爐といふ。長眉青く染めし白咽紅頰の玉女五人、目さむるばかりの冠帳を着けたるが、身じろきもせず、儼として爐

前に立ち列び、下よりは紫焰すさまじく燃えあがり、稻妻めきし閃光を發する度ごとに、牕戸に映ずれば、燦々然として眼つぶるるかど怪しまれ、雲氣あたりを繞りて隠々たるが中に、青龍白虎などいふもの、前後に分れ、うづくまり居て、さながら守護をなせるが如く、如何なる魔神も近づくべき便やすかあらじとぞ見えたる。

さきの老人は、一揖して去り、獨り屋中に入りしが、如何にしけむとみには出で來らず。待つ間の懶のろく覺えしまゝに、松下に坐して、いつしか眠に落ちしが、やがて呼び醒されて、がはと身を起せば、日はすでに西に斜にして、脚下の山谷、暮雲にとちたり。こゝに驚かれしは、例の老人にて、かつて見しとは全く様かはりて、六銖の衣の袖、翩然として風に飄へり、絳帳黃冠の打裝うちまなべて神さびたるが、い／＼怪しく、音に聞く仙人とはこれなるらしと、床かしくも、又おそろしく覺えぬ。

さだめて腹も空しくなりたらむとて、羞められしは白石三丸、仙酒一

扈服し終れば、胸の中の清々しさ、たどふるに物なく、骨さへ玉となりし心地ぞしたる。かくて屋前青石の上に虎の皮をしき、東を向きて坐はれど命じ、いざや、これより一夜の飛行、尊神惡鬼、夜叉猛獸、地獄など、汝の一身、攻めさいなまるゝは言ふにも及ばず、肉身のちなみある者ども、むごき目見せられ、ひたすら汝が心なやまさむと、すべきなれど、萬事は虚のみ、幻のみ、動かす、語らず、善く丹田を押し静めて、心に驚懼の名残を留めず、忘れても聲をな出しそ。若し一念起ることあらむには、翻然として吾が言ひしことども思ひ出でよといひ畢り、天を仰ぎ星を下する氣色して、いかに苦しども唯だ數刻、仙凡の別るゝは、この中ぞかし、勉よやくと、ねもごろに言ひふくめ、やがて影をば烟の中にかき消やしつ。

夜はいつしか更け行きて、空山寂さらに寂、物のけはひ、絶えて聞こえず。かくて何事の起るならむと思ひつゞけ居たる折しも、赤光一閃、燃ゆ

ゆる、燦天を焦がし、闇の夜を晝にかへたりと見る中に、旌旗、戈甲、いかめしき千乘萬騎、東西南北、四維上下に充ち満ちて、尺寸の地をも剩さず。やがて此方に押し寄せ來るが如く、鯨波の聲の震ひどよめく中には、坤軸須臾に打ひしがれむと怪しまる。真先に進みしは、大將軍と覺えて、身の長一丈あまり、人馬ともに金甲をよろひて、爛たる光芒、あたり輝き、前後左右に従ひし親衛數百人、一齊に劍をぬきそるへ、弓には矢をつがひたるが、こゝに男の坐せるを見て、警驛の聲、いとも高く、何者なるぞ、將軍のわたらせ玉ふ、疾く下りよといへども、默然として應せざりければ、さらしくしき劍取り直して、ねぢ倚り來り、顔にひいやり、一打あてゝ、名乗れゝと、ひたすらに促しつ。鬚髯戟張、目皆盡く裂けし怒の氣色、いかにも怖ろしく、吾こそ斬らむ、射らむと罵り合ふ聲、さながら萬雷一時に落ちかゝりし如く、いつ果つべしとも見えざりしが、やがて將軍の一叫につれて、群衆乍ち首を廻らすと覺えしが、光は消え、聲は收まり、山も谷も

元のまゝなる夜色に立ちこめたり。

ほつと一息つく間もあらせず、風さつと吹き來り、腥臭の氣、あたりを蒸しけるが、怪松亂竹、しげみ合ひたるどころ、ざわ／＼と響きて、長さ十丈ばかりの大蛇、血を盛りし盆の如き大口を開きて、霧にも似たる毒氣を吹きかけ、こなたを目かけ、草木を靡かして進み來り、これに次いで、毒龍高く潭より躍り、半身を雲に藏し、首を倒にして、下を向き、唯だ一口に吞まむとする如く、その他、蝮蛇まむしの類、幾千萬といふ數を知らず、そが一齊に吐き出せる線の如き舌は、猛火の焰、地にひろがりたるに、鬚鬚まゆげたり。かくて幾たびか、青石をめぐり／＼たる末、何處にか立ち去りけむ。程なく怪風一陣、林木裂くる聲あり、錦毛白額の虎、奔雷の如く吼えて、藪中より走り出づるよと見しに、玄豹五六、勢凄じく跳り來り、狻猊獅子など、悠然として歩み近づき、餓狼猛熊を始として、あらむ限りのおそろしき獸の類、これに従ひ左に盤まり、右に旋まり、哮なり合ひ、攫つかみかゝり、吾さきにと搏

噬を争ふが如く、あるは高く跳りて頭上を越ゆるもあり。世のつねは、魂身につかず、絶え入るべかりしを、老人の教、胸にあれば、我から腑甲斐なきを叱して、殊勝にも、神色動かざるさまを装ひつゝ、その立ち去るまで、泳らへに泳らへて居たりけり。

うつゝにかへりし程もなく、眼もくらむばかり、電光閃いて前後を掣し、火輪飛んで左右を走り、覺えず、後に倒れむとしつるに、阿香の車きしり行く響にやあらむ、霹靂つゞげさまに天の原ふみ轟し、おどろ／＼しく鳴りはためき、降りそゞ雨は、銀漢の水を傾けしと疑はるゝばかり、さしも愕然たる溪谷、たちまち濁水を漲らし、堯時九年の水、山を懷かね陵に襄のぼるといひけむもかくや。流電吼雷、いよ／＼凄しく、山川一時に開破して、十丈の洪濤、坐下に及び、渦旋澎湃の勢、ひたすらに増し行き、この青石を根より抜きて、轉まばし流すも、程あらず、おもはれしが、これも亦た束の間、に收まりて、あたりは、不思議にも、水の痕だに留めず。

光景一變身は今夜見の國無佛世界にあり。鐵壁高く閉ぢこめたる中に、猛火炎々として燃え上り、勁風に吹き殺がれし紅の焔は、長く延びて大地を這ひめぐり、周數丈もあらむ大きな平鍋めさしを真中に据えて、豆など煎る如くに、數千の人を一時に油煎りにする大仕掛、紂とかいふ暴主が始めたりと聞こえし炮烙の刑など、物の數かは、牛頭馬頭など諸の惡鬼に後を擁せられ、何時とは知らず、こゝに來にけるが、惡鬼の一人、男の頭をむづと抑さへ、名は如何に、名さへ聞こえば救さむといひけれど、前に金甲の將軍に遇ひし折と同じく、少しも口を開かざりければ、惡鬼ども、いたく怒りたる氣色にて、鐵のさつまた、おつ取るよと見えしが、男の髪の毛ぐるぐると二まき、三まき、ねちりからげ、空中に高くさし上げ、あはや熱せる鍋の中に投げ入れむとぞしたる。この時遅く、待てや、と呼ぶ聲聞こえて、數十の惡鬼ども、一人の女、引き立て來ぬるを見れば、浮世にありし昔、秋の夜の千夜を一夜にもとて深く契りかは

せし妻なりけり。無慈悲なるが、鬼どもの常なればにや、妻の手足を堅く執らへ、熱鐵の如くなれる地上に押しひしぎ、男を顧みて、名乗れ、若し聽かざらむには、目に物を見せて呉れむと、言ひもをはず、鐵をのべたる鞭を以て、女の背打た、くこと幾十回、忽ち息も絶え、くになれるを、傍なる鐵屏の上に釣り上げ、萬弩齊しく發して、身體すべて蜂の巢の如くなりしを、取り下ろし、肉を盡く切りきざみ、長き矛の先につき透し、猛火の上になし、皮肉しゆうくと音して、焼け盡し、頭ばかり残りて、大方炭となりはてしが、まだ息は絶えぬものと見えて、秋の野の露にすだく蟲よりも細き聲して、さても剛き心の男かな、世に在りし程は、比翼の袖も軽く、連理の枝をおもしろしと見て、露塵たがはず語らひけるを、如何なれば、この身に堪へ難き苛責を、人ごとの様に見てやはあはす。御慈悲を乞ふとせめてもの唯だ一言、この身に代りて仰せられずやと、涙のみこみ、怨の皆裂けしさま、凄じく眺め入りけるが、男は頭と

して、なほ物いはず。悪鬼は、ますく怒を増し、さらば見よやとわめきつゝ、頭ばかりになれる女の身に、錐をつき刺し、抜きては刺し、寸寸分に碎き潰ぶしけるが、男は見ぬふりして、色さへ變らず、打澄まし居たりければ、さしもの悪鬼羅刹、今は根氣負けせし如く、さても奇怪至極のいぶごき奴もあればあるものかな、これは世にありし時、妖術など心得たるものと覺えたり。さらば、今一度、大王の御糺明を煩はさむとて、引き起して、前後を擁し押し立て、行きけるが、大王以ての外に怒らせ玉ひし御氣色にて、やがて淨頗梨の鏡の塵を拭ひ、業の秤のや、傾きしを直さしめ、改めて男の吟味、一應をはりし後、大喝一聲、八大地獄殘らず引き廻はせし上、なほも苛責に堪ふべしとならば、思ふことある故、屹度連れ來れよと命じ玉ひつ。南閻浮提の下、三萬二千由旬、八熱八寒の大地獄、鎔銅鐵杖、碓搗磔磨火坑、鑊湯刀山劍林の苦言語を以て述ぶべきやうもなく、息絶えぬと見えて、よみがへりしは、幾度なりけむかゝる間にも、道

士が言ひふくめしこと、忘れざりければ、かつて呻吟の聲をも出さず。獄卒ども、又もや、いたく倦じたる氣色して、再び大王の御前に引き立て來りければ、吾、地獄の主となりてより、かゝる不思議なるしれ者を見ず、でもものことに、今一度、娑婆に追むかへし、改めて女と生れさせ、定業をはりし後、今日の腹いせに、十分苛責して、呉れむとのたまひ、玉の御簾さつと下りければ、男は例の三途の川のほとりまで、冥官どもに送られて、精靈ばかり、ふわくとして、幽明界裡に漂ひつゝ、月魄星魂、慘澹として、色なき闇の空に飛びめぐりて、浮世の人の目には、幾夜怪しき人玉としも現はれけむ。

いかにして生を此世に得たりしにや、田舎ながら、足らはぬものありとは、覺えぬ豪家に、一粒種の娘と生れて、蝶よ花よのいつくしみ、譬ふるに物なく、形の如く、乳母日傘に育て上げられ、生來よわくしき身のあらたら親々に心配かけて、針灸醫藥の絶間なく、看護の人に夜の目眠らし

めざりしこと幾度なりけむ。三四歳の頃と見えしが、不圖せし機會に、心なき婢炭火山の如く盛りたる火斗、あたりに覆へしけるを、驚の餘りに氣を失ひ、生れもつかぬ啞の身となり、秋の哀までを手眞似して話すさま、他目にもいぢらしかりしが、その後は病にも罹らず、やがて月日の小車、絶え間なくめぐりて、早くも二八の春を迎へぬ。風の前の花の色、宵の間の月の光、あでやかに薦開けて、世にならびなく美しかりしかば、見人ごとに物の怪のつきたる如く、行く末も知らぬ道に踏み迷ひぬる心地しけるが、物言はぬこと、如何にも心苦しく、粟のみ食ふ女すら人に合はさぬ親心には、いたく愧ぢらひしも、理や、深閨の中、人に知られず、垂れこめて暮らさしめけるが、世に時めさし勢猛の司人、是非にと所望し、人橋かけて、やいゝと貰ひたがるに、身分は提燈に釣鐘もどより似つかはしからず、その上、世にもまれなる不具者なればとて、幾度も斷りけるが、いつかな、聞き入れず、油紙に火のつきしやうなる催促し、心だに

誠にして情深くあらば、物言はぬとて何かあらむ。賢さ過ぎて牛賣り損なふは、まだしも、世には長き舌を甜めずりて、牝雞の晨する禍すらあるなれば、これは、こよなき戒にこそと、唯だ事ならず聞えければ、流石に辭み兼ねて、めでたく婚儀の式ををはりつ。やがて人の家に戀女房と据えられて、桂を焼き、玉を炊ぐ富貴の境涯、世にも人にも羨まれし上に、恩愛の契、あつくして、程なく、玉の如き男の子をさへ生めり。すぐれて賢かしく、花の笑顔、愛くるしきばかりなりければ、夫は嘗め殺さむばかりに、掌中の珠として、愛で慈くしみつ。ある日、酒まゐりし後と覺しく、かばかり珍らかなる稚子のかたちなるを、御身もせめて一言、可愛といひ得ずやと、せがみけるも、色香ばかりなる梔子の身を、今更にかこち佗びつ、悵然として、さし俯いて居たり。夫は醉に本心を失ひしにや、常のやさしきに似もやらず、くだくしく言ひ迫りつ、さまゝの手眞似して、世にも憐れに詫び入るゝをも聞き入れず、むかし賈大夫といひし人、類なく

容貌わろきが顔あでやかなる妻をなむ持ちたりけるを、その女、憂きことの限と覚え、言ひ甲斐なく、明し暮しつゝ、物をいはず、えも笑はず。かくて三年を経たりし後、春の野に出で、もろともに遊び暮らしけるが、雉子の澤邊に立てるを見かねてより、弓矢を取りて名を得し程なりければ、立ちどころに射殺しけるが、妻は年ごろの悪くさも忘れて、物を言ひかけ、打笑みて、その後、淺からず契をこめて、樂しき生涯を送りしといはずや。生れつきし此身の人品容貌、さばかり勝れずといふも、賈大夫ほどには非ざるべく、自ら許せしまことしき文の道は、弓射る藝に、いかですぐれざらむや。さるを、汝、長の年月、口を開いて物だに言はぬは、吾を世におどましと思へるにや。さあらむには、不貞の妻の腹より出でし此子、生かし置いて何かせむと見るくかはる夫の凶惡相、夜叉を其儘にて、赤子の兩足しかと握り、倒に提げ、おはたゞしく庭に馳せ出でけるが、頭を大石の上に打つけ、おはれや一聲も出さず、肉醬となりはて、鮮血

數歩の外に濺ぎし世にも稀なる無殘の有様、とても目にあてられず、傍に見る身は、鐵丸喉に入る、よしも苦しく、さすが親子の情の遣る瀬なくやありけむ、さしも嚴かに聞えし教の程、ゆくりなくも、うかど忘れてこたへし悲しさを一度にわつと溜涙、雨と降りそゞぎて、吾にもあらで、一聲高くあつと叫び出でつ。

ありと見し幻の影は、一時に消えて、絳帔黄冠の道士は、儼然として前に立ち、二十日亥中の月は、淋しげに木の間を洩れぬ。藥爐の底、爆然たる響、たちまち凄しく、紫焰はつと燃え上り、祝融暴をなし、燦爛たりし傍の家は、見る間に烏有と成りはて、猛風四面に吹きすさびて、崑岡の火、玉石俱に焚き盡すにも似たりけり。道士は從容として、手に印を結ぶよと見えしが、雷電ひとしく發し、大雨注ぐが如く、頃刻の間、さしもの烈火、残りなく消え、これに次いで、大喝一聲、雨は歇み、雲は收まり、木の葉の上より轉ろび落つる露の珠は、一粒ごとに、きら／＼しき月の影を宿せり。

道士は悵然として、已みなむく〜と幾度か嗟嘆しつゝやがて男を呼びて、前に來らしめ、汝、元來土中の骸骨、吾知らずして、かゝる大事をおほせしにはあらねど、半生の歡樂を夢と悟りて、自ら新にせむとの一念發起浮きたるふしとも見えす、一善漸く遂げて衆惡盡く退く自然の天理、俗縁すでに絶えなむとして、仙宮瑤闕遠きにあらねば、吾いさゝか之を試みたりしに、七情の中、喜怒哀懼惡欲の六は、すべて能く忘れしものから唯だ愛の心の去り難をいかに業とやいはむ、果とやいはむ、かの折もし聲だに出さざりせば、仙丹成るを得て、汝も亦た昇天の幸ありぬべかりしを、天は覆ひ、地は載す、その間、生靈幾千億、仙才まことに求め難し、吾が藥重ねて煉るべきなれど、汝はなほ塵の世に浮沈すべく、唯だ來生の福を期せよといひをはり、夜はほのく〜と明けかゝりしに、願をもて松間路ある方をさし示し、おのれは忙しく衣をぬぎ棄て、焼け残りし藥爐の底に潜り入り、中の軸として押し立てたる鐵柱の、猛火の名殘、赤く鏽び

たるを、刀して削り落しつゝありき。

満身の冷汗を浴び、唯だ夢かとはばかり、たどられて、いらへせむ言葉も覺えず、詮方なければ、悄然として山を下り、やがて流水に伴はれて、半日の行程、漸く人境に近づかむとしけるに、如何にしても悔しく覺え、今一たび彼の道士に見え、心から過を謝し、再び試にあづからばやとおもひ踵を旋らし、彼處にたどりつきて見るに、森々たる林叢、深くたちこめて絶えて人跡なく、いづくをそれを知るよしも無かりけるとかや。

凡そ種々の障魔は、我が七情の幻相のみ、ひとり、至人は、情なく、仍つて夢もなく、形は槁木の如く、心は死灰の如くなるべし。愛や、固より、天倫なり、燒野の雉子、夜の鶴、いづれか子をば思はざる。さばれ、道心あらむものは、愛に溺れず、西行が家を出づるとき、稚子を椽より蹴落して後をも顧みず、惟然が絶えて久しき我が娘にめぐり合ひしとき、重たやの雪拂へ

どもくど口ずさむ。世の常より見ば、物狂ほしさの限、さながら人に非
ずとやいはむ。あゝ胸に梵智なく、濁世を厭離せむこと、さても難いかな
難いかな。

早川の畔に立ちて

けさ立ち出づる蘆の湖
巖に咽び、石に鳴り
夕にそゝぐ相摸洋

ながれ早きを其名にて
もとの雫や末の露
水源見かへる暇もなし

戀にやつれし乙女子が
やさしき顔をうつすとき
しばし巖間の水かゞみ

山にうれしき詩人が
やさしきしらべ誦するとき
しばし谷間の琴の音

鶴鴿の尾の暇なき

浮世はつねにうつれども
行く川あなじ藍の色

日ごと水瀬の瀬枕に
あなじ思をかはしつゝ
何時か果つべき戀ならじ

里のたをやめ云ひけらく
わが此盟かはるとき
水逆みかじにながるべし

谷の山がつ云ひけらく
わが柚業ももわざのやまむとき
この水まるくうづまかむ

陽炎かげんもゆる若草の
春しづかなる岸の上
夢に跡あり白すみれ

螢火みだる川添かほぞひの

波をくゞりて若鮎の
早瀬になやむはかなさよ

ちりて浮べる紅葉に
世のわびしさをしめしては
かなしき水のこゝろかな

吹雪に暮るゝ水の音
羽ばたく鳥の夜よないて
かくして川は、いつまでか逝く

讚岐院

保元元年七月十一日の辰の刻、官軍の大將下野守源義朝の計はかりとして
上皇の御所白河殿に火をかけしに、折ふし、西風はげしく、咸陽三月の禍
もかくやとばかり、餘燼すさまじく、天を焦し、地にひろがりければ、院中
の女龍めのだわらはなど、泣き悲みて、方角を失ひ、たすけを呼ばりて、逃
げ惑ふ。勇猛世の常ならず、一たび御所に参りし上は、たとひ死すとも、君
が御側そばを離れじと、心には誓ひし武士ぶしも、生憎あまげに、これが足手まどひとな
りければ、進退さらに自在ならず、おのづから、たちろぎて崩れかゝり、い
づくを指すともなく、足に任かせて、おのかじ、落ち行く有様は、峰の嵐
にさそはれて、東西に吹き迷ふ冬の木ノ葉に異ならず。上皇も、御馬に召
されけれども、乗り慣れ玉はねば、いと危げに見え玉ふを、藏人信實、御馬
の尻に乗つて、抱きまゐらす。かくて、爲義をはじめとして、家弘、光弘、武者

所季能等を御供にて、如意山へと入らせ玉ふ。山路羊腸として、難所ことの外多かりければ、やがて御馬を止めて、御歩行にてぞ登らせ玉ひける。あやしき賤山かづだに行き惱むといふを、昨日までは姑射の瓊の林にしめさせ、仙洞の霞の臺に起き臥しせさせ玉ひし御身の假りにも未だ習はせ玉はねば、御供の人々、心して後をきづかひ、御手を引き、御腰を押し、五歩を一步と、心ばかりは、はやれども、いたはしや、御足裏より血流れ、て歩み煩ひ玉ひつゝ、分けては迷ふ笹原の露、羅穀の御袖、ほしもあへずはては、夢路をたどる心地して、すなはち、絶え入らせ玉ひけり。人々なすべき方もなく、手を束ねて、守り奉りけるに、はや御目もくれけるにや、人やある、人やある」と召されければ、皆聲々にぞ名のりける。やがて又、水や川のとぎるゝもなく、草の葉の露は、手に掬ばむよしもなし。折しも、あやしき法師の水瓶をもちて寺の方へ通りけるを、家弘乞ひ受けてまゐら

せけり。これにて御氣色わづかに見なほしければ、御供せしものども、官軍定めて追ひ來り候はむ、いかにも急がせ玉へと申せば、武士どもは皆何地へも落ち行くべし。朕は如何にも叶はねば、甲斐なし。先づ此に休むべし。若し兵士追ひ來らば、手を合せて降を乞ひても、命ばかりは助かりなむと仰せられ、今は如何なる憂き目に遇ふとも、逃げぬべき心地もせざる御覺悟の態なりければ、判官爲義をはじめ、すでに命を鴻毛の輕さに比して、この身を參らせぬる上は、君に別れて、何方へか參り候ふべきもし、東國などへ御開き候は、飛鳥淨見原天皇の御先蹤もあり、いかで御運拙くてやはおはさむ。唯だ何處までも、御供仕り、たとひ飢えて死すども、御行末を見果て參らせむと申しければ、我もさこそは思ひしかど、天運かなはねば、是非もなし。世に汝等を誤りしことの痛ましき。されば疾く、退散して、命を助くべし。おのゝかくて侍らば、あまりの物々しきに、忽ち覺られて、命をも敵に奪はれなむと、再三再四、強めて仰せあ

りければ、今は力なし、この上は、却つて、恐れありとて、君臣別離の悲しきに、鬼神を取りひしぐ諸將も、皆鎧の袖をぬらし、が、かくて、叶ふべきに非ざれば、爲義忠正、以下、皆ちり／＼に成りにけり、家弘、光弘、ひとり留りて、御介抱、怠らず、谷の方へ引き下し參らせしが、かくれ住むべき洞もなければ、御上には、柴など折りかけて、いづくへか遠く具し奉らばやと、さながら千秋の想して、日の暮るゝをば待ちたりける、やがて、御出家ありたきよしの仰なりけれども、この山中にては、導師もなくて、叶ひ難しと申し上ぐれば、唯だ御涙に咽ばせ玉ふ、やう／＼、其日も暮れければ、今は心安しとて、家弘、父子して、肩に引きかけ參らせて、法勝寺の北を過ぎ、東光寺の邊にて、年、ごろ深く相知りたる處に行きて、輿を借りて、乗せ奉りいづくへ仕るべきと申しければ、阿波局の許へと仰せあり、家弘、習はぬ業ながら、輿を昇きて、二條を西へ、大宮まで入れ奉りつれども、後難を憚りてや、門戸を堅く鎖ちて音もせず、さらば、左京太夫が許へと仰せられ

大宮をくだりて、三條坊門まで昇き奉れば、教長卿は、この曉、白河殿の煙の中より迷ひ出で玉ひて後は、その行方をも知らざりければ、残り留まる者ども、皆逃げ失せて、人もなし、さらば、少輔内侍が許へとて、入れ參らせけれども、それも昨日今日の世間なれば、諸事にむづかしくやありけむ、門ほど／＼と敲けども、人あるさまながら、音もせず、いたまじきかな、萬乗の天子、世界ひろしと雖も、立ち入らせ玉ふ處もなく、いづれか王土ならぬ、五畿七道も道狭くて、御身を寄すべき蔭もなく、東西南北、ふさがりて、御幸なるべき方もなし、光弘等も、夜もすがら、御輿を仕り、肩の骨もめり込むばかり、足たゆみ、身疲れて、今は一步も進み得ず、明けなば、捕へられて、如何なる憂き目にか遇はむと、世に心細くは思へども、今朝は山中にて水きこし召し、ばかり、朝餉だに參らざりければ、兎角して、知足院の方へ御幸し奉り、あやしげなる僧房に入れ參らせて、かたばかりなる、おも湯などを差め奉りける、上皇、これにて、御髪をおろさせ玉

ひければ、光弘も、髻きりてけり。こゝに居ますも、惡しかりなむ。いくへか渡御あるべきと申せば、仁和寺へこそ行かめ、それもよも入れられじ。たゞ押へて輿をかき入れよとありしかば、御室へぞ具し奉る。門主覺性法親王は、故院の御佛事にて、鳥羽院へ御出ありけり。家弘は、これより御暇を申して、北山の方へ参りしが、途にて、修行者に遇ひしかば、之を語らひ、戒保ちなどして、出家のかたちにぞなりにける。かくて、新院は、侍御の人もなく、たゞ一人さびしげにおはしけるが、法親王かへられし後、ひたすらに頼み入らせ玉ひしかども、門跡には、置き申されずとて、定遍法務が房へぞ入り参らせられける。御室は、五の宮にて渡らせ玉へば、主上にも、新院にも、均しく御弟にておはしけり。やがて、この由、内裏へ申されければ、遠くにも去なでおはしけり。天下これより無事ならむとて、佐渡式部大輔源重成を参らせて、院を守護し奉られけり。修羅の巻を目にも見て、山路一日の御疲、針の山にもものぼりし心地して、けに一人の妄念は

萬人の禍なりけりと、はやくも悟られければ、今は御心とゞまることもあるまじけれども、餘の御心うさにや、ある時、かくぞ思しめしつゞける。

おもひきや、身を浮雲になしはて、嵐の風に、まかすべしとは。

憂きことの、まどろむ程は、忘られて、覺むれば、夢の、心地こそすれ。

御室におすこと十日ばかり、同じく二十二日といふに、藏人左少辨資長、綸言を承りて、仁和寺に参り、明日、讃岐の國に遷し奉るべきよしを奏問す。院もいつかは、都を出でさせ玉ふべきよしをば、内々は聞こし召し、御覺悟もありけれども、さすがに、今日明日とは御思召さざるところに、まさしく勅使参りて、事はや定まりしかば、今さらに、驚かされて、御心細くも、おぼしける餘には、

都には、今宵ばかりぞ、すみの江の、きしみちありぬ、いかでつみ見し。

御子重仁親王も、十五日に中御門東洞院に入らせ玉ひけるが、院は、我が

居る中に何やうにもなし奉れと仰せければ、かねて御出家あるべき素願にまかして、花藏院僧正、請取り奉り、やがて頭あるさせ玉ふ。あはれ、才徳世に儔なく、とし頃、東宮に立ち、九五の御位にも即かせ玉はむと、萬民心を屬せしに、御年わづかに十六にして、思の外に、菩提の道に入り玉ふは、有り難くも、又いたましくこそ覺えしか。あくれば、七月二十三日、まだ夜深きに、仁和寺をぞ出で玉ふ。曉の風、さびしくも、秋の心を吹いて、珠樹に滴る露は、涙かと怪しまる。式部大輔重成の郎等ども、御車をさし寄せ、先づ女房たち三人を乗せ、その後、新院召されければ、女房たち、聲を放つて、泣き悲む。まことに、日ごろの御幸には、玉輦をかざり、龍は寶蓋を銜み、鳳は流蘇を吐き、衣冠とのへし、月卿雲客、庭上におりたち、御隨身左右に列り、官人番長など、鶴鷺前後に従ひて、警驛の聲、おどそかに、しづしづとねり行きしに、引き替へて、これは、あやしげなる男、或は物々しく、甲冑をよろひたる兵士に護せられて、罪ある囚人に異ならねば、目もく

れ心も惑ひて、かく泣き悲むも、理せめたり。夜もほのく、と明け離るれば、横雲の空に動く九重の城闕、これも今を限りと幾度かかへり見せられ、やがて、鳥羽院を過ぎさせ玉ふとて、重成を召して、田中殿へ参りて、故院の御墓所を拜み、いかで、御暇をも申さむとおもふは如何にと仰せ下さる。重成かしてまりて、やすき御事に候へども、宣示の刻限、移り候ひなば、後勘如何と恐れ入つて申しければ、まことに、汝が痛み申すも理なり。さらば、安樂壽院の方へ御車を向けて懸け外すべしと仰せあり。すなはち、牛をはづし、西の方へおし向け、れば、残おしげにおぼしけむ、御涙に咽ばせ玉ふ。御よそほひのみ、聞こゆるも、いたはしく、これを承る警固の武士ども、いづれも、鎧の袖をぬらしける。しばらくありて、鳥羽の南門へ遣り出せば、國司季頼朝臣、御船ならびに武士兩三人を設けて、草津にて御船に乗せ奉る。重成も、讃岐まで、御供仕るべかりしを、かたく辭み申し、て、まかりかへれば、汝が此程の情こそ、世に忘れ難くおぼゆるに、今より

罷り去なば、いよ／＼心細くこそ。光弘法師、なほ在らば、事の由を申して追つて讃岐に参るべきよし傳へよと御説ありけるこそ、かたじけなけれ。御船に召されし後、御屋形の戸には、外よりかたく鎖をさしてけり。院は、其中に端坐して、龍鳳の姿、天日の表、さながら、愁の雲を帯びて見え玉ふ。人臣だにも、位あるものは、かくはせまじとおもへば、見奉るものは申すに及ばず、あやしの賤の女、猛き武士までも、傳へ聞きて、御いたましき事の限なりとて、袖しぼらぬはなかりける。されば、道すがらも、はか／＼しくは、御膳さへまゐらず、打解けて、御寝もならず、ひねもす、夜もすがら御歎に沈み玉へば、御命たもたせ玉ふべしとも覺えず、月日の光も、御覽せず、たゞ烈しき風、暴き波の音ばかり、御耳の底に残りつ。武庫の浦より以往は、長汀曲浦の旅の路、こゝは、須磨の關と申せば、かの行平の中納言配流せられて、藻鹽たれつゝ、わぶとこたへよと詠じ、あるは、源氏の君が流浪の昔、波たゞこゝもとに立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、夜

ごと、枕浮くばかりなりし處にこそと覺しめす。かしこは、淡路の國ときこしめせば、大炊の帝、遷されて、憂き思にえ堪へず、いく程もなく、失せ玉ひし後、早良の廢太子、つきぬ恨をとゞめ、舜が旅死せし蒼梧の野、九嶷の山の重なりて、重腫の孤墳、何處ぞといひしも、かくやむかしは、よそに聞こし召し、かども、今は我が身の上に在りとおぼしけるこそ、哀れなれいそがぬ日數つものにも、天さがる鄙の長路のはてもなく、玉敷の都の空の、いよ／＼遠ざり行くほども知られて、一の宮の御行方も、如何あらむと、覺束なく、又合戦の日、わが爲に命を捨てし兵士の上はいはず、如意山に別れしものども、末は如何になりけむ、女房達は、何處に在りやなど、君臣父子の縁うすく、死離生別の悲、あさ／＼止め難し。傳へ聞く、異國のためし、榮は南巢に放たれ、昌邑王賀は故國に逐はれ、獻帝は山陽王にあらされ、玄宗皇帝は蜀山萬重の遠きに幸す。我が朝の古しへ、安康天皇は、藥子に殺され、崇峻天皇は、逆臣に犯され、大友は山前に縊れ玉ひ、陽成院は

老臣に廢せらる。古人皇子有馬皇子など、實位にも上るべかりし身の、讒に遇うては、いづれも終を善くせず。凡そ徳あるも、徳なきも、夙世の因縁拙ければ、宿業遂に逃るべからず。一たび悟る法の道、心しづかに濁世を厭離し、やがて、煩惱の雲を拂うて、真如の月を望むとき、俗念消えて淨因來る、刹利も須陀も、かはるべからずと、佛の御教、今更ながら、世に有り難くも感せられて、わづかに御心しづむるよすがとはなれりける。明石の港より、舟路幸に恙もなく、やがて、八月十日といふに、讃岐國に着き玉ひしかども、國司未だ御所を造り出さざれば、當國の在廳散位高季といふもの、造りたる一字の堂の松山といふところに在るにぞ入れまゐらせける。

さる程に、新院、松山に御座ありけるが、國司すでに直島といふに御所を造り出されければ、それに遷らせておはします。四方の牆など、いかめ

しく結ひ、たゞ口一つあけて、日に三たびの御物すゝむより外には、參り仕ふるものもなく、さらでだに、習はぬ御住居の心細く悲しきに、折しも秋も漸く闌け行くまゝに、巖根の松を拂ふ嵐の音、草むらにすたく虫の聲も心細く、さびしさまる浦わの景色、空も一つに、海くらし夜の漁火消えはて、天さぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けば、故里に言傳せまほしく、ほのかに月の影白く、曉の千鳥の洲崎にさわぐも、御心くだく種となる。わが身一つの嘆よりも、わづかにつき奉りる女房たちの伏し沈むに、いよゝゝ御心くるしかりけり。後には、在廳一の廳官野大夫高遠が堂に入らせ玉ひけるを、やがて又、鼓が岡に御所を立て、居え奉る。朝倉の木の丸殿もかくや、土階三等、茅茨さらず、前にも増して、淺ましき御住家なりける。つもる御歎の餘にや、御惱の事ありければ、關白殿によき様に申し聞こえよとありけれども、御披露なかりけるにや、なほ其儘になし置きける。新院つくゝと、おもひ玉へるやう、朕はるかに神裔を承

けて、至尊の位を踐み、太上天皇の尊號を蒙つて、玉樓金闕に居を占めつ
もごより、先院御在世の間なりしかば、萬機の政心に任かせずといふと
雖も、久しく、仙洞の樂に誇れりき。されば、或は花を金谷に遊び、或は月を
南樓に賞し、すでに三十八年を経たり。すぎにし榮華をちもへば、見はて
ぬ春の一夜の夢、黃梁を炊くほどもなし。如何なる前世の宿業にか、かゝ
る歎に沈むらむ。たとひ馬に角を生じ、鳥の頭白くなるも、歸路の期は知
られず。定めて、萬里望郷の鬼とぞならむ。すらむと、ひとへに後世の御爲
にとて、華嚴經、大集經、大品般若經、法華經、涅槃經、五部の大乗經を、三
年が程に御自筆にあそばしけるが、貝鐘の音も聞こえぬ荒磯に、ごいめ
置かむも、甲斐なければ、八幡山か、高野山か、もし御許あらば、せめて筆の
跡ばかりも、都に入れて、鳥羽の安樂壽院の御墓に置き奉りたきよし、平
治元年春の頃、仁和寺の御室の許へ申させ玉ひけり。その御書に云ふ、む
かしは北關の窓に凭りて遊宴の心をやすめ、今は西海の波に碎かれて

浮沈の聲を放ち、濃嵐松を拂へば、謫居に早く秋を感じ、いかで再び舊土
に還つて、自ら玉聖の氣を成さむ。月、西山に傾けば、都城仙宮の曉の詠を
思ひ出で、日、東嶺に出づれば、龍樓竹園の樂しき興を忘れず。早く萬里邊
僻の悲涙をたゝめて、必ず三佛菩提の妙位に昇らむと、あそばして、その
奥には、一首の御製あり。

濱千鳥あとは都に通へども身は松山の音をのみぞ啼く。

御室より、この御書を以て、關白殿に仰せられ、關白殿、又内へ申されけれ
ば、少納言入道信西を召して、仰せ含めらる。信西、さる事、いかで叶ふべき
もし、咒咀の御心にやと、大に諫め申しければ、主上つひに御許もなくし
て、かの御經を返し遣はさる。御室よりは、御とがめ重くおはします故に
手跡なりとも、都近くは置かれ難きよし、承り候間、力も及ばずと御返事
ありければ、新院この由を聞こし召して、朕、位に在りし間、堯舜の仁なし
といへども、桀紂の行には倣はず。まして、朕、建成の心狭きには似ず、雅仁

いかで太宗の徳あらむや。そも保元の播亂は、朕が人慾の私に起りて、父にておはす故院の崩れさせ玉ひしをも悼まず、時を得がほに鎌を研がせ、劍を磨かせ、そぞろに位を争ひしは、こよなき不孝にして、天神地祇にも見はなされ、かゝる島根にさすらふも自ら作せる禍といはいへ、我が朝に限らず、天竺震旦新羅高麗にも、兄弟國を論じ、叔姪位を争うて合戦せし例は珍しからず。其身の果報によりては、兄も負け、姪も勝つ。されど、一たび手を合はせ、膝を折りて降人になりぬれば、からき罪に行はることやはある。それを、朕、罪ふかきことかなとおもふにより、今生の事もひ棄て、後生菩提の爲にとて、この經を書き奉りしなり。懺悔は、諸惡の終にて、いかなる惡人も、赦されぬことやはある。されば、如何に支ふるものありとも、親しきを讓るべき則にも違ひて、筆の跡だに都に留め置かざる程なれば、力なし。さゝやかなる此願だに容れられなば、われ豈に執念くも祟らむや、わが弟の子孫、末長く榮へよとこそは、祈るらめ。さる

を、人の善事を妨ぐる汝こそ、提婆にも劣らぬ惡魔なれ。木の葉沈みて石流るゝ、澆季の世に、汝ぞ實に朕が仇なる。今生の怨のみに非ず、後生までの敵なる上は、この經を魔道に回向し、汝の子孫後あらせじとおもふ。見よや杞梁の妻、一たび哭して、城たちまちに崩れ、東海の孝婦、誣殺せられ、天下三年の早あり。わが朝にては、將軍田道蛇となり、北野天神、雷となる。冤枉の氣の天地を動かし、鬼神を感ずる、その祟やがて、此の如し。同胞の兄に、さばかりつらかりし汝が行末こそ憐れなれと仰せられし後は、夜な／＼志度の濱邊にし、のび出で玉ひ、松一つ古りにし波打際の巖の上に結跏趺坐し、さゝやかなる御机に御經を載せて御前に置き、みづから指を噛みやぶりて、御經の軸の本ごとに、誓狀をぞあそばしける。書き寫し奉るところの五部の大乘經を以て、三惡道に抛げ籠め畢んぬ。願はくは、この大功德の力に依つて、日本國の大魔王となりて、あくまで天下を亂り、國家を惱まさむ。大乘甚深の回向、何の願か成就せざらむ。諸佛證知

證誠し玉へ、顯仁敬んで白すと誓はせられ、やがて、おそろしき御聲ともにかの御經を千尋の海の底に投げ沈め玉ふ。折しも、風さへと吹き下ろして、萬松鬘を鼓し、忽ち逆まく浪のまに、潮水激して、立ち上り、鯨鯢の噴くにさも似て、世に龍卷といふもかくや、八大龍王もおそれ畏みて、御命に従ふかぞ見えたる。あさましや、龍顔蒼くして、すこしも血の色を留めず、いたゞき玉ひし長頭巾は、頭の後に傾き、久しく剃らせ玉はざる御髪長く伸びけるが、御胸にふり亂れ、御髭など、秋の草の風になびくに異ならず。めし換ふることもなかりけるにや、柿の御衣のすゝびて垢つきたるに、御袖浦風に吹き翻されたる間より、白き御手の骨のみ高くあらはれて、御指の爪、あやしくも先端は鈎の如く曲りて見えにけり。龍體には、黒氣まどうて、電光ひらめきわたり、雲間には、あやしの御姿、隠々として、拜まれければ、今は生きながら、天狗の姿に顯はれ玉ふかぞ見えにける。この由、都にも傳へて、平判官康頼を御使に下されて、御有様

を見せしめられ、又、小河侍従入道蓮如といふもの、一たび、彼地に下りて見参らせけるにより、僞ならずと聞こえしものから、取り繕ふこともなく、なほ打棄ちてぞ置かれける。かくて、新院は、三たびの御膳も、ろく／＼はまゐらせられず、日ごと悪念にしづみて、ひたすらに、世の騒亂を願はれけるが、その故にや、同じ平治元年十二月といふに、左馬頭義朝、藤原信頼にかたらはれて、大内にこもり、三條殿をも焼き拂ひ、後白河院を押しこめ奉り、信西入道の一類を滅し、自ら死を期して、土に埋みし信西の屍をさへ掘り起して、首を大路に梟しけり。然れども、信頼も、忽ち亡び、義朝は平家に敗られて、東に走り、やがて、尾張の國にて、その家人長田莊司忠致に撃たれ、あぐれば、應保元年、美福門院、かくれさせ玉ひしが、世のいづれも、新院生きながらの御祟とぞ申しける。かくて、讃岐におはすこと九年ばかり、長寛二年の秋八月廿四日といふに、御歳四十六にて、志度といふところにて、遂に崩れさせ玉ひしかば、白峰といふ山寺に送りて、焼

き上げ奉りけるが、折から北風はげしく吹きけれども、つね／＼都を戀ひ悲しまれし御心の名残にや、茶毘の煙のみは、なほも都の方へ靡きけるぞ。されど、御祟は、なほ止まず。やがて、平家の世となりぬれば、治承三年、太政入道、暴威を逞うして、法皇を鳥羽殿に押しこめ奉り、後二年、清盛熱を病んで死し、次いで、源氏白旗を押し立て、起りけるが、これも久しからず。その昔、新院に弓矢を向けし武臣の末々、終を全くしけるは無かりけるぞや。人は最後の一念によりて、九界の間、善惡ともに後の世までの生を引くといひけむ、ましてや、十善の天子、現人神あらびとがみの、この世を憂しとおぼしけむ、御憤の程こそ、山を崩し、海を枯らすべく覺えて、おそろしくも、又悲しきことの限りなりけれ。

落梅引

愁の谷の底深く、涙の泉涌き出づる、あはれ浮世よ、痛痒元より相關せずといふなかれ。凡そ他人の失意不幸に同情を寄するは、四海同胞の義を思ふ心からといふものから、やがて自らに在るに甲斐なき身の境涯を傷む折にこそ、いよ／＼切なるものはあるなれ。

つながる血統の末といふには、あらねど、同郷の好よしみいとも深き或る家に於て、吾は薄命なる、はしき少女の一人ありしを記憶せり。彼女は元と良家の子なりき。三四歳の時なりけむ、今まで美官の高きに居て、世に時めきし其父は、一朝にして館舎を捐てつ。憐むべし、食前方丈、従者數百ともいふべかりし富貴の賑は、春の一夜の夢と消えて、彼女の生涯は、蕭寂缺亡の境に其端を發すること、はなれりき。花としいへば、草も木も隔てなく、惠の雫に浴せしむるが、やさしき春

雨の情なり。母が子に對する慈愛も、之と相似て、必ず一樣なるべきを、彼女は上に二兄一姉を戴きし末の子とはいふものから、さばかり重く視られざりしが如し。げに彼女は其姉なる人が天成の麗質、蒼の中の花の顔、人の心動かし、に比ぶべくもあらざりしが、慈愛の厚薄を起し、原因、もし此に外ならずとすれば、其母こそは世に淺ましきものなれ。見よや、毛色の相似ざるを見て、其子につれなきは、犬猫にして、はじめて之あるのみ。かくて彼女は日陰の花、その福分、生れながらにして厚からざりしは、争ふべからざる事實なり。

世には、薄志弱行の徒の跡を絶えず。彼女の長兄は、遊蜂戲蝶、唯だのどけき春を追ふを知りて、一も爲すよしなき痴者としもなりはてつ。百金揮ひ盡して土の如く、世に如何はしき女の一笑を買ふことのみは能くしけれど、晴衣一枚、可憐なる妹が心からの喜を求めむとはせざりき。かくて、又幾程もなく、肺を病んで、臥床殆んど三年、わづかに身體の健康を

恢復したりしも、やがて亡父が心づくしの遺産を蕩盡したりき。この間まめく、しき彼女の看護、名醫の藥餌以外に、少からぬ効果ありしは、言はずもがな。

長兄の病癒ゆるや、身を屈して一小屬吏となり、やがて婦を迎へて、兎も角も一家の活計を立て行くこと、はなりぬ。一人の兄は、すでに他家に養はれ、姉も早や婚を畢りけるが、年幼き程の彼女は、猶ほ家に留まれりき。こは、すでに親の家に非ずして、兄の家なり。ましてや、今までは尋常行路の知らざりし他人をさへ加へしなれば、柔順溫和の彼女を以てするも、菅の根の長き日ごと、口を開いて笑ひつゝ、暮すことは、いとも難く世に鬼千疋と綽名せらるゝ小姑の位地は、ゆくりなくも、彼女をして一しほ窮屈なる境涯に在らしめき。

二八の妙齡に達せし折の彼女は、げに天晴の好少婦人なりき。世界の女ども、才と色といづれか缺けざるは無きに、彼女は兩つながら略ぼ之

を備へつゝ、あはれ、古しへ春待ち遠にてありし床かしの花よ、その色や櫻の艶なるに及ばざるものから、なほ梨の清げなるはあり。その節や、菊の霜に耐ゆるはあるか、梅の雪を嘲けるに似たるものさへありぬらしかくて幸にも龍に乗じて、ふさはしき快婿を迎へたらむには、良妻となり、賢母となり、さながらに一家神仙の眷屬、前途無限の幸福、期して待つを得べく、たとへば鬼々しき刺ある荆棘の底より出で、香ゆかしき董の床に臥す如くなりぬべかりしを。

婚嫁しきりに期を急いで、ごもし火星の如き祝の筵に、千代をこめたる盟の酒を酌み交はさむ日は來りつ。さしも嚴かなる儀式の眞中、瓶子の口の、さしたる故なくて、缺け落ちたる、その折、心留むる人は無かりしも、やがて行く末の凶兆と知られしぞ悲しき。

新郎の如何なる人なりしかは知らねど、前途多望の男なりといひ、本をたゞせば彼女が亡父の厚情に預りしものといへば、少くとも、世の常

の花嫁が必ず爲さむず氣苦勞だけは免れつべしと、人ごとにおもひ合へりしが、傷ましいかな、そは空しき一の望に過ぎざりしなり。

その初は、眞逆と思はれしが、あくまで浮世の波に漂ひし姑女の、醜つて、おのが殘年を心ゆくばかりにせむとてや、我儘氣隨は、慥に人並外づれし程なりければ、うら若き身のよろづに爛はざるを嘲り笑ひつ。他の過失をのみ興がり、大仰に言ひ立て、人わるくあたり觸れまわる口先には、到底堪ふべきやうも無かりけるとぞ。あゝ孔雀東南に飛ぶ、萬古の恨、綿々として、今も、さながら昔にかはらざりけり。

あらゆる事に責を引いて、おのが才の足らざるを啣ちわびつゝ、母兄の耳にすら、訴へがましき一言をだに聞こえざりし彼女の心は、如何に健氣にも殊勝なりしよ。

さばれ、女性の可憐なるや、その胸は狭きなり、その心は淺きなり。いかにするも收め難く包むに餘ることのありしと覺ほしく、鬱々として樂

まざる氣色、折々にほの見ゆることありしが、精神の苦痛は、必然の結果やがて身體の變化を促がし、婚後わづかに十月、銷金帳裡、世にもたのしき鸞衾鳳枕の夢、ろく／＼に見はてず、かつて父兄が惱みし遺傳性とおもはるゝ肺疾に罹り、玉を欺く豊肌いつしか瘦せて、夕月寒き枯柳も、かくやとおもふばかり。

ひと先づとて、家に還り、藥石を嘗むること一年。かゝる間、嫂に對する氣兼の程は、今さら言はず。世に厄介者と言ひ囃されむを心苦しくや、さしもの病を忍んで、家事の爲には骨を惜まず、かひ／＼しく立ち働きて不治の症、いつしか深く膏肓に入りしを知らざりき。世に無情なる姑女は、之を奇貨として、新に豊かなる家より婦を迎へむが爲に、親たるの權威を以て其子に臨み、手をかへ、品をかへ、勸誘百方、つひに其意を翻さしめ、あはや、青天の霹靂、こと／＼しく離婚を申し入れつ。秋の空と均しなみに見らるゝ男心は、今更ながら、あはれ、赤繩すでに断えはてぬ。

さなきだに神經の、すぐれて鋭敏となり居たる彼女は、早くも、それと悟りけるにや、病勢俄に募り、枕重くなりて、身を動かすすべだに無きもの、如く、口にこそ言はね、絶望の極、玉の緒の絶えなば、絶えよと、夜臺の滋味を求めやしけむ。絶え入るばかりの咳聲に促がされて、目ごろに吐きし紅血、限なき心づかひの名残と見えて、沸きかへる一腔をして空とならしめざる限りは、とても止まじとまで思はれし傷ましき。

落花流水、悠然として遠く、江湖四月、春すでに過ぎつ。木々の梢は青葉になりて、老を啼く鶯の聲も懶き夕まぐれ、無常を告ぐる鐘の音、いとも淋しく、雨を含める漠漠の愁雲、たちまち屋を蔽ふと見しは、やがて彼女が最後の息を引ける時なりき。

人は玉よりも美にして、命は葉よりも薄し。香魂一片、いま果して大羅天上に在りや否や。さなきだに蟬蛸の人生、少女が悲哀の跡は、年々の青を抽く一堆の草に朽ちし塔婆の残れるのみ。薄れさまよふ入日影、鴉の

聲のまがくしきに、誰か來りて墓門の煙を掃はむ。黄壤邊なしといふ
ものから、この恨つひに載すに足らざりけり。あな哀れ。

憶舊の賦

邂逅

花にたはるゝたをやめは
都大路に多けれど
月にうかるゝ少女子は
鄙びなの片戸かたどに澤さわなれど

わが世の春の朝ぼらけ
おもひあふるゝ心根を
さへげむ人のあらざれば
ひとり影をば描えがきつゝ

悪魔はあらび龍いかる
愁の淵に臨みては
愛の天使の聲ならで
たれか闇世をさますべき

生けるも同じ人の世に
いくその人か相知れる
縁の奇しき無かりせば
いかで一樹の蔭に見む
にほふは花か花よりも
すめるは月か月よりも
まだうら若き君が身の

罪と穢に染まざれば

迷ふ心の夢うつゝ
われに寄り添ふ俤は
げにもやさしき小羊の
情をふくむそのまみよ

蝶は蝶とし群れて飛び
鳥は鳥としならび棲む
あゝ寂寥は生ける身に
力を添へむよしもなし

あはれみ玉へ塵の子の

世に伴つれもなき此身なり
一たび君を見てしより
希望のぞみを得たる我が身なり

盟約

あはれやさしき汝が心
あはれゆかしき汝がおもひ
世にうらぶれし我が身には
汝みれのみ人とおもふかな

富貴とみと驕奢おごりにこそはれし
世の盛衰は問はずあれ
知らずやひとり平和やほらの

はにふの小屋に花咲くを

夢もたのしき青春の
血ちしほも燃ゆる心地して
喘あへぎの後よほゝゑみの
甲斐ある身とは今ぞ知る

水さかしまに流るるも
朝日西より出づるも
世の轉變をよそにして
ふたり心はかはらじな

これのみ神に許されて

おもかげ残る天の園

戀は靈なり誠なり

愛は熱なり力なり

をはりの勝利を理想にて

けふ戦につかるとも

偽ならぬ慰藉の

汝が同情に我活きむ

うしほに暗きわたの原

照らすは星の光にて

わたるにつらき世の波に

たすけを得たる我が身なり

昨日の淵は今日の瀬か

わづらひ多き社會に

たとひ頭の霜添ふも

ふたり心は老はずあらなむ

逍遙

そらも酔へりや薄がすみ

風もにほふや花ざかり

管絃聲の聞こゆるは

誰が歡樂の筵かや

世は今春よ菅の根の

ながき日まことたのしくば
花咲くかげに手を執りて
今日の一日を歌はむか

君知るらむか此心

一たび凝れば石のごと

羅綺いたづらに飾れども

うまし少女も見ざりけり

もゆる血しほに頬を染め

やさし聲音にさゝやけば

花も色なくおもふかな

鳥も歌なくおもふかな

移りやすきは花の色

ながめする間を待たなくに

榮華の夢の跡もなく

世のはかなさも知られけり

見よ樓門の夕まぐれ

鐘入相を告ぐるとき

愁ふる空の風さむく

しづ心なく散る花を

あゝ花ちれば星落ちむ

いたましいかな世の終

あらゆる星の轅ついでなす
北斗ぞ常に美うつくしき

げにや眞理まことをささるごご
世の状態ありさまにくらべても
反省かへりみすれば意義いぎある
二人が中の恩情おんじやうかな

情 緒

君よろこびの頬の邊へに
ほのかに染めし色見れば
園生そのへに咲ける花薔薇さくらび
われ香に酔へるおもひあり

君がいかりのまなじりに
世を甲斐なしと眺むれば
月日も消ゆる心地して
われ夜に惑まよふおもひあり

君かなしみの黒髪に
かざしの花のしほるれば
夕ゆふべしぐるゝ深山路ふかやまぢに
われ行き悩むおもひあり

君たのしみの聲清く
たへなる歌を誦ずするとき

千代を壽く菊の酒
われあくがる、おもひあり

君、愛を知る目の光
くしく涼しくか、やけば
希望をさそふ朝の日や
われにうれしきおもひあり

君がにくみの唇に
ありし笑の消えむとき
神の御前に罪の身の
われおそろしきおもひあり

君、物もとむ眞玉手を
心ありげに延べむとき
珠だにさぐる志度の海士
われ身を捨てむおもひなり
われ戀すてふ君なれば
七の情とりくくに
美しきかな花よりも
清らけきかな月よりも

別離

いづれも同じ人の世の
老を若さに嘆かむは

あつき涙に、この命
もろく消えむの恐れあり

おもひは如何に朧夜の
花咲きにほふ欄干に
黒髪長き汝を見て
しばし愁を忘れつゝ

酌めども盡さぬ酒甕の
泡咲く春に歌ひしは
夢に酔ひぬる夜半にして
汝もろともに幸ありき

四つの袂の色褪せて
はかなき悟、今ぞ知る
快樂を咀ふ魔の多き
浮世の戀は涙なり

今、高樓の夕まぐれ
遠き別のかなしさに
酒よ、むかしの味もなく
沈める澱も、いと苦し

泣いて別れて末長く
くるしき情しのばむは
我が世常なき人の子の

薄き命に堪ふべしや

百九十

さらば歌へよ、聲あげて

我等の幸を祈りつゝ、

「神の心に許されし

不變の戀は力なり」

又の逢瀬を契りつゝ、

ながるゝ涙拭ふ間に

もゆるか、しばし唇を

汝が頬の邊に觸れしめよ

驚 艶

（西廂記の第一齣）

夫人、鶯鶯、紅娘、歡郎を引つれて登場——わが里方は鄭氏なれども、嫁ぎし夫の姓は崔、大君のしろしめす目出たき御世に、一の人ごまでなられしが、はかなきは浮世の常病の爲に、ゆくりなくも、今は亡き數に入りし名のみを留めて、恩愛の忘れ形見は、たつた一人の此娘、年は十九の花盛、縫針のわざ、読み書き算盤、先は一通り、月花に哀を寄する歌の道、學べば出來ぬこともなく、親の自慢も何の慾目、亡き殿御在世の砌、鄭尙書の長子、吾には甥なる鄭恒といふに、妻はすべき約束堅く結びしが、こたび不幸の忌がかり、三三九度の盃は未だにさせず。これなる婢女は、幼き折より吾が娘に付け置きし腰元、その名をば紅娘といひ、まつた一人、これなる小倅、歡郎と呼びけるが、亡き殿の御目鏡にて今は養子の身分、粗略には夢にもせず。さても其後、わが脊の君亡せ玉

百九十一

ひければ、娘ども引き具して、柩を護り、兎も角もして博陵の故里にたどり着き、かしこに安葬しまゐらせむとしつる折も折、物騒がしき世に路ふさがりて、くさ枕、旅も出来ず、こゝなる河中府までは、どうやら來られし儘に、柩をば普救寺といふに留むることなせしが、聞けば天冊金輪則天武后さま勅願ありて功德の爲に建てられし御寺とか今の住持の法本どのは、亡き殿の御世話なされし大和尚、これも何かの因縁づく、寺の西の片ほとり、構造異なる一構ありしを幸に、しばしが程は物靜かなる假住居、取敢へず、都の方へ便して、一刻も早くかの鄭恒を呼び寄せ、これを力と頼み草博陵まで連れて率て貰ふ筈、おもへば、味氣なき世の様や、我が脊の君の在はしつる頃は、食前方丈従者數百の賑々しさ、言も及ばぬ富貴のさまなりしが、今は身寄といふもの、ほんの三四人、旅の空のさびしきにつけても、老の身の戀しき昔おもひ出さず居られうか。

我が脊子が命を延べむよしもなく、跡に残りし親と子は都を出て、旅の空、ひつぎは御寺に假宿り、博陵と聞く故郷の路遠く、とても眺の及ばねは、紅血吐くや杜鵑おなじ恨は我が袖に、乾く間もなき血の涙。

くれゆく春のこの日頃、今日は一しほ氣鬱と覺ゆるに、前なる庭に人の居らぬ、コリヤ善い折、そこなる紅娘、姫と一處に佛さま拜みて、そこら一わたり散歩などして氣晴しするも身の藥サ、早く、

紅娘——仰の通にいたしませよう。

春や盡きなむ蒲郡の東門さしこめて奥深き御寺の中ながら、見れば、移りにけりな花の色、ながるゝ水の斷間なきにつけても、遣る瀬なきおもひの數々、暮るゝ侘しき景色やな。

夫人、鶯鶯、紅娘、歡郎、いづれも一度に退場、

百九十四

張生、琴童を引き連れて登場——それがし、姓は張、名は珙、字は君瑞、もと西洛の生れにて、父にておはせし人は、禮部尙書の高き位に登られしが、五十を越えて、間もなく亡せ玉ひ、次の年には母も續いて跡を追ひ、身は寄る邊なき孤兒の唯だ一人、未だに功名の志を遂げねば、四方に遊歴しつゝあるが、頃は今、貞元十七年二月上旬、都にて例の登庸試験行はるべしと聞きければ、是非とも一度受けて見ばやと、旅衣たつを遅しと、今しもこの河中府にはかゝりしなり。こゝに昔馴染の友達一人、姓は杜、名は確、字を君實といふもの、元は同郷同學の親しき間柄、いつぞやは兄弟の盟をさへ結びけるが、その後、文學を棄て、武藝を勵み、武術の試験も難なく濟まし、年たつまゝの立身目ざましく、今は征西大元帥といへる重職を授かり、十萬の大軍を引率して、このあた

り程遠からぬ蒲關とやらに鎮撫して在る由、善き序なれば、とてもこの哥哥を尋ね、それより都に往きたりて遅くはあらじ。むかし憶へば窓の螢火、雪あかり、苦學の功は我ながら驚くばかり、燦然たる文章、腹中にみちゝたれど、運の悪きは詮方なく、あちらこちら流浪ふ此身にかねての大望、成し遂げむは何日とも知られず、嘆かじと思ふもいかで、コレコソ——萬金寶劍、藏秋水、滿馬春愁、壓繡鞍。

學の道にたづさはり、國々遠く遊ぶ身は、脚に繫ぎし線もなく、さながら蓬の草を、風のまにまに吹き飛ばす眺め、やる空のあなた、日はなかくに近けれど、都の方は見え分かず、古しへの尊き書の卷々、紙魚の如くに首を埋めて、よそ目もふれず、試の場所に、いくたび過すればとて、鐵の硯も磨りこぼつまで、ゆめな撓みそ、わが心

百九十五

九萬里翔ける大鵬にくらぶべき身の、十年あまり、螢雪の苦物の數かは。さはさりながら才高ければ容れられず、時よ乖きて、丈夫の願も遂げず。似而非學問のみ幅の利く、うらめしの世や、いたましの身や。

はや此處は音に聞く黄河の岸邊、さすがに、すぐれし要害。

逆卷く波の早瀬、九たび曲れる中に、こゝぞ隨一、齊梁を帯びて秦晋の界をなし、やがて又幽燕の地に迫りつゝ、空にくだくる波の珠、天際近く立ちこめし秋の雲かと怪しまれ、竹を索につなぎし舟橋、龍浮ぶかと疑はる。いでや九州を横に貫く西東、百川の水を吸ひ入る南北、浮ぶ白帆の早いはおるか、さながらに弩箭弦を離れし様

の心地よや。九天落ち來る天の河、水上遠し雲の幾重、わだつみに注ぐ流はこゝ一すぢ、妙なる洛陽の花を滋ほし、梁園の木々培ふも宜こそ。舟を浮かして上らばよ、空に懸れる天つ日や、月の都に音づれむ。

「話しながら歩けば、案外早いもの、こゝは河中府の城中と見える。これは、又いかさま善さそうな旅籠、ヤイ琴童、手前は馬を繋がうぞ、奥よりかけ出る店小二、へい手前どもは、狀元の御方さまの御定宿、もし御泊とあらば、幸のこと、乾淨な座敷が明いて居ます、張生、しからは、其部室に決めて貰はう。サテ若い衆、何處ぞ、この近くに氣晴らしかた、見物すべき場所がなあらうか、店小二、商賣がら口輕に、さればで御ざります、この近くでは普救寺と申す大伽藍、むかし天冊金輪則天武后さまの勅願、功德の爲に建てられた丈に、その構造の見事なことは、言ふ

までもなく、南北より來て此處を通る人は、屹度一遍見物して置くほどのところ。もし御參詣になれば、一段の御慰みで御座りませう。張生「しからば琴童、荷物を取り片付け、乗つて來た馬の始末もして置けいそれで、此方は、これから、その普救寺とやらへ一寸參詣を致そうか。琴童、仰せ如何にも畏りました。これにて、みなく退場。」

法聰登場、拙僧は法聰と申してな、この普救寺の住持法本長老の弟子なるが、師父は今日去り難き法用の爲に、他出せられ、留守の役、仰せ付けられ、誰にても尋ねし人あらば、しつかり覺えて居て、歸らば知らせよとのこと。どれく、こゝな山門の下に立つて居て、誰が來るか。張番を致そうか。」

張生登場、曲徑通幽處、禪房花木深と吟じながら、最早や來たか」と獨語する氣色宜しく、法聰と相見る科。法聰「これは先生、どこからの御出張生、それがし、西洛から此處まで來しものなれど、こゝなる御寺の清幽

なるを聞き及び、一つには佛像を拜み、二つには住持の長老に御目にかゝらむため、わざく參つたもの、宜しく御案内頼み入る。法聰「これはく、まことに御生憎のことには、住持の不在、拙僧は弟子の法聰と申すもの、何は兎もあれ、方丈にて粗茶一服召上げられい。張生、イヤサ住持長老の御不在とあらば、それまでのこと、御茶など別に御構ひ下さるな。然らば和尚の御案内を願ひ、佛様を拜むことに致さうか。法聰「いかにも畏りました。張生、諸處を見めぐろし、成る程、結構な普請と見えるな。」

上方の佛殿より始めて、下方の僧院、庫裏の西のあたりより、法堂の北に出て、鐘樓の前面より、こゝは又長老の御寢間、登るや寶塔、繞るや廻廊、その間には、ならび玉へる羅漢など數へ、菩薩諸佛さへ拜みつ。

かしこの一構は何と申す處、ごてももの序に、參拜を致さうか法聰あは
たゞしく引きとめ、あすこだけは一寸御無用に致されいなせと申せ
ば、崔相國の御家族が假りの御住居、マ一止しになされい張生、鶯鶯紅
娘を見る科

わくらはに相見しと思ひきや、これぞ前世の戀敵。かつ
て面合はし、手弱女の數は、知らねど、かはかり美しき
は、いつかな。眼くらみて見え分かず、口物言へず、魂
飛んで空かけめぐるばかり。心憎くや、人の調戯るがま
ゝに、肩を打ちすほめ、花など撚りてほゝえみ顔。こゝ兜
率の宮か、離恨の天か、思ひきや、天つ乙女に遇はむとは
春風のなよやかなる花の顔、すねて見するも憎からざ
るを、若し喜べば如何ならむ。一寸ふり向きし横顔に、似

合はしきかな額の簪、畫ける眉は御殿風、新月の影、あざ
やかに、懸れる鬢こそ雲と見め。羞らふ氣色しほらしく
やがて桃花の唇、紅開き、玉稗の齒も白く露はれ、半時の
後、物いへば、谷の戸出で、花に啼く鶯の聲か、とばかり

鶯鶯、やよ紅娘、母様の御側に參ろうぞ

しづかに歩む後影、手弱女の舞はす細腰、たをやかに、風
情は似たり、夕風ゆらぐ柳の絲。

鶯鶯、紅娘を引いて退場。

花散りしきし細徑の、土いと柔かなるに、靴の跡、淺く残
れるは、移す歩の輕きが爲めよ。秋波にうつす目元に、情
送ると聞くものを、この足跡、いかで心を傳へざらむ。ま
してや、わざと時を経て、やうやく權門の邊近く、一步を

いざと運ぶ折見かはす顔あはれにもこの張解元を惱
 まし、それが心なき仕業にや。やがて神仙洞天にかへ
 れば、緑の柳けぶりつ、囀づるものは鳥の聲。梨咲きに
 ほふ門を鎖ち、白壁高く空つくばかり、いま一目見てし
 かなとは思へども、詮すべきを如何にせむ。この思晴ら
 す由なく、長しへに留め置かましものをと狂ひ出でけ
 り意馬心猿。蘭麝の薰、残れども、佩環の響はや遠く、風吹
 きわたる青柳、絲遊からむ桃の花、芙蓉の顔うつるか
 とひそかに覗く玉すだれ。こゝを河中の開封府相公の家
 とし見れば、かしこ南海の水月観音院なるに氣も付か
 ず。ねぢよりて見る籬の外、垂れ來る涎、すゝり入る幾た

びぞ。明日よりは、骨髓ほねみに透る戀の病に堪へぬらし。去り
 がてにせし折からに、情を含む秋波一轉。たとひ鐵石の
 人なりとも、いかで心惹かれ情おもひもつれでやあるべき。軒
 にかざせる花柳、今は眞晝の日の光、明かに見ゆ塔の影
 艶なるかなや春の色、たゞ如何にせむ、君の御姿かくる
 れば、えこそ堪へめや我がおもひ、尊き御寺いつしかに
 武陵の里とかはりはて、又相見むと願ふ心も仇なれや

(著者自ず、四廂記の全譯は、目下起稿中なれば、やがて上木すべし)

寒村行

二百四

(本篇は學弟談翠との共譯に係る)

ゴールドスマスの寒村行は、凡そ四百三十行より成る一大長篇にして、游子曲と併せて、彼が集中の雙璧と稱せらる。全篇の構想は、故園の追憶を主とし、當時勢力ありし大農論に反抗して、その胸臆を披瀝せしものなり。その謂ゆるオーパーンの何地たるに就いては、諸説紛々たれども、愛蘭キルケンニイの西部リツソイの村なりといふもの、蓋し眞なるが如し。作者生れて二歳、父に従つてバラスモリアより此村に移住し、幼時を此に送ければ、彼に對しては、さながら桑梓の地に異ならざりけむ。クラツア、ロビンソンの日記の一節には、

千八百二十一年四月十六日、予は、ウヰリアムと、もにハットフ井ールド、クロスに逍遙を試み、その教會をも參觀せり。この時、東道の主人たりし牧師ベンチットの談話によれば、ゴールドスマスはスプリングフ井ールドに寓して、農夫の間に伍し、午前は、家に在りて粥を啜り、専ら著作に耽りしが、身には濫褻をまといひ、打見たるところ、いかにも疎野にして、禮容に綽はざる奇人なりしと。而して、ベンチットが寒村行構想の起因ならむとて語りしは、ゴールドスマスが此處に在りける間、一紳士が幾多の小屋を取り拂ひし一條にして、その他、別に委細を知る能はず。

撰述の動機に就いては、或は此の如きものありしならむ。然れども、リツソイは彼が夢寐の間、忘るゝ能はざる地にして、彼が故園を欣慕せし情懷は、又散文にも發見せらる。ウヰイクフィールドの副師すでに然り。而して、最も明白たる表現は「世界の一市民よりの書翰集中なる左の一節を推すべし。

如何なる浮沈に遇ふとも、如何に勞苦すとも、如何なる處を放浪するとも、再び故國に歸りて、平和を得たしと望むは、吾も人も皆同じかるべし。生れし處にて死なむことは、誰しも、希ふところにして、この樂しき希望ありてこそ、目前の痛苦をも、しばしは忘らるゝなりけれ。

マコーレー卿は、寒村行を以て、英國村落の雅美と愛蘭慘澹の景致とを連結せるものにして、殆んど物事を成さずとまでに批難せしが、ゴールドスマスの如く、情に篤く、愛に深きものは、遠く幼時に溯つて、故園を追憶するとき、必ずや、その興味を擴充し、その缺點を補足し、公平なる眼には決して映ぜざるべき美を

井せて之に附加せしならむ。レイ、ハントは、その自傳に於て「幼時オーステン、フ
 ライアースに於て常に採りし如き覆盆子いちじくは、他處に求め難し」といひしが、年を
 經、處を隔て、回想すれば、少年時代の光景、愛慕措く能はずして、遂に此に至る
 は、吾人の親ら經驗するところなり。さばれ、それは幾多の聯想と想像とを以て、十
 分に飾られたる心頭の幻景にして、實際成年に及びて、再び其地を踏まば、現實
 は、それと全く異にして、その美の衰滅に驚かざるを得ず、又ひとり「兒童相見不
 相識、笑問客從何處來」の感のみに非ざるべきなり。かくして、その追懷は、更に愈
 る切なるものあるべきを疑はず。それ此の如く、レイ、ハントをして、覆盆子の美
 味を追慕せしめしと同一の感情は、ゴールドスマスをして、リッソイを荒蕪凋
 落の村落とせずして、遙かに感想を馳せて、むかしながら飲慕禁ずべからざる
 好個の田園としての美を寫さしめたるなり。又按ずるにゴールドスマスの此
 詩を作りしは、其死に先つこと三年、彼の年齒四十有三、すでに人生の大半を斷
 送し、遍れく浮世の辛酸を嘗め、困苦の状態を極め、人情冷熱、翻雲覆雨の常なき
 を知り、身は倫敦街頭、紅塵萬丈の裡に起臥し、眼前に生存競争の活劇を親睹し
 名走利奔の流俗を厭忌し、端坐して、胸中の苦悶を抑へて、往時を追懷するや、集

散命なく、離合料られず、榮枯盛枯の定めなき、人事果して夢か、幻か、觸緒萬端、遂
 に人間の真相を解するに由なく、むしろ、衣を拂つて、歸歎を歌ひ、故國の山水に
 起臥して、悠々自適、以て殘年を送らむといへる平生の期望、愈よ迫り來りしや
 必せり。而して、その故園なるリッソイの孤村を尋ねれば、滿目蕭條として、草笑
 ひ水謠ひし昔日の傍をとめず、土地は悉く大地主の所有となり、荒蕪に委せ
 し處多く、質朴なる住民は、相率ゐて、新世界に移住するの止むを得ざるに至り
 淳樸の俗、一たび消えて、奢侈忽ち風を成す。こゝに於て、舊時の故園を追慕し、昔
 日の住民を愛するの情、地主に抗し奢侈を惡むの念は、遂に漏らすに由なく、や
 がて、この一篇の黃絹幼婦となりて現るゝに至りしなり。世人或は篇中に訓誡
 の意を含み、又作者自身の經濟説のほの見ゆるを咎むるものあれども、詩歌の
 眞價値に於ては毫も關せず、予輩は、純潔なる同情及び至誠至切の念の全篇を
 一貫するを賞し、その筆致の流麗にして雅趣あるを稱せむのみ。わが此譯は、作
 者に忠ならむを欲し、むしろ、之を敷張して命意を明白にするを期せしを、以て
 篇幅甚だ長くなれりしが、亦た已むを得ざるに出でしものにして、讀者幸に深
 く尤むるなくむば可なり。

あはれ、ゆかしきオーパンの
野中の村を戀ひくれば

おもひ出多き我が身かな

ゆたけき畑に鋤をどる

賤の男の子も健に

さちある業をいそしみつ

とく音づる、春の日や

にほへる草のごこみどり

夏の花わも幸おほく

秋の哀れをよそに見て

浮世の善悪もおもほへず

心やすけき故里に

わがうら若き樂の

幾年月を送りけむ

ひろき緑の野に立ちて

さすらひたりし昨日はも

うれしき幸に我が胸の

あつき血しほや湧きにげむ

心酔はし、野の色に

魂のゆくへを迷はしつ

塵をへだてし隠れ家を

めぐりて煙る畑の面

流れてつきぬさ、川に

廻りもやまぬ水車

となりの村の丘の上に

すがたをかしき寺の塔

あなたに繁る山楂子の

みどりの蔭にやすらひて

老ひたる村の賤の男と

この世がたりに打ち過ぐし

あるは、やさしき我が妹と

さ、やさたりし時あるを

よろこび迎ふ祭日や

けふを一日の命にて

枝さしかはす樹のかげに

まどひの席ひらかれつ

小さき戯のゆきかひに

めぐりくはてはてもなく

老ひたる人の見まもりに

若きは、わざを争ひつ

めぐる地上の戯の

罪なきわざに興じつ、

競きこみの術すべをたへては
力ちからわざをば誇るかな

やがて百千ひゃくちの樂たのしみの
倦うまるゝまゝに新業しんわざの
おもひ疲つかれてこゝに又
へだてぬ友ともの争まじや

罪とがもなげなるほこりかを
どよみの中に二人して
かへすや紅絹べにぬいの舞まの袖そで
興きように疲つかるゝそれまでは

何時いつけがしけむ顔かほを
笑わらはるゝさへ知らぬ身みは

さゝやく人もあらばこそ
たのしき節ふしに友とものうた

何なににはちらふ少女子せうめいごの
眞白ましろき頬ほにあかねして
秋波あきなみを送おくるその瞳ひとみ
かへり見みすれば母人ははが
うら耻はづかしき目の光ひかり

おもへば戀こひし昔日むかしの
心醉こころはしゝ樂たのしみや

たのしく笑わらみし村里むらや

ゆかしき野邊のへの眺ながさへ
消きえて跡あとなき花はなの夢ゆめ
罪とがなき遊あそび、今いまいづこ

なが艶色えんしきは失うせはてゝ
あさましいかな暴虐しいたつの
罪とがの手てありし草くさの家いへに
むかしかへさむ術すべぞなき
のどけき野邊のへの薄うすみどり
するどき鋤ほの刃やにかへり
平和へいの笑わらも破やぶれけり

心清こころめし野ののさまや

つさぬ快樂けつらくにあくがれて
をさな心に我われはしも

その日のさまを待ちわびき

かつて集あめしなくさめの
くしき感化かんとしの力ちからはも

賤せんが伏屋ふしやをめぐりつゝ
やすけき里さとの人の子こが
心こころみいれし色いろなりき
されど失うせにし艶色えんしきの
風かぜのゆくへや今いまいづこ

水鶏の聲ぞあはれなる

鳥の叫びも一重にて

凄きこだまもたゆむべく

なれが昔の草の家は

雨に嵐にまかしつゝ

くづれはてたる壁の面は

長きかつらにうづもれぬ

まが罪おほき逆奪の

魔神の腕におのゝけば

なが子は、こゝを後にして

はるけき海にのがれけり

咲くらむ花の散りてまた

枝にとゞめむ由やある

時もありけり此國の

すぎし昔を誰か知る

あるじあまたに榮ありて

鋤く手はおもく幸多く

足るを知るてふ人々の

富をよそなる心には

月日長閑にめぐりけり

よはひを鶴の伴として

すみて流るゝいさゝ川

馴れては清き水かゝみ

すゞしく日かげ宿しゝを

今は小笹におほはれて

くゞる水さへ咽びつゝ

おどろに亂す醜草の

小路のあとも絶えてけり

今生ひしげる林には

夕さびしく五位鷲の

鳴く音もいとゞうごましく

古巢の跡をしたふらむ

あれてあとなき草むらに

あゝ幸うすき運命かや

人のなさけも荒鷲の

餌食に沈む村の景色

富みたるものはいや榮を

貧しきものは弱りゆく

王者の呼吸の其儘に

あで人あまた時を得て

民の生血をすひにけり

されど彼等の打ち誇る

榮華の快樂いつまでか

直なる民は國の花

されどいつしか紳商の
情を知らぬしひたげに
地を領めて若者の
所有さへすべて奪ひけり

あはれや野邊の草の家は
時ふるまゝに散り失せて
うつればかはる世のさまの
時を得顔に華きそふ
高殿あまた築かれき

今ぞこの世は末にして
なくもがなる財寶の

富貴の門にかざられて
みえをばきそふ苦の
愚なるやからに伴ひぬ

おもへば戀し、昨日はも
ゆたけき畑をことほぎて
樂しかりけむ平和も
あるは小さき村ざこに
安き生業願ひしも
または長閑けき村里の
住みやすかりし埴安も
見ゆるかざりは深みどり
野末いるどるかゞやきも

つよき羽風にやぶられて
森の下道おともなし

からむかつらを搔きわけて
路なき路を我ひこり
そこはかどなくさまよへば
かつては建ちし草の家の
山橙子生ひし垣や此處

胸にもつる、片絲の
みだれし端をより／＼に
こきてはかへすいにしへの
おもひに堪へぬ涙かな

魔の風今か吹き荒れて
しもどに堪へぬ里人の
のこり惜くも住みなれし
ふる里遠くあとに見て
心しづけきこ春を
海のあなたに追ひながら
たのしかりけむ、この村の
むかしのさまは消えはてき

おもへば昔、祝福の
親とし慕ふオーバンよ
ゆかしきさまは荒鷲の

われ故里を出でしより
 波風あらし世の中に
 こゝろの穢をとり惱み
 しぶき乾す間もあらなくに
 いく國々をさすらひて
 涙に堪へぬ此身かな
 誰を恨まむ我はしも
 神より受けし宿世なり
 せめては盡きむ我が息の
 夕の潮にかよひなば
 この世の願足りなむを

さはさりながら草の家に
 かざりなき身を横へて
 ひかり薄らぐ燈火の
 終も近きほむらをば
 雨の袂に吹く風の
 ゆらぎをしばし止めつゝ
 今はこの息を忍ばむは
 望なき身の望なり
 浮世のさまをよそにして
 心のまゝの高ぶりを
 賤が伏屋の圍爐裡火に

里の智慧なき賤の男の
 左に右に呼びつどひ
 わがたどり來し百の道
 あもひしことも見しことも
 心をさなき言の葉に
 語りつがむと思ひしに
 あはれ似たたか獵の場
 犬と笛とに逐はれつゝ
 住穴をさして走するなる
 野邊の兎か、われの身も
 苦き浮世にさすらひの
 長き旅路をめぐりきて

又たちかへる故里の
 野中の露に安らけき
 わが屍を埋めむと
 願ひしそれも仇なりき
 望絶えなむ老らくの
 なれこそわれが友ならめ
 うさごつらさの數々に
 負ひし重荷をふり棄つる
 静けき夢のかくれ家よ
 勞働もてる少年と
 心やすけき老年の

長き齡の春秋を

うき世の外に過ぐる身は
その幸やいかならむ
まが罪多き人の子の
誘惑しげき風吹かば
安けき里にかへるべし

さしも長閑けき里にして
生れながらの勞にたへ
我なりはひにいそしめば
世は淺ましき風ふかで
花に明けそめ鳥に暮る

かの罪多き衣を着て

いかめしき門守る子らが
あはれに泣ける乞食を
蹴かへすこともあらばこそ
やすけき里の人々は
かたみにかはす憐みの
熱き情もかよひけり

時たちかへる束の間や
今はの際にすゝみ行く
ゆくへ間近き墓の邊に
天の使はむらがりて
美徳の友を迎ふなり

澄める御空にどよむなり

ふりさけ見れば牧場には
夕の乳をしぼるらむ
若き少女の歌もれて
歸りをいそぐ若者に
ひかれ行くなる牛の群
長閑けき聲によばひつゝ

のどけき光陰をいそしみて

末期待つ間の心はも
しづかに過ぐる老の阪
天にきらめく幸を仰ぎ
この世からなる常花の
恵の露や宿るらむ

夕の岡をさすらへば

空吹きわたる風軽く
麓の村にあふれ湧く
百のしらべを送りつゝ
樂しき耳をうちかすめ

池の家鴨の鳴く聲に

たぐふ響は子供等が
學の庭を放たれて
暮れ行く空を惜むにや

家守る犬の遠吠は

そよ吹く風に送られて

胸に憂なき里人が

笑の聲もほのかなり

たのしき百の調はも

湧き立ちかへる夕潮の

律にたへて聞きなされ

わが胸の血も躍るかな

や、黄昏る、薄靄に

しらべは早く消えゆくを

惜みて眺む西の空

二百二十

おもひがけなき一聲を

なく杜鵑あはれなり

ひごり往時をしのびつゝ

けふ夕暮のさすらひに

ありにし状況は、そも何處

今またしげき軒ごころを

榮華にけがす物の音

きのふのまゝの囁きを

空吹く風や忘れけむ

荒れし野末の細路に

おくは涙か露の玉

しげき葎はいたづらに

さまよふ人の影もなし

今若者は里を去り

のこるは一人軀のみ

あはれや水も枯れはてし

井筒に弓の腰はりて

うき世の善悪をかこつなり

消えぬ命を恨みつゝ

たつき求むるさま見れば

あはれ老ひたるさらばひの

小川に芹の葉を摘みて

いこはむ時もあらばこそ

風に身を刺す冬の日

折り焚く柴のしばくも

いばらの徑をたどりつゝ

安き心もなかりけり

夜は臥戸もあら風の

まどろむまゝに夢消えて

はかなき幸のこし方を

夜すがら泣きて明かしけむ

二百二十一

心正しき人なりき

村の賤男にうらやまれ

市のどよみを遠ざかり

さゝやかにりしたつきもて

神に仕ふる真心の

幸ある齡送りつゝ

樂しき里の住居をば

この世の床と定めしが

あした夕にかはり行く

教を追うて人の子が

媚を買はなむ術知らで

すみて馴れにし同胞に

この身ひとつを殘されて

望なき身に落莫の

野邊の歴史を語るなり

かをり床しき百花の

培はれにし跡とかや

主はなくていたづらに

さびしき色に咲み出で、

いたちの路をさざしけり

この主人は、その昔

神の教を傳ふなる

長き記憶の客なりき

胸をば拂ふ白髻は

威嚴の中に溫和あり

うらぶれはてし無頼漢

今はた彼が真心の

熱き情に酔はされて

嵐の花をさどりけり

情の席に招かれし

不具になやめる兵士が

圍爐裡のふちに座をしめて

語りつゞくる夜もすがら

こゝろは高さ久方の

空なる星を望みけむ

みづから立たむそれよりも

倒れし人は憐みの

あかさ心はさすらへる

弱さやからに知られけり

世に爲すこともあらなくに

放縱なるしれ者の

心はにくみ戒めて

その苦は救ひけり

されば戸に寄る乞食等は

あるは受けにし傷をわび
 あるは悲しき追懐に
 撞木の杖を肩にして
 いさましかりし戦の
 たけびの場の物がたり
 語りつゞくる客人が
 言葉の筋をたどりては
 胸の血潮もみだれつゝ
 心の品のよしあしを
 さばく手綱もよそにして
 つなぐ間もなき慈悲には
 われから進む施與の道

苦むものを救はむは
 彼が惜める名なりけり
 さらばよ彼が誤解の
 中にも徳はかゞやきて
 されど義務のいそしみに
 さとくも深く究めつゝ
 よろづに注ぐ真心や
 人をあはれみ神に乞ふ
 情の胸の血は湧きつ
 まだうら若き雛の羽を
 守りて飛ばす親鳥の

愛着しげきそれのごと
 意氣地なき子を懲しめの
 幾重の力試みつ
 光ある世の樂しさに
 曳かむところは勉めしか
 今死の神の手による子
 悔と科とに責められて
 もだえの闇におびえ泣く
 床の邊に年老ひし
 尊き聖立ちにけり
 いま見よ擬せし徳の手に

百千のもだえ消えゆきて
 天の光は病む人の
 くろき瞳に宿しけむ
 今には臨む讚美歌は
 ふるへる口にさゝやきぬ
 かのおだやかに雅びたる
 高きすかたぞ年古りし
 寺院の壇をかざりけむ
 唇もるゝ敬虔は
 くしき力を人になげ
 嘲らむとてつどひ來し
 やからも今はとゞまりて

神に詫ぶらむ祈りごと
赤きこゝろは一筋に
神に捧ぐる血の泉

されば直なる里人は
戀ひし聖のかけにより
里の童もしたひつゝ
馴れし心のたはむれに
聖の笑を分たむと
衣の袖をひきにしが
やさしき彼の微笑は
親の慈愛をあらはしつ

どこ世に照らす日の神の
その頂に宿らむを

空しくかざるフーズ花や
咲きこぼれたる道のへの
やれし籬の傍にぞ
そのかみ村の師は住みき
さわがしかりし其家に
教の鞭をこりにける
おごそかなりし面影の
むかしの友を忍ばるゝ

人のうけにし祝福は
彼に樂しき心あり
人のうけにし苦勞は
彼に痛めるおもひあり

さるを聖の世にうけし
心、愛着、憂愁の
いづれを里の子に分けて
天つ御座にとまりけむ
そのいと高さ心はも
さながらそゝる懸崖の
うづまきかへる黒雲に
そのの半をまかせども

旅を好める彼が身の
心は弱くやさしくて
その日起らむまがごとも
あしたの顔にしのはれつ
さては滑稽の才智には
教の庭の幼子も
笑ひ興する罪なさよ

眉根ひそむる度ごとに
傳へつとふる私語の
心々に通ひては
彼が惱や告げられて

情にあつき人なれば

愛の腕に曳きしむる

あごそかなりし手綱には

あやまち招くよすがあり

彼が智識の程こそは

里の噂にのぼりけれ

筆のはこびや珠算はじき

土地のひろさを測るわざ

かはる期節の知らせより

船の量をも見るすべの

いづれ足らはぬ方ぞなき

なほも是非をばいさかひの

舌のさばきもしかすがに

村の聖にはやされぬ

そはわが敵に負けじとも

なほ花ちらすすべ知りき

物知り顔のほこりかを

長き言の葉どよみなく

いと聲高に語るとき

立ちめぐりつゝ見守れる

賤の男いかに驚きし

つどへばつどふ人々に

今はあとなき越し方や

かつては道を行く人の

目をば惹きけむ酒店の

しるしの旗のなびきにし

はかなき跡と誰か知る

その世のさまは荒れはてゝ

くづれし家もなつかしく

白髪頭をうちふりし

老ひたる翁、あるは又

一日のつかれ休めむと

笑みて憩ひし若人や

ちさき頭脳をふりしほり

知れるかぎりを運びつゝ

いや吹きのおすつむじ風

消えて跡なき稻妻や

彼が譽は過ぎにけり

罪なき村の子をあつめ

長閑けき幸を迎へけむ

その地も今は忘られて

幾とせかへる野路の草

繁りまされるからたちの

緑の蔭に我立てば

村の司のひとくが
 おもひも深き口つきに
 さいもいかめしきそぶりして
 時おくれたる世話がたり
 なつめ色濃くさく泡の
 甘き杯幾めぐり
 話の数は盡さざりき
 かへすすべなき小田巻や
 亂れし胸の絲くりて
 たどる昨日の夢のあと
 多くの人のつどひけむ
 美しかりし客の間の

壁は眞白にみがゝれて
 床には清き砂をまき
 漆にぬりし時辰儀は
 扉のかげに刻みしよ
 夜は床とし晝の間は
 簞笥にかへて二途の
 つとめにあてし箱ありき
 十二の教訓あるは又
 かるた遊びの二途に
 用ひられたる繪もありき
 さむさに堪へぬ冬ごもり

さびしき窓の夢さめて
 そよ吹く東風の音なへば
 圍爐裡は紅の火をたちて
 みどりに芽ぐむ河柳
 かをりも高き草花は
 八重の衣にかざられつ
 やれし陶器時を得て
 いづれもみえをつくりては
 さながら妙にならびつゝ
 烟の筒を廻りしを

消えては同じ昔の花
 美はしかりし家居さへ
 今はた脆き莖をば
 支ふすべなき棟柱
 あはれや人の心はも
 すぎにし方のけなげさを
 分つすべなき世のさまや
 悲しからずや世の人の
 苦き浮世にさひなまれ
 樂しかりけむ古へを
 追はむも如何に暇なく

榮華のさまも幾とせか

興に入りけむ里人や
床屋男の世話がたり
あしたに森をおどろかす
樵夫の歌も聞きえじな

鍛冶屋は塵のみみ清め
つかれし足をさしのべて
夕の窓に語りしを
今はた聞かむいづこぞや

送りつ迎ふ客人の
ゆかしき膳にのぼるなる
酒の色香を見まもりし

二百三十二
旅籠の主人今いづこ

しいられたりし酒杯や
その唇の耻らひを
紅の袂に蔽ひてし
わかき少女もありけむを

いやしき賤の里人が
たゞ一重なる幸を見て
驕らばおこれ富人よ
けなさばけなせあて人よ
われが心にたぐはむは
自然の里の幸ぞかし

ひかりかゞやく藝術
露のほまれを何せむに
ひなにあふるゝ歡樂の
とこ世の花のさちを見よ

げにや自然のみひかりよ
人の心は天に合ひ
けだかき力得むものを
されば自然の歡樂は
透きたる胸に宿りつゝ
いさかひ、悩み、苦みの
世の憂き事をよそにして

かの愚なるあて人は
夜半にもわたる戲の
長き驕にふけりつゝ
みだりがわしき財寶の
にぶき光にくらめきて
仇のかざりを競ふなり

世の戲にゑひしれて
半ば飽きたる心には
骨折るわざの樂に
たえぬ心を痛むなる

世におどづるゝならはしの

あざやかなりし樂も

迷ふ心の雲湧けば

心の闇をさすなり

清けき花は脆くして

しこ草しげき世のならひ

政事まつりごととる人々よ

なれが治むる天が下

なとて覺さとらぬ事やある

今あて人はいや榮へ

貧しきものは弱りゆく

貧ひんと富とみとの隔へだなす

そは仰おほも汝なれが義務つとめかや

荷積にきされたるあら金や

八重潮遠とくはき外國がくにの

舟入り來るをあて人は

よろこび迎ふおるかさよ

足るをし知らぬ守錢奴しせんぬや

あらゆる寶たからあつめむと

祈いのるやかからのさりながら

めぐむを知らぬうつけさよ

かゝる寶は朝顔の

露をも待たぬ名ならむを

知らずや汝なれが集めけむ

用なき物のかずくゝに

世には益ある品さがり

貧しきものゝ哭なくを聞け

富貴とみと驕奢おごりの痴者しんものは

あまた貧しき人の子が

のぞめるものぞ慾ほふかき

胸の底井にかきさらひ

罪もて築く公園の

毒どくある土地をひろげつゝ

あるは彼等が蓄たくわふる

從者ずさ獵犬りやくけんや馬にかふ

しこの肢體みづちをまごふなる

なめらかなりし絹きぬごろも

そは貧民ひんみんの失なへる

あたりの野邊のへの代しろなりき

あはれ寂さびしき戲あその

おごりに暮くす其家そのも

かつて野中の伏屋ふしやより

情なさけも知らぬ足裏あしうらの

ふみて取りにしそれなりき

世に用のある品々は
虚飾の品に蹴飛ばさる

いづれ樂しき土地なるも
やがては同じ落莫の
華美のあらしに渦まかれ
黒雲さそふ時は今

さらば眉目よき少女子が
あつき血しほの沸かむとき
かざらぬさまも、しかすがに
若き男をまどはして
仇なる色にもておそび

羅綺錦繡の美を街ふ

世の似而非人を笑ひけむ

なれが瞳にたゞよひし

ありの儘なる装に

さても嬉しき幸あらめ

されど哀れや人の子が

は長しへの春ならじ

花一時のかほばせも

やがてはかなき小夜嵐

夕、鏡にむかひては

すぎにし影をたどりつゝ

見よ人の子が鑿の痕

自然の上に加ふれば

似而非人の目を眩まして

玉ちりばめし高殿の

かゞやきをゝる空の上

仇し色香の風ふきて

さらば巷に走らむか

されどとよみの此處も又

同じ榮華の塵の中

いやさかへたる奢には

あはれ人の子やせしむる

まさなき匠さはなるを

今又いそぐ粧に

戀の常花とどめむと

願ふも憂しや己が身の

いまし取り出すあや錦

悲しからずや贅澤なす

風吹さすさぶ此里の

行方は空し、よみのとこ

はじめよそひし野の面の

華は一重のものなるを

俄にまさる眩めきに

衰微のきざしあらはれて

人は逆巻く罪ごがの
波の襲ひにちのゝきて
安きころもあざらむ

こゝに輝く錦繡の
きぬをまとへる可あり
かしこに弱き歩をたどり
顔青ざめし民もあり

こゝに金鞍輕袖の
驕にふけるやからわり
かしこに凄く路の邊に
黒き獄屋のいらかあり

見よ夜をつげる歡樂に
あでをば競ふ高殿や
にしきのみけし綾の袖
薔薇の花の香を吹いて
千萬金の美をあつめ
莊麗極むむらがりの
どよみみなぎる大廣間

外にはたける松明の
ほむらや天にかゞやきて
轆ふれ合ふ輓轡の
車の響たえ間なし

くるしみなげの此様の
内にひそめる刃あり
うき世に咲ける歡樂の
花にも嵐なくてやは
まつり事とる人の子よ
これ汝が叫ぶ忠信の
人を治むる道なるか
なとて瞳にうつらざる
見よ飢に泣く家あるを
そこにふるへる孤女あるを
そは其昔あたゝかき

春日に咲きて賤が家の
蝶を酔はせし花なりき
うしや旅寝の草まくら
枕の敷をかさね來て
小夜の嵐に泣きわびつ
親、兄弟や友とちに
別れて出づるさすらひの
女の道もふみまよひ
千々にみだるゝ悲の
首も重くうなだれて

こがらし寒き冬の日や

そぼふる雨に身もぬれて

いたくも瘦せし腕かひなには

かつてや、あつき紅の

若き血しほの湧きけむを

市の榮華を見もりては

たのしかりけむさき前の日の

さまをしのぶも耻かしや

あかね色こき袖の香も

車によせし幸も

消てはかなき花の夢

あゝなつかしきオーパンよ

いとしき汝なれが懐なごころに

今なほかゝる薄命の

あはれを分つ人やある

さむきに凍え飢に泣き

胸の痛手をあさへつゝ

仇し男を恨みては

その門の戸に立ちよりて

涙にあかす子もあらむ

あゝ淺ましき塵の世を

のがれ出でゝは故里の

遠き思をしのびつゝ

涙の袖やしぼるらむ

たどりくゝて行末は

たゞよふ雲のはて遠く

西べに隔つ半球の

馴れぬ舟路の波まくら

木こ精たまきひそめる島山の

おどろが下にふみ迷ひ

わが踏む足の音にすら

おのゝき震ふあさましき

あるは荒れたるアルタマの

河の岸邊にさすらひて

つぶやく瀬々の響だに

胸の動悸うごきは盡きざらむ

海山へだつ外國とくごくの

目にうつり行く數々に

千々の恐れはいやまさる

あらがね鎔けむ其色に

照る日は上にかゞやきて

するどく堪へぬ猛烈はげしいの

餘炎あまのをこそは注ぐなれ

どこ世にくらき森の中

鳥も調しらべを忘れけむ

音をこそ立てね蝙蝠こぶたの

むらがり垂るゝ常闇とこやみや

おどろに生ふる毒草どくそうの

野のに渦うずまける蠍せみは

あたりにあつむ死ひつちの骸むくろ

かゝるあたりを落人おちびとは

執念しつねんき性さがの蛇へびの

音おとにぞ胸むねをいためつゝ

あやしき足あしにしのび行く

餌食えじきを待てる大虎おほいこは

巖根いわねに身をば潜めつゝ

されど獸けもののそれよりも

人ひとをこそなふを好むなる

醜みにくの夷あまのむらがるを

行く手さへぎるまが物の

恐れはさこそ、さりながら

なほ恐ろしき蠱術まじものの

旋風つむじ一たび狂ひなば

する墨流すみながす天地あまのの

荒れのすさびに變りはて

魔神劍まじかみやふり立つる

あゝ幸さいちうすき身み一つを

旅路りょろの雲うみによそひつゝ

この日ひ、門出かどでの野のに立てば

恨うらみはつきぬ涙なみだかな

見ぬにもまさる憂うれさつらさ

野山のやまよ、しばし目をさがれ

神かみよ、とざしの雲うみたれよ

はや樂たのしみは去りはてゝ

男おとこは今いまや逐おそはれつゝ

見しらぬ里さとに行かなむを

すみも馴なれにし古家ふるやをば

あゝなつかしき故里ふるさとの

しづかに澄めるいさゝ川がは

千草せんそうよそへる野のの景色けいしき

いづれ床とこしき様さまなるを

おもへば戀こひし森もりかげの

緑きよの草くさをかたしけば

鳥とりは梢えだにうたひつゝ

かたみに心こころよせにけむ

やさしき妹いもうとが手てをとりて

たのしき戀こひを歌うたひてし

その故里ふるさとの空そらいづこ

あかぬ名残に見めぐりて
おもへば曇る雙の眼に
涙たえせぬ哀れさよ

おそのの眉根むすぼれて
去りがてにする故里に
泣くべくこそは戻るなれ

さらばよ盡きぬ名残をば
五百重の雲にのこしつゝ
永の別と立ち出づる
せめては西の海のはて
わが家に似たる家あれど
むなしき望たどりつゝ

さはさりながら、はてもなき
海原遠くながめては

さすがに強き心根に
老ひたる人は新しき
國に行くべく定めつゝ
心の弱き人々の
薄き幸をば泣きにけり
されど雄々しく志す
心の内におのがじゝ
求めは何か外國の

安き冥路の墓にこそ
絶えし望はさりながら
彼がいとしき少女子の
つきぬ涙をいかにせむ

つきぬなげきを語りつき
たのしかりけむ故里の
小屋に別をおしみけり

言はずにつゞく様見れば
あはれや花の若き身に
粧、いつか怠りて
しほれし頸をうなだれつ
左は父に手をひかれ
右はいとしき戀人の
若き腕にいだかれて
涙にもろき母親は

あふる涙をはらひつゝ
あつき血しほの沸きあへる
まごゝろ籠めし唇に
あばえず寄する接吻を
いとし愛子の頬にして
あはれを含むなつかしの
かひなに堅く抱きしめぬ
夫はひたすらなくさめの

あつき情を與へつゝ

男らしくも悲の

黙思に入りし哀れさよ

あゝ驕傲よ、汝こそは

天の使命にのろはれよ

なが吹きあれし巷には

いくその悪を醸しけむ

浸み入る汝が毒薬は

自然に湧ける歡樂を

奈落の底に蹴おろして

いくその罪をつくりけむ

汝が襲ひし國々は

まさなき病にうち沈み

仇し色香に汚されて

腐敗の種は蒔かれけり

毒を盛りたる杯の

次第にめぐりくは

けがれはてたる醜惡の

塊とこそかさむなれ

彼が魔力を口にして

弱りはて行く人の子は

冥路の底まで沈みつゝ

やがて滅ぶる世の常や

さなり世の人、心せよ

今なほめぐる頽廢の

轍や半ば過ぎけむを

心しづかに思ひ出の

わが沈黙の束の間も

走りてやまぬ魔の車

美德は跡を絶たむとす

波止場につなぐ舟の帆は

今や落ち行く賤の男が

悲し運命を載せながら

あした吹き來る風まちて

八重の潮路に向ふなり

行く手のうさを身にしめて

かたみにいとふ夫妻らが

やさしく熱き紅の

情の泉あふるらむ

せめては末を一すぢに

天つ御神に祈りつゝ

げにこそ堅き忠實や

誠をこめし友愛の

心を神や守らなむ

榮をいかでかへすべき

情もふかき少女子が

めぐみやさしき詩の神の

光の前にぬかづきて

世に淺ましき痴者の

仇なる笑を拂はむと

祈るも清き其心

いまや滌季の世に居れば

わが敬愛の詩の神の

御名は早くも忘られて

似而非者の群にさげすまる

我はた辱を世にうけて

ひとり誇れる詩卷よ

なれを戀しき友の身と

宿世の夢をたどりしが

わが喜も悲も

汝よりこそは起りけれ

過ぎにし罪の零落に

みえを求むることなけれ

悔る改むる真心の

さち衰へし時にして

トノ湖畔の崖の邊か

バンパマルカの頂か

はた赤道の直下の

あつさ烈しき地の上か

または極地の雪の上か

いづれ隔つる海の外

はじめ逢ひけむ其時は

われうらぶれの身なりしを

今はた同じ夢のさま

神の腕にすがりてぞ

導きわざにすゝまむを

なれも美神にかしづきて

たかき冥助を祈るべし

さらば別れむ、幸あれな

さらば別れむ、さりながら

汝がゆかしき歌聲は

いづくの空に傳ふらむ

きよき調のふるふごと

神よ常世に守るべし

氣候もまさなき残酷の

たえぬ答をゆるむべし

信、無視せる人の子を

なれが調に助くべし

世の道迷ふ子もあらば
慾はなるゝを教ふべし
天より受けし健康の
肢體を高くさへなば
貧しくとても、しかすがに
又なき幸と教ふべし

勞苦に築く浪よけを
くるひ逆巻く荒波に
洗ひ去られしそれのごと
よこしまなりし利に酔へる
國の榮は東の間に
脆く碎けてあともなし

さるを揺がぬ大巖の
波風あらふ中に立ち
雄々しきさまに聳ゆごと
自恃の心は時にすら
戦ひいどむ力ありなむ

夕紅葉終

明治三十八年十二月十日印刷
明治三十八年十二月十五日發行

夕紅葉奥附
定價金參拾五錢
〔郵税金六錢〕



著者 久保 得二
東京市本郷區駒込西片町十四番地
發行者 日高 藤兵衛
東京市本郷區千駄木林町百九十六番地
印刷者 渡邊 爲藏
東京市京橋區日吉町四番地
印刷所 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

發行所

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

大 賣 捌

東京市京橋區尾張町
 東京神田區表神保町
 東京神田區裏神保町
 東京日本橋區箔屋町
 東京京橋區南傳馬町
 東京日本橋區通三丁目
 東京神田區表神保町
 大阪心齋橋南久太郎町
 大阪南本町座摩ノ前
 大阪備後町四丁目
 京都三條寺町
 京都二條寺町
 甲府市柳町壹丁目
 水戸泉町
 野州足利町一丁目
 廣島市
 岡山市岡山町
 周防國岩國町
 山口大市町
 高知市種崎町
 熊本市新町二丁目
 熊本市
 鹿兒島市松山通り仲町

警 醒 社
 東 京 堂
 上 田 屋
 前 川 屋
 目 黒 書 店
 林 平 次 郎
 修 學 堂
 福 音 社
 杉 本 書 店
 吉 岡 平 助
 聖 書 房
 若 林 書 店
 大 塚 柳 正 堂
 川 又 銀 藏
 青 木 書 店
 積 善 館
 奧 田 金 昌 堂
 白 銀 日 新 堂
 同 支 店
 澤 本 書 店
 長 崎 次 郎
 好 文 堂
 久 永 新 藏

筑後久留米市
 靜岡市
 横濱市
 同
 同
 同
 前橋市曲輪町
 越後國水原
 新潟古町
 越後長岡
 金澤市片町
 高岡市守山町
 福井市佐桂枝中町
 信州長野市大門町
 信州松本本町
 信州諏訪町
 仙臺市新傳馬町
 仙臺市大町五丁目
 陸中一ノ關町
 陸奥弘前市土手町
 青森市米町
 秋田市茶町
 北海道札幌區南一條西二丁目

菊 竹 書 店
 吉 見 書 店
 第 一 有 隣 堂
 弘 集 堂
 勉 強 堂
 弘 文 堂
 煥 乎 堂 書 店
 西 村 六 平
 西 村 支 店
 覺 張 次 平
 宇 都 宮 書 店
 學 海 堂 書 店
 品 川 書 店
 西 澤 喜 太 郎
 松 榮 堂
 日 進 堂
 紀 港 堂
 藤 崎 書 店
 佐 藤 喜 年
 今 泉 道 太 郎
 同 支 店
 成 見 清 兵 衛
 富 貴 堂

明治三十八年十二月一日印刷
 新刊發行の都度増補訂正す

有 倫 堂 出 版 書 目

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日 高 有 倫 堂

主意書

理想と光明とを經となし、趣味と利用とを緯となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての際物に、苟しくも文明の増進と風俗の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯快なる新進文士たるとを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙むり御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雜誌の精評を掲げ御觀覽に供し來たり候も漸次増加し其數多くして載せ盡す事不能不待止出版書目而已を掲げ御觀覽に供し御注文を仰ぐこととしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

泉鏡花著
鏑木清方畫

近刊
小説
誓之卷

定價七十錢
郵稅十錢

(上製總クローズ美本)

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以て、天と地と、人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也。

大町桂月著

新刊 我が文章

定價四拾八錢 郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在真情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸快調にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり生の文の如きは實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

近刊 紀行文 山水寫生

定價四拾五錢 郵税金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して、他人の模倣を容れざるものなり。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讚賞し、天地の美を景仰するもの、机上この書なかるべからず。

徳田秋聲著

新刊 小説 花たば

定價四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の数は何々ぞ、紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さざれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり。秋聲子の真技倆と抱負を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高覽を希望す。

文學士 小原無絃譯

新刊 原文 シェレリの詩

定價參拾五錢 郵税金四錢

シェレリは一個の豫言者なり抒情詩人の醇なる者なり其詩を作爲するや神興の白熱を以てす光焰萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬空を奔るが如し無絃子其詩を心讀する多年今や彩筆を揮つて遺憾なく朗々として眞に高誦するに足る乞ふ詩神の寵兒たる者一卷を抱いて詩腸を肥せ。

文學士 大町桂月先生選評 日高有倫堂編輯部編纂

近刊 明治大家文集

定價金七十錢 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず文星森列著作の多きと汗牛充棟も管ならず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のとにあらずこの書正確なる批評眼を以て明治三十八年の間論文といはず美文といはず小説といはず苟も文章を以て一家をなす特色を有せる文豪數十名を選びまた其名文豪の特色を發揮せる名篇を選び添ふるに桂月先生の詳細なる批評を以てす明治文章家中の眞の文章家は集つて此の書にあり眞に之れ明治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞の模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書也

秋元蘆風譯

新刊 獨野 葡萄

定價參拾五錢 郵税金六錢

收むる處、詩、數十篇、況く、獨逸詩人の傑作中、主として、叙情的逸品を採つて、之を邦語に翻したるもの、原詩の對照と、卷末の評註とは、又以て、獨逸詩人の面影を窺ふと同時に、庭園の花に酔るものは、來つて、野邊の果實を味へ。

近刊 原文 バーンスの詩

定價金參拾錢 郵税金四錢

文學に平等主義を持して革命思想を鼓吹せし者は實にバーンスを以て古今東西隨一と爲す其詩や古法舊格を脱して天真朴直なる精神を現に最も創新を以て勝る今や無絃子の靈管に依り譯成り多感多情にして功名心燃ゆる如き若き田園詩人の面目鬚として其一卷に溢る満天下の才子佳人幸に愛讀の榮を吝しむ勿れ

大町桂月著

新刊 代表日本人

定價四拾五錢 郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらざりて事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛敎以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の真相を知らむとせば理論のみならずは不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性の何たるかを説き建國以來その特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ敎訓を與ふ一風變はれる日本國民の歴史也兼ねて道德經也。

大町桂月先生選

新刊 時代青年文集

定價四十錢 郵税金六錢

世に活氣あり情熱あり純潔玉の如きは青年にして青年は實に時代の花也火也當代の文豪桂月先生最も青年を愛し指導敎訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中

帝國夏目先生序
大學上田先生文
教授ロイド先生文
チャールスラム原著
文學士小松武治譯

近刊 續沙翁物語集

定價七拾錢 郵税金八錢

譯者曩日沙翁物語十篇を公にして世間の好評を博し期中ならずして第六版を重ねるに至れり今又更らに自餘の十篇を譯集して續沙翁物語集を篇す各篇悉く名什譯筆例によりて明快加ふるに細密なる註解を施して讀者の便益を計れり

文學士 久保天隨著

近刊 文壇獅子吼

定價參拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは、評論家としての著者の態度なり、その問題は、文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り、虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收むるところ、凡そ七八十篇、長短錯落、理致あり、情趣あり、眞個人間稀に見るの好文。

より其尤なる者を抜き厳正なる批評を加へて時代青年文集一卷を編せらるる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり成な綺爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附録には文壇の一大疑問たる夏目先生の「一夜」を始め當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

東宮侍講 本居豐穎先生著

近刊 紫文摘英

定價四十錢 郵税金八錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を敎科書に使用せむには餘りに浩漭に過ぎ又事實に悖倫非徳の箇處多く女子敎育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十帖を校訂して其の英を摘み薈を去り最も絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」一卷を編せらるる即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其大意を窺ふべく併も紫文の妙は此一卷に盡くせり各種女學校の良敎科書たるは勿論荷も國文學に志あるの士女は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

文學士 久保天隨著

新刊 美文 夕紅葉

定價三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韵生动、豪宕の氣、筆端を繞り、か、蝶、遠城のふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、一唱腕鳴り肉躍る。蒙古の大英雄を謳歌し、一唱腕鳴りるもの、唯だ本書に於て之を觀するべし。

細越夏村著

近刊 靈 笛

定價參拾錢 郵税金四錢

日光暉々の野を、深き水の行くを見ずや。水面は煌爛として、金波銀波何ぞ燦々の極みなる。然れども、想へ、十尋の底、油々として運行する流れ、何ぞ夫れ幽冥なるや。斯の如きは、詩人夏村の胸に澎湃するや。想の注流なり。詩人夏村の胸に澎湃するや。坐して、深底の音を洗ふ可く、芳草岸頭、清麗自然の「靈笛」の奥秘なる幽韻を聴かむ。

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著
五改册 向上の一路 定價參十錢 郵稅六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀
め我が國に於て哲學的に社會主義を建設した
るは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者
の駁論は益々新社會主義の本領を發揮し
共の光彩陸讀たり▲近時の一大著述にして
情理該ね鑠る者は此書なり敢て江湖の讀書
子に勸む
大町桂月先生 中内蝶二先生合著

版六 少女と山水 定價參拾五錢 郵稅六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて
山水の優婉にして可憐蝶君の艶麗の文少女
の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月
女の酒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表
に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を
縦にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく國の
讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙
の美を味ひ給ふべき也

文學士 大町桂月著

版七 わが筆 定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓
あり才氣あり霸氣あり或は洒脱にして沈痛
に或は眞面目に或は談諧に短くして寸鐵に
を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに
一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆
卓見を以てす家庭學校社會及び文學等に關する
卓見を放つ天地間有情の快文字也
大町桂月先生序 角金潮聲著

版參 宇宙と人生 定價貳拾五錢 郵稅金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所なら
んや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究
め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生
の眞諦を内觀直視せんとす茲に詩人あり天
地の美を動き眞に肉薄して以て人生の本義
を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩
人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の
致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを
謳はんとする者は來りて本書を繙け

山口先生序 シルレル原著 齋本仙醉譯
新刊 接神術 定價貳拾貳錢 郵稅金四錢

天師と稱して大聖伏羲の古道を唱導する著
者が、詩人シルレルの雪の如く皓く月の如
く幽に、花の如く艶なるものを、理想の一卷、接
神術一名神智學なるものを譯して、聖靈は接
神母なりとの大論斷を試む、殊に、確かに思想界
に大波瀾を起すべき著、一人一首を附録として
人の母心を讚美せる百人一首を附録として
東郷大將母堂に捧ぐ、荷くも文藝に志ある
士女は之を讀まざるべからず

文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 岩野泡鳴著

新體 詩集 夕潮 定價參拾五錢 郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏し
て、うちに無窮の悲觀を備ふ而してその行
文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、
沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、
荷も久遠の感慨あるものは來つて、この冥
想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

海老名禪正先生著

版再 宗教々育觀 定價五拾五錢 郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老
名先生は本書に於て教育問題に關する所信
を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動す
るに足るものあるや必せり見よ先生が該博
の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂
麻を截つるの感あらしむ而かも本書の内容は
單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に
對する先生最近の思想を發表せられたるも
の實に濛々たる我邦思想界に於ける一大探
海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目
して本書の光輝に接せよ
匿名名隱士著

版七 破天人論 定價參拾錢 郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議
的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人
生的に堂々鼓吹したる壯快の書也本書の出づ
るや全國各新聞雜誌の大好評を博せり以て本
書が如何に愛讀せらるゝかを印刷せり以て本
七

網島梁川著

再版 梁川文集

定價 金貳圓廿五錢
郵稅 金拾五錢

上製總クローズ 頁數約千頁類美本

梁川綱島先生、其高邁博大的識、精嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先生は談理是れ能とする學究に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天を戀ひ此戀を湛へて日夜に瞑想し且暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を談すれば簡淨にして靈活、感興を遣れば深遠にして豊麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を成して現代思想界の一角に抜く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追従するを許さず、是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯

訂正 獨逸 詩粹 紛紅集

美術的製本 定價 卅五錢
郵稅 四錢

ゲーテ、シルレル、ケルチル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精真なる筆を以て、翻譯したるもの、一字一句の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、蕩然たる香氣、人をして醉はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

萬朝報記者 茅原華山編纂

青年と詩吟

定價 貳拾五錢
郵稅 四錢

人生豈思詩情なかるべけんや「青年と詩吟」は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦せる、漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此巻を抱いて誦誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

岩野泡鳴著

新體 悲戀悲歌

定價 參拾五錢
郵稅 金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化する、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「想の詩人」一海の詩人「今やまた」人間界の詩人「と呼ばんとす、向上か墮落か、乞ふ、この「悲戀悲歌」を見て、之を判じ給はんことを

高橋五郎著

杜伯品藻

定價 卅五錢
郵稅 六錢

一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如く著者此世物主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人住する如し其媿妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評騰する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

文科 夏目先生校閲 チャールズ、ラム著
大學 上田先生序文 文學士 小松武治譯
講師 ロイド先生

訂正 六版 標註 沙翁物語集

定價 七十錢
郵稅 十錢

●上製クローズ 四百頁類美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることもなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨壁シエイクスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を抜萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閲を仰ぎたる者にして荷も沙翁戯曲の何たるを窺はんご欲するの士は須らく一本を購うて座右に備ふべきの書也

海老名彈正先生著

再版 基督教本義

上製 郵税十五錢
並製 郵税八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解
答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放て
る豫言者牧師教祖の抱懐せる思想經驗に依
らざるはなし本書は基督教界の明星海老名
彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモ
セより下ルテシユライエルマツヘル
に到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教
の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の
榮を賜へ

齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

トルストイの宗教論や大作小説や、洵に
是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶
の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる
所以蓋し茲にあらん、然れども人は狂瀾怒
濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂

定價金參拾錢 郵税四錢

海老名彈正先生著

人道

定價 拾錢
郵税 貳錢

先生時局に關し大に感慨するごころあり豫
言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰
を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元
氣を鼓舞作振せんご欲す營に軍國々民の必
讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子な
り廣く世上の需要に應せんご幸に陸續御
注文を賜へ

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價金參拾錢
郵税金四錢

露國の巨人トルストイ伯が今回の日露戰爭
に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは
何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫
敦タイムズに於て「日露戰爭觀」と題する一
大論文を掲げたり今や邦人鶴首して其内容
の全斑を知らんと欲する時に際して其紹介
者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇
を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さん
ご欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共
に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は
即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。
讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪
が、如何に諄々として、天使の如き聲を以
て、博愛、自然、自由、労働の大々的福音を鼓
吹するかを視ん。

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價參拾錢
郵税四錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀
め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我
國現時の諸大家の成功の秘訣を知らんとす
る者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父
の警咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦
學古今誰か苦學せずして成功したる者や
なる尙も學生にして苦學の心得なき者は忠實
なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は
學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たり
ご謂ふべし請ふ一本を座右に供せられんご

横山筆助著

再版 催眠暗示術 應用自在

定價參拾錢
郵税四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖ど
も大抵不充分の譯書、實際に益なき空論
的なるもののみ多し、之に反して本書は經
験に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新
の學理と諸種の方法とを参考して何人にも
理解し得るやう又極めて懇切に述べられた
るものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書
を以てす、本書出で、我が催眠術界の知識
することを必ず大ならん、我が催眠術の諸君御愛讀
あらんことを。

茅原華山編纂

我々と人

定價貳拾錢
郵税六錢

本書は世間の好評を博したる『向上の一路』
生命一體篇を別冊と爲したるものにして萬
朝報の黒岩先生を始め諸家の談論文章を筆
録したるものなり、柳は綠花は紅、是書を
讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座する
の感あるべし

鈴木秋子女史著

再版 軍國の婦人

定價廿八錢 郵稅四錢

戰爭の裏面に婦人あり戰爭は男子のみにて
なすものと云ふものは未だ以て今日の時局
を語るべからず本書は實に婦人戰時に於て
なすべき活動の方法及び戰爭と婦人との天
職を説きたるものにして事勢に適切なる事
は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力
むるものは必ず一讀せざるべからざるの書
也

基督敎講壇集

定價七十錢 郵稅八錢

本書は眞に生命の麴麩靈活の根原たる現代
基督敎界のあらゆる大家の説敎を網羅掲載
したる雜誌講壇の全部を合し改冊せしもの
なり居ながら各大家の口演を聽問する好冊
子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛
讀の榮を給へ

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

新刊 日本名家手簡

定價金參拾錢 郵稅金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰
文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せん
と欲するもの先づ先輩の往復文を研めざる
べからず、是れ本書の出る所以なり本書收
むる所我國大家の模範文に附するに各其小
傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟
くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは
男女を論せず一讀せざるべからず

